アニメのお仕事・改

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アニメのお仕事・改

【Ｎコード】
Ｎ３６５０Ｖ

【作者名】
万墨人

【あらすじ】
アニメ制作会社【タップ】に集まったスタッフは、奇妙な？声？に導かれ、自分たちが制作しているアニメの世界へ飛び込んでしまう！　何とか元の世界へ戻ろうと悪戦苦闘を続けるスタッフたち……。しかしそのためには、アニメの世界で『アニメのお仕事』をしなくてはならなかった！　以前、このサイトで連載していた『アニメのお仕事』を全面的に改稿したものです。登場人物はほぼ、同じですが、エピソードは完全に別物ですから、楽しんでください！

出社

「お早う御座います……」

都内某所、杉並区の青梅街道から少し奥まった住宅街にあるアニメ制作会社【タップ】のドアを開け、市川努（いちかわつとむ）は、そろりと顔を制作室に突き出した。

ガラス・ドアには、尖がった頭と、尖った耳、吊り上がった細い目をした子供の顔が浮き彫りになっている。【タップ】のシンボル・キャラクターだ。

「お早う」とは声を掛けたが、時刻は真夜中である。

アニメ業界では、昼だろうが、夜だろうが常に「お早う御座います」と挨拶をするのが慣わしだ。

身長百六十五センチ、体重は五十キロを切っている。なんとも形容のしようがない色合いのジャージの上下に、肩からは重そうなショルダー・バッグを掛けている。

両目はぎょろりと大きく、やや前屈みの姿勢と、顔に架けている古臭い黒縁の眼鏡のせいで、どことなく昆虫っぽい雰囲気を漂わせていた。

顔付きは、まだ高校生に見えているが、実際のところ、今年で二十二歳になる。

職業は作画監督。

今回【タップ】が制作する、新シリーズの作画監督を引き受けて

いる。今夜が、第一話の打ち合わせである。

深夜

時刻はすでに深夜十一時を半分過ぎ、真夜中である。

とはいえ、アニメ業界では、珍しくない。珍しいのは市川の若さだ。普通、もう少し上の年齢になってからなるものだが、市川はこの歳ですでにベテランであった。

何しろアニメ業界に飛び込んだのが、中学卒業と同時である。

大抵、高校を卒業して専門学校を通過してアニメ業界に入る例が多いため、ほとんどの新人は二十歳過ぎだ。

最初に市川を面接した動画会社の社長は、両親を伴って面接に来た市川を言下に断ろうと決意していたそうだ。

が、市川が持参したスケッチ・ブックを一目見て、仰天した。中学のころから描きためた市川のアニメ・キャラは、すでにプロと同等のレベルにあったのだ。

その場で就職が決まり、入って数ヵ月後には早くも原画を任されるほどだった。原画はアニメの鍵となる動きを表した絵であるから、相当な熟練と、観察眼が要求される。

市川を知る者は「神童」とすら形容した。

その市川が【タップ】の正面玄関に立ち、躊躇いがちに、制作室を窺っている。

制作室には人気が無く、天井の蛍光灯が煌々とした明かりを投げ

かけている。市川は玄関でスリッパに履き替え、制作室の中へ、ひょろりとした痩躯を踏み入れた。

スケジュール表

入ってすぐのところにパーティションがあって、そこには【タップ】が過去に制作したアニメ番組の宣材ポスターが何枚も貼られている。

とはいえ、【タップ】がメインで制作した訳ではない。

ほとんどが下請けで制作したものばかりだ。

制作室に入ると、目の前にスケジュール表を書いたホワイト・ボードが壁に架かっている。ボードにはマジックで「打ち合わせ」「作画イン」「回収」「スキャニング」「編集」などの文字が様々な色で書かれ、その間には矢印が何本も引かれている。

アニメの制作がデジタルに移行して、それまでのフィルム撮影は完全に姿を消した。以前のスケジュール表には、「撮影」「現像」などの文字があったが、今は「スキャニング」が替わりに記されるようになった。

市川は眉を顰めた。

「誰もいねえのか……？」

独り言を呟くと、ぺたぺたとスリッパの音を響かせ、ずらりと並んだ制作デスクの間を歩いていった。

デスクにはそれぞれ、パソコンが用意されている。

アニメにコンピューターが導入されて長い。制作室の片隅には、大き目のサーバーが、でん、と設え、微かなアクセスの音を響かせ

ていた。パソコンの画面には【タップ】のシンボル・キャラクターのスクリーン・セーバーが、ゆっくりと画面をランダムに動いていた。

と、市川の足が止まる。

灰色のデスクの向こう側から、両足が突き出している。両足の持ち主は、スチール椅子を何脚も並べたその上に、ひょろ長い身体を横たえていた。

制作進行

市川は足音を忍ばせ、横になっている人物の顔を覗きこんだ。

身体もひょろ長いが、顔もまた長い。秀でた額に、高い鼻梁。いわゆる白皙の美青年といった形容がぴったりくる顔立ちだ。

青年は椅子の上に仰向けに寝そべり、両目を閉じている。微かに寝息が聞こえる。

眠っているのだ。

ぴくぴくと市川の唇が痙攣した。市川は自分の顔が、見る見る険しくなるのを感じていた。怒りの衝動が込み上げる。

「おいっ！」

金切り声を上げ、同時に脚を飛ばし、青年が身体を横たえていた椅子を蹴り上げる。

「はっ、はいっ！」

がたたん、と大袈裟な音が制作室に響き渡り、青年は椅子から転げ落ちた。市川は喉も張り裂けよと思い切り叫んだ。

「三村っ！　人を呼びつけておいて、呑気に寝ているとは、何だっ！」

三村、と呼びかけられた青年は、じたばたと見っともなく蜘蛛のように長い両手両足を足掻かせ、床にぺたんと尻餅をついた姿勢で

市川の顔を見上げた。
瞳がまん丸になり、驚愕の表情が浮かぶ。

「あっ！　す、すみません！　つい、仮眠を……」

三村健介（みむらけんすけ）。市川と同年齢である。アニメの制作進行を担当している。三村は市川にどうしても今夜【タップ】に来るよう、懇願をしていたのだ。

三村は、ようやく立ち上がり、ぺこぺこと何度も頭を下げた。三村の身長は百九十センチあまり。上下に引き伸ばされたようにほっそりとしていて、彫りの深い顔立ちをしている。黙って立っていれば、どこかの男性モデルにしか見えない。

しかし口に出す言葉は「すみません」「御免なさい」「申し訳ありません」を連発するため、人からは軽く見られがちである。

何しろ市川は、三村が道を通り過ぎる野良猫に頭を下げている場面を目撃している。うっかりぶつかった電信柱にすら謝る、とさえ揶揄されている。

スタッフ

市川の追及を受け、三村は困ったように眉を狭める。視線が何度も、制作室を彷徨った。

「そ、そのつもりなんですが……。監督が……」

「監督が？」

三村の視線が天井に向けられた。市川は親指を立て、天井を指し示した。

「ずっと演出部屋か？」

「はあ……」

三村はガクガクと何度も頷いた。まるで操り人形のような動きだ。

「市川君、来たのかい？」

のんびりとした声がしたので、市川は首を捻じって振り向いた。制作室の奥にある会議室のドアが開き、一人の肥満した中年男が顔を見せていた。どこをとっても丸々としていて、髪の毛は長く、後頭部で纏めている。顔の半分は無精髭で覆われ、人の良さそうな笑みを浮かべていた。

山田栄治（やまだえいじ）。年齢は五十近い。

職業は美術監督で、アニメの背景の総てを監督する。背景画は、アニメ業界でもっともコンピューター導入の影響が小さく、背景を描く人間は、今でも筆と絵の具を使って、背景画を描いている。

山田の背後から、もう一人、こちらは小柄な女が顔を覗かせた。

「うっるさいわねえ……。市川君、少し静かにできないの？」

色彩設計

ぐっと眇めた瞳で睨みつける。

丸顔で、小柄なのも手伝い、年齢の見当がつかない。髪の毛は染めておらず、化粧気のない顔立ちのせいで若く見られがちだが、実際は三十代だと市川は推測していた。

宮元洋子（みやもとようこ）。職業は色彩設計。要するに、アニメのキャラクター、作画される総ての色を決める役割だ。かつては色指定と呼ばれていた。

昔々、アニメがセルと呼ばれる透明なシートに線と絵の具で描かれ、フィルムで撮影されていた頃は、一枚一枚、手作業で絵の具を塗っていた。

だが、今はコンピューターのソフトで、一気に着色されてしまう。アニメの中でも、もっとも省力化が進んだ分野である。

洋子の言葉に、市川は「うへっ」とばかりに舌を出して見せた。

すでに立腹は収まっている。市川は瞬間湯沸かし器のような性格で、すぐ怒りの沸騰点に至るが、怒りを忘れるのも呆れるほど早い。すでに三村に怒鳴りつけた時の怒りは、すっかり消え去っている。

「少しお待ちを……」

哀願するように三村に言われ、市川は肩を竦めて会議室へと歩み寄った。

美術設定

【会議室】とは一応ドアに表札があるが、実際は十平方メートルほどの小さな部屋で、片側に資料用のスチール棚が並び、真ん中には楕円形のデスクが一つ。

スチール棚の向かい側には会議用のボードと、三十インチのモニターが一台だけある、何の変哲もない小部屋である。

ぐったりと椅子に腰掛けた市川は、どさりと音を立て、肩から提げていたショルダー・バッグを置き、窓際に立って外を眺めている山田に話し掛けた。

「山田さん、設定は、少しくらいできた？」

「ん……」

生返事をして、窓に見入ったまま、山田は背中で答えた。

山田と市川は親子ほど年齢が離れている。が、まるで学生の先輩、後輩のような口調で会話している。それが少しも違和感が無い。単に市川が礼儀知らずなのか、それもと山田が気にしないのか、両方であろう。

市川はデスクの上に目を落とした。数枚のＡ４用紙が散乱していて、市川は一枚を取り上げた。

精緻な筆致で、歯車と鉄骨が剥き出しの、ごつごつとした建物が聳えていた。

建物の前景には、路面電車らしきクラシックな乗り物が、軌条（レール）の上に走行している。全体に十九世紀末らしき雰囲気が漂っていて、

画面の隅に『蒸汽帝国』とタイトルがあった。

美術設定である。

アニメの舞台となる背景のための資料で、監督からのＯＫが出れば、美術ボードの制作に山田は入る。美術ボードは色見本であるが、背景画のタッチなども、これで指示するようになっている。もちろん、原画マンなどは、美術設定を見本に、キャラクターを動かす世界観を共有するのである。

「ふうん」と市川も生返事で感想を漏らす。

キャラクター設定

洋子は市川の真向かいに座り、両手に一冊の薄っぺらいマンガ本を手にし、視線を紙面に落としながら口を開いた。

「市川君は、どうなのよ？」

「少しは、な！」

得意そうに市川は答え、バッグの中から一冊のクリア・ファイルを取り出した。クリア・ファイルの表紙には『蒸汽帝国・メイン・キャラクター表』とタイトルがあった。

洋子がマンガ本をデスクに置き、手を伸ばして市川のクリア・ファイルを取ってぱらりと開く。透明なクリア・シートに挟まれ、市川の描いたキャラクター表が天井の明かりを受け、顕わになった。

「何よ、少しどころじゃないじゃない……」

洋子の声に「どれどれ」と山田は窓から身を翻し、デスクの上に視線を落とす。

「ほお」と感心するように唇を丸くする。

「凄いな、こんなに描いたのか……」

二人の賛嘆の声に、市川は有頂天になっていた。人から誉められると、すぐその気になる性格で、単純といえばいえる。

市川の描いたのは、数人のキャラクターである。全身、顔のアップ、小物など、様々なキャラクターがいろんなポーズで描かれてい

る。いわゆるキャラ表という奴で、原画マン一人一人にキャラ表が配られ、原画マンは描かれたキャラクターの指示を守り、作画する。

しかし原画マンによっては、様々な癖が出る。それを修正するのも、作画監督の仕事である。市川の描いたキャラ表は、クリア・ファイルを、ほぼ半分ほど占めていた。

一枚一枚、丁寧に見入っていた洋子は、最後のページになって顔を赤らめた。

「ちょっと、これ、何なのよ?」

原作

「くくく……」

市川は忍び笑いを洩らした。隣で洋子の繰ったページに見入った山田は、ぐずぐずと鼻を鳴らした笑い声を上げる。

「こりゃ、いい！　こいつは、おれか？」

市川の悪戯書きであった。市川と山田、洋子の三人が冒険者のような身形をして、辺りを警戒するような姿勢をとっている。

市川は旅の盗賊、山田は杖を持った老魔法使い、洋子は肌も顕わな女剣士といった出で立ちである。

市川の描いた三人のキャラクターは、思い切りディフォルメされているにも関わらず、はっきりと各々の個性が浮き出ていて、誰でも描かれた人物を特定できる。

「あたし、こんなに胸は大きくないわよう……」

洋子は頬を真っ赤に染めながらも、それでも悪い気はしないようで、しげしげと見入っていた。市川の描いた洋子のキャラは、胸の谷間が思い切り強調された衣装を身に纏っていて、確かに実物よりは一・五倍……いや、二倍はバストが豊かに描かれている。

「おれ、こんなに爺いかい？」

山田は自分のキャラクターに、感想を述べた。山田は半分ほど白

髪になっているが、市川のキャラクターでは完全に白髪になっていて、髭も胸元まで伸ばしている。

「いいじゃんか！　どっちにしろ、遊びだ！」

市川は、ばっさりと切り捨てる。

山田は油の浮いた顔をぺろりと撫でると、椅子に座って頭をがしがしと掻いた。

「それにしても打ち合わせ、本当に今夜中にできんのかな？」

山田の言葉に洋子が目を光らせた。

「できないと、完全にアウトよね？」

市川は無言で頷いた。アニメ業界に飛び込んで八年あまり。そろそろスケジュールも、駆け出しの制作進行よりは把握できてくる。どう考えても、今夜中に打ち合わせを済ませておかないと、最終アップには間に合わない。というより、すでに最終アップは過ぎている。今はギリギリの状況なのだ。

デスクに放り投げられたままのマンガ本を、市川は取り上げた。

タイトルは『蒸汽帝国』で、作者は木戸純一（きどじゅんいち）とある。

この木戸なる人物が、今夜打ち合わせをする総監督本人である。

打診

市川が木戸純一が総監督を務めるアニメの新シリーズ『蒸汽帝国』の作画監督就任の打診を受けたのが、先々月である。

『蒸汽帝国』とは、木戸が学生時代に投稿したマンガのタイトルで、すぐにマニアの間に評判になり、連載が決まった。

木戸の描いたキャラクターは、それまでのマンガに存在しない描写で、すぐに模倣者が現れるほどだった。

が、すぐ連載は打ち切りになった。

理由は、木戸のストーリー進行の、能力の欠如であった。壮大な世界観を打ち出したのは良かったが、すぐに木戸は煮詰まってしまい、投げ出したのである。

当然、木戸は漫画家としてやっていけなくなるところだった。ところが、木戸の画力をアニメ業界が放っておかなかった。漫画業界からアニメ業界の、キャラクター・クリエイターとして転進した木戸は、一応の成功を収めた。

しかし、マニアは『蒸汽帝国』を忘れていなかった。『蒸汽帝国』のファン・クラブが発足し、様々なメディアで活動が始まった。尻切れトンボに関わらず、いつの間にか『蒸汽帝国』は伝説の名作となっていた。

アニメ化の企画が持ち上がり、原作者の木戸は自分が監督をするなら、という条件を出した。アニメのプロデューサー、スポンサーなどは危ぶんだが、木戸は頑として自分の条件に固執した。広告代

理店が間に入り、木戸の監督就任が決定されたのである。

華々しく『蒸汽帝国』の制作発表会がなされ、その頃に市川は「作画監督をやってくれないか」とプロデューサーに口説かれた。

表紙

プロデューサーの話を聞くうちに、市川の胸にも危惧が湧いた。

なんと、木戸はシナリオも自分で起こす、という。木戸は自分の原作による『蒸汽帝国』のアニメ・シリーズによって、自らのクリエイターとしての成功に賭けているようだった。

市川の前にも、何人かの作画監督経験者に打診があったらしい。市川は様々なルートを使って、打診があった作画関係者に話を聞いたところ、やはり木戸は絵コンテ制作でスケジュールを大幅に伸ばして、すったもんだを繰り返しているとの噂が流れていた。

断ろうと決意していた市川だったが、プロデューサーのしつこい懇願に、つい首を縦にしてしまった。市川はそんな人の良さがある。

しかし今は、後悔が津波のように押し寄せる。やっぱり、断るべきだった！

市川は『蒸汽帝国』の単行本を手にし、表紙に見入る。

タイトル通り、無数の配管や、シリンダー、タービンなどが錯綜する中に、主人公たちが巨大な敵を向かい撃つべく、ポーズをとっている。

敵の姿はシルエットとなって、よく見えない。恐らくクライマックスの場面であろうが、原作はそこまで行き着く前に連載を終了してしまっている。

市川と山田の設定画は、原作から相当部分インスパイアされてい

る。が、設定の打ち合わせの際、木戸は二人に「原作にあまり捉われなくとも良いですよ」と大幅なフリー・ハンドを与えてくれていた。そうなるとノッてしまうのが市川であった。

嫌々ながら作画監督を引き受けたが、いざキャラクターを設定すると、自分でも不思議なほど愛着が湧いた。

おそらく、山田も同じ気持ちだろう。

確認

「雨になるかなあ……」

山田の呑気な口調に、市川は顔を上げた。山田は窓ガラスに顔を押し付けるようにして立っている。夜景に、雲の間から稲光が数度、瞬いていた。ごろごろごろ……と、遠雷が聞こえている。

「やだ！　あたし、傘を持っていないのよ」

洋子が顔を顰めた。

その時、ドアが開き、三村が気弱そうな顔を突き出した。手には盆を持っている。盆には、人数分の珈琲カップが載っていた。

かっと市川の頭に血が昇った。

「三村！　そんな気を回す前に、監督に絵コンテができたかどうか、確かめてこいよ！」

がちゃーん！　と三村は市川の声に驚愕して、手にした盆を引っくり返した。

「は、はいっ！　今すぐ……！」

おろおろ声を上げ、三村はパニック状態のまま引き下がった。すぐに、どたばた、じたばたと、三村が階段を登っていく音が続く。

「監督……監督……。三村です……。そのお、進行状況をお伺いしたいのですが……」

三村の声が、天井を伝わって、微かに聞こえてくる。と、沈黙が続いた。

市川は山田と、洋子に目顔で「どうなってるんだ?」と問い掛ける。

「さあ」と山田と洋子は同時に肩を竦めた。

「監督っ！」

出し抜けに、三村の悲鳴が降ってきた。声には切迫した調子が含まれている。

「監督っ！　ドアを開けて下さいっ！」

更なる三村の大声に、市川は立ち上がった。

「行って見よう！　何だか、ヤバそうな雰囲気だぜ……」

山田と洋子も頷き、神輿を上げる。

新庄

「おい、今の声は何だ？」

がらがらとした堂間声が聞こえ、市川は会議室の出入口から顔を突き出す。

がっちりとした体躯の、年齢四十前後と思しき、頭を五分刈りにした真っ青なダブルのスーツを身に着けた男が、両目をまん丸に見開いて立っていた。スーツの下には目も覚めるような黄色のシャツを着て、ネクタイは締めず、襟をスーツの外に出している。

「ああ、新庄さん。ちょっと、ヤバい話になっているようですよ」

市川は精一杯の丁寧な口調で返事をする。

新庄、と呼びかけられた男は、ギロリと大きな目玉を剥き出して「上か？」と親指を天井に突き出した。市川は頷いた。

新庄平助。【タップ】の代表取締り、つまり社長である。同時に『蒸汽帝国』のプロデューサーも勤めている。今回のシリーズを立ち上げた張本人である。

新庄は顔を思い切り顰めて見せた。

五分刈りにした頭といい、ギョロリとした迫力のある目つきといい、外見はてっきり、悪徳金融業者である。

が、これでどうして、中々のやり手という噂だ。

ガタガタガタ……と、階段の上から、狂気のようにドアの取っ手を引っ張る音が降ってきた。

市川は、三村の様子を想像した。多分、長い顔を蒼白にさせ、だらだらと冷や汗を垂らしてドアと格闘している真っ最中に違いない。

「平ちゃん！　何してたのよっ！　もう、大変なんだから……」

洋子が気軽な口調で叫ぶ。洋子は新庄と付き合いが長い。もちろん、仕事の上での付き合いである。メンバーの中で新庄を「平ちゃん」と呼びかけられる人間は、洋子だけだ。

スケジュール

新庄は、五分刈りの頭を、ぴしゃりと叩いた。

「テレビ局と、代理店を回っていたんだ。何とか、放送日を延ばして貰おうと思ってな」

「うまく行きました？」

市川は僅かな期待を込めて話し掛けた。新庄は頭を振って否定した。

「駄目だった……。すでにスケジュールは、局のコンピューターに登録されていると説明された。どうにも、延ばせないそうだ」

「そうですか……」

市川は落胆した。テレビ局の放送スケジュールがコンピューター管理されるようになって、放送日の移動、延期は極めて難しい状態になっている。

例えて言えば、がっちり組み上がったブロックの隙間を動かすようなもので、そう簡単に変更はできない事情がある。

大事故や、プロ・スポーツの雨天中止などのアクシデントによる放送延期とは違い、アニメなどの連続物は、挟まれるＣＭ契約によりがんじがらめになっている。

連続ドラマは、ＣＭ枠を確保するため何が何でも契約通りに流さねばならないのだ。もし延期が決定すれば、スケジュールにも余裕ができたろうが、僅かな希望も吹き飛んだ。

新庄は、上を睨みつけた。

「今夜、絵コンテ打ち（合わせ）のはずだよな。何やってんだ……」

山田がのんびりとした声を上げた。

「それが、まだ、木戸さん、絵コンテを上げていないみたいで……」

「何いっ！」

見る間に新庄の顔色が怒色に染められ、素早く階段を駆け上がる。

市川たちは、新庄の背後に続いて、階段を駆け上がった。

祠

【タップ】は、もともと二階建てのビルで、屋上にプレハブの建物を継ぎ足して三階構造にしている。

一階から二階への階段は建物の内部を通っているが、二階から三階へは外階段を登る。外階段の呼称通り、三階へは吹きさらしの鉄階段を登っていく。二階は動画マンのための部屋で、三階は演出部屋だ。

二階の突き当たりのドアを開くと、ぶあっと生温い風が市川の顔を直撃した。

空気が重い。湿気が相当に高そうだ。

ぴかっ！　と、外階段の踊り場に立った一同を、稲光が青白く浮かび上がらせる。

「きゃあっ！」と洋子が悲鳴を上げる。

すぐ、ぱしーんっ……と、雷鳴が聞こえ、がらがらがらと物凄い音が耳朶を打つ。びゅうびゅうと、電線が唸りを上げていた。

屋上の半分ほどを、プレハブの演出部屋が占めている。残り半分の片隅に、小さな祠が設けられていた。どこかの地方神を勧請したとかで、わざわざ新庄が神主を呼んで設置した。新庄は、外見とは裏腹に、随分と信心深いのである。

市川は、かつて新庄が、別の作品のスケジュールが厳しいときに「どうか無事、スケジュールが消化できますように」と祠の前で手

を合わせていた場面を目撃している。

おそらく、この数日、新庄は祠に日参しているのではないか？

プレハブの演出部屋の入口ドアでは、三村がひょろ長い身体を折り曲げるようにして、取っ手と格闘していた。渾身の力を込め、ドアを開けようとするが、内側から鍵を掛けているようで、びくとも動かない。

「三村、どうしたっ！」

木戸

新庄の怒鳴り声に、三村は両目を飛び出んばかりに見開き、振り向いた。

「木戸さんが、内側から鍵を……」

判りきった場面を説明してる。新庄は唸り声を上げ、三村をドアから引き剥がすように突き飛ばし、だんだんだんっ！　と拳を上げて連打した。

市川は洋子に向けて尋ねる。

「木戸さん、引き篭もりなのか？」

洋子は呆れたような表情を浮かべた。

「馬鹿ね。それを言うなら立て篭もりって言いなさいよ」

市川は恥ずかしさに顔に血が昇るのを感じていた。新庄が喚いている。

「木戸さんっ！　開けてくれっ！」

怒鳴ると、耳をドアに押し当てた。ぐるぐると目玉が別の生き物のように動く。

「こっちへ」と新庄は、顎をしゃくった。新庄の周りに、市川たちが顔を近寄せる。

「こうなったら、ドアを押し破るしかないな。皆、協力してくれ！」

全員「うん」とばかりに、一斉に点頭する。

ドアの前に肩を組み、息を合わせた。

「行くぞ、せいのっ……！」

新庄の掛け声に合わせ、全員が破れかぶれでドアに体当たりを懸ける。

ばたーんっ！　と思いもかけない大仰な音がして、ドアが部屋の内部へ倒れこんだ。勢いが余り、市川たちは部屋の中へ雪崩れ込んで、床にごろごろと転がってゆく。

演出部屋は真っ暗だった。

うろうろしていると、ドアの近くに立っていた三村が、ぱちりと電灯のスイッチを入れた。

ぱっ、と照明が点いて、白々とした明かりの中に、一人の人物が怯えきった顔付きで呆然と立ち尽くしていた。

木戸純一であった。

演出机

演出部屋は、四畳半ほどの広さしかない。床はリノリウム張りで、上に薄手のカーペットを敷き詰めている。

ドア近くに、透過台を組み込んだ演出机があり、反対側に数個のキャビネット、スチール棚が、ごちゃごちゃと立ち並んでいる。

棚の一つには、木戸が持ち込んだＤＶＤ再生機とモニターがあって、木戸は時々このモニターで、興味があるアニメや、特撮映像を楽しんでいた。木戸はオタクであった。

演出机の棚には『蒸汽帝国』のフィギアが飾ってある。『蒸汽帝国』が伝説の漫画として神格化されると同時に、フィギアが発売され、コミケなどで販売されている。木戸は大喜びで見本を受け取り、自慢していた。

ずんぐりとした身体つきに、薄汚れたＴシャツ、ぴちぴちのジーパンという格好で、木戸は微動だにせず、立ち尽くしている。四角い顔に、小さな銀縁の眼鏡を架けている。顎には薄っすらと無精髭が浮いていた。落ち窪んだ瞳に、憔悴しきった色が浮かんでいた。

ずい、と新庄が木戸の目の前に立ちはだかった。

「木戸さんっ！　説明してくれますね？」

言葉は丁寧だが、ぶっすり突き刺すような口調である。

再度、同じ言葉を繰り返され、木戸は「びくっ」と身を震わせた。

虚ろな視線が不意にはっきりとして、目の前の新庄を認識したかのようだ。

「新庄さん……」

わくわくと唇が震えている。新庄は口調を変え、穏やかに話し掛けた。

「どうしたんだ？　今夜、絵コンテ打ちなんだろう？」

市川は視線を動かし、木戸の演出机に目を留めた。絵コンテ用紙が数枚、描きかけになっている。

絶望

市川の視線に気付いて、木戸は慌てて机に飛びつこうとした。だが、市川は、すでに手を伸ばして絵コンテ用紙を掴んでいた。

達者な筆致で、絵コンテ用紙にカット割が描かれている。

あれ？　と市川は絵コンテの絵柄を見て、内心「はて？」と首を傾げた。

木戸の原作である『蒸汽帝国』の最初の出だしとは、随分と違っている。こんな場面、記憶には存在しない……。

用紙の隅に記されている番号を確認して、市川は驚きの声を上げた。

「ページ番号は？5？じゃねえか！　まさか、五枚しか描いてない、なんて……」

木戸を見ると、消え入りたそうに身を縮めている。顔色は真っ赤である。

新庄は両目を見開いた。

「まさか……本当に五枚だけなのか？　他にないのかっ！」

市川は演出机を見回し、首を振った。

傍らにはゴミ箱があって、その中には、ぎっしりと反故になった絵コンテ用紙が詰め込まれ、溢れそうになっている。

「うぐっ、うぐっ！　えっ、えっ、えっ！」

突然、木戸の両目に、涙がぶわっと噴き出た。鼻の穴から、たらりと鼻水が垂れ落ちる。

ぺたり、とその場に蹲り、いやいやをするように頭を振った。

「や、やろうとしたんだよ……。一生懸命、絵コンテを上げようとしたんだ……！　で、でも駄目だあ……おれには、できねえっ！」

ぱたぱたぱた……、と天井の明かりが瞬いた。ぐわらぐわらぐわら……、と窓の向こうから雷鳴が聞こえてくる。

「何てこった……」

新庄が呆然と呟いた。両手がだらりと力なく垂れ、両肩が下がっていた。表情には絶望がありありと見えていた。

雷鳴

がたん、と背中を部屋の壁に押し付け、ずるずると膝を落とし尻餅をつくように座り込む。

この中で最も絶望感を抱いているのは、新庄だろうと市川は想像した。全責任が新庄の肩に圧し掛かっているのだ。

市川は推測するに、もしこのまま放映に穴が開くと、新庄は放送局に対し？ペナルティ？を支払う義務が生じる。そうなれば【タップ】は終わりだ！

放送事故と同じ扱いの？ペナルティ？は、【タップ】の支払い能力を越えている。

ぱ！　と照明が完全に掻き消えた。

停電か？　市川は暗闇で緊張感に身を強張らせる。

ぴしゃーんっ！　と物凄い音とともに、窓ガラスが真っ白に輝いた。

わあっ！　と木戸を除く一同は頭を抱える。

窓ガラスから数回、稲光が演出部屋の内部を照らし出していた。

ふらふらと、木戸は漂うような動きで立ち上がる。ぶつぶつと口の中で呟く木戸の声が、なぜか市川の耳に、はっきりと聞き取れていた。

「どうしても、おれは自分でシナリオ、絵コンテを担当したかった……。上手く行けば、それでおれは、もう一度、漫画家に復帰できると思ったんだ……。アニメ業界に潜り込んだけど、おれの本来の場所は漫画だと決めていた。だけど、どうしても描けない……。おれにはストーリーを作る能力がないって、厭になるほど判った……」

木戸の言葉の合間、合間に「ぐわらぐわら」「がらがら」「ぴしゃーんっ」と、何度も雷鳴が轟いていた。その度に窓から真っ白な光が差し込み、木戸の全身をシルエットに浮かび上がらせる。

光

木戸の背後のガラス戸に、一瞬、屋上の祠がシルエットで浮かび上がる。

最後に木戸は天井を見上げ、全身全霊を込めて叫んでいた。

「お願いだ！　この苦境を誰か、救ってくれ！　神でも悪魔でも構わねえっ！　頼む、助けてくれ……！」

その時、木戸の背後の窓ガラスが一際強く、真っ白に輝いた。まるで真昼のような明るさで、眩しさに市川は目を閉じようとした。

が、瞼はぴくりとも動かない。

気がつくと、市川の全身は、完全に凍り付いていた。指一本、動かせない。

瞬きもしない強烈な白い光が、部屋全体を照らし出している。眼底が焼き尽くされるような光量に関わらず、市川には、はっきりと周囲の総ての物が見てとれた。まるで一枚の写真を見ているようだった。

視界の隅に、他の四人が同じように凍り付いているのを認める。市川の視線は真っ直ぐ木戸に向けられているので、四人の表情までは判らない。

何だ、何が起きたんだ?

不思議と恐怖は感じなかった。異常な状況にあるのに、市川は冷静に事態を見守っている自分を奇妙に思っていた。何か、自分が二つに別れ、もう一人の自分を観察しているような気分であった。

と、?声?が聞こえてきた。

?声?

――あんたら、困ったことをしてくれたなあ……。えらい迷惑や……。

市川は、初めて恐怖を感じていた。

今の?声?は、何だ?

口調は関西弁である。いや、そう聞こえるが、どうにもインチキ臭い、関西弁だ。外国人が、無理矢理関西弁を喋っているような、ぎこちなさを感じる。

――誰だ?

市川は頭の中で問い掛けた。他に方法はなかった。答があるとは思っていなかったが、?声?は即座に返答をしてきた。

――わしか? まあ、管理人とでもいいましょうか、世話人とでもいいましょうか。まあ、下働きのようなもんや。あんたらのドタバタで、わざわざ出張ってこないとならんようになってしもうた。

モチャモチャとした口調で?声?は、ぼやいている。

――今の何? 誰が喋っているの?

市川の頭の中に、洋子の声が響いた。

――宮元さん、あんたか？

市川は、洋子を姓で呼ぶ。山田や、新庄が「洋子ちゃん」と呼びかけているので、一度だけ真似して呼びかけたら、洋子は怒りを込めた視線で睨みつけてきて、返事もしなかった。
それ以来、「宮元さん」と呼びかけている。

――どうなってんだ？　動けない！

今度は、山田の声だった。いつもの山田に似合わない、恐慌が声に含まれている。

――すみません、御免なさい、僕が悪いんです……。

必死に謝罪の言葉を繰り返しているのは、言うまでもなく、三村だ。こんな状況に関わらず、相変わらず謝り続けている。

――木戸！　おめえの仕業か？

問い詰めているのは新庄だ。口調は荒っぽく、怒りが満ちている。

条件

――皆、黙りなはれっ！

？声？が、ぴしゃりと一喝した。

市川は言葉を呑みこんだ。？声？は、できの悪い生徒に諭すような口調になって話し掛けてくる。

――さっきも言うた通り、あんたらのせいで、わしは迷惑しとる。『蒸汽帝国』とかいう、漫画のせいで、仰山のファンがついてしもうた。尻切れトンボの、伝説の漫画のままで良かったのに、そこの新庄はんちゅうお人が、余計な、アニメ化の話を進めたから、えらい状態になってしもうたんや！

どうやら？声？は、心の底から迷惑を感じているようだった。とはいえ、話が見えないでいるのは、相変わらずだ。何が迷惑なのだろう？

――ええか、あんたら、このままでは大変になるんやろう？　そやさかい、わしがほんの少し、手伝いをしよう、ちゅう話しや。ただし、それには条件がある。

条件？

市川の頭に疑問が浮かぶと同時に?声?は言葉を続けた。

――あんたらの仕事を続けはなれ。ええか、あっちへ行っても、あんたらの仕事は続くんやで。そうや、アニメのお仕事や!

あっち?　あっちって、どっちだ?

訳が判らないまま、光は益々ぎらぎら強烈になった。もう、何も見えない。脳髄を貫くほどの強い光が爆発し、市川は意識が遠ざかっていく自分に気付いていた。

白味

真っ白な光が満ちている。
そこに一本の線が現れた。赤い一本の線。線が出現するとともに?声?が聞こえる。

――ええか、あんたらをあっちへ送り込むけど、これは非常手段や。わしはこんな阿呆らしい仕事、したくなかったんやけど、しゃあない。ま、あんたら、自業自得といっていいかもしれんがな……。

ああ、【白味】だな……。そんなにスケジュールがきつかったのか……。

ぼんやりと感想を憶える。【白味】とは、アニメのアフレコの時に画面が間に合わず、何もない画面に、声優の切っ掛けを色のついた線で示す方法である。
アニメのアフレコに関わらず、キャラクターの動きも、どんな画面なのかも判らないから、声優にはとんでもなく不評である。こんな手法は、日本だけであり、他の国のアニメ制作では、とうてい考えられない。

じわじわと真っ白な世界に、単純なラフ画面が出現した。画面はごちゃごちゃとした酒場の場面であった。

絵コンテ撮りか……。さっきより、ちょっとはマシになったな。

演出家の描いた絵コンテを直接、画面に現す方法である。絵コンテの右端には、画面の秒数が書き込まれている。その秒数に合わせ、画面を表示する。

これが、絵コンテ撮り、あるいはタイミング撮りと呼ばれている。【白味】とともに、スケジュールに余裕のない状態の時、採用される方法だ。

酒場の親爺らしきキャラクターが、色のない線画で表れる。ぱくぱくと口のところだけ動き、親爺の声が聞こえてくる。

線撮り

線撮りだな。

線撮りは原画そのものを、指定されたタイミング・シートに従い、撮影する方法だ。【白味】や絵コンテ撮りに比べれば、まだしも声優は演技がしやすい。しかし、非常手段である事実には変わりがない。

「おおい！　注文を間違えるな！　ビールを十杯！　つまみのチキンを五人分だ！　早く持って行け！」

親爺の声は、どこかで聞いた覚えがある。
なんだか聞き慣れた声音だが……。

真っ白な色のない画面に、不意に色が着色された。線がくっきりとして、背景もちゃんと見えてくる。

ほほお、やっと【色】が着いたか……。

【色】が着く、とはアニメのキャラクターにちゃんと色が彩色され、背景も揃った完全な画面になるのを、言う。

アニメの制作進行にとっては、きちんと【色】が着いた状態でア

フレコに持っていけるのは、制作がきっちり滞りなく進行した証拠であり、誇りでもある。

がやがやと酒場らしい騒音が耳に届き、鼻腔に料理の旨そうな匂いが飛び込んできた。

料理の匂いだって？

ふと手許を見る。自分の両手だ。
しかし変だ。妙にのっぺりと見え、線が見える。

アニメの画面そのままだ！

おいおい、どうなってるんだ……。

記憶

呆然としていると、目の前に人影が差した。顔を上げると、さっきの親爺が腰に手をやり、渋面を作っている。

完全にアニメのキャラクターだ。

でっぷりと太り、髪の毛は後頭部で纏めて背中に垂らしていた。

服装はラフで、腹の下に前掛けをしていた。

「おい、あんた！　さっきから、そこに座ったばかりで、注文一つ、しやしねえじゃないか！　ここは酒場だぜ。客じゃないなら、帰ってくれ！」

親爺の顔には、妙に見覚えがある。アニメのキャラクターらしくディフォルメされてはいるが、もとの人物は、はっきりと特定できた。

「山田さん……じゃないか？」

思わず口に出た言葉に、市川は驚いた。

あっ！　おれは市川努！　アニメ制作会社【タップ】で『蒸汽帝国』というシリーズの作画監督をやっている……！

洪水のように記憶が戻ってきて、じーんと痺れたような驚きが胸に満ちた。

呼びかけられた親爺の顔が、驚愕に歪んだ。ポカンと口がまん丸に開き、両目が見開かれる。だらりと両手が下がり、がっくりと両肩が落ちた。

「山田……だって……」

両目がキョトキョトと落ち着きなく辺りを彷徨い、ごつい手の平が、顔をずるりと撫でた。

「ああっ！　そうだった！　おれは、山田栄治……！　思い出した！　あの時、【タップ】の演出部屋で妙な？声？が聞こえて……あとは、さっぱり判んなくなっちまって……」

怒り

親爺――いや、山田はジロリと市川の顔を見詰めた。表情にはありありと疑念が浮かんでいる。

「市川君……だよな？　どうなってるんだ、その格好？」

「おれの？」

ガタリと音を立て、椅子から立ち上がった市川は、自分の身体を見下ろした。

「わっ！　何だ、こりゃ？」

最後に憶えていた自分の服装は、ジャージの上下姿のはずだった。が、今の市川は、足下は膝まで達する革靴、ごわごわとした質感のカーキ色の上着に、太い革製のベルトをしている。

ガチャガチャという音に、反射的に手をやると、なんとベルトからは重そうな剣がぶら下がっている。肩から提げていたショルダー・バッグの替わりに、柔らかそうな革製の物入れがあった。

市川は山田の顔を見上げて返事した。

「そう言うあんたも、てんで酒場の親爺だぜ。さっきも、酒場の親爺そのままの口調だったな」

山田は慌てて自分の身体を撫で回す。無意識だろうが、両手が腹の前掛けに伸び、手に着いた汚れを拭い落とす仕草をする。

呆然と二人は周囲を見渡した。

天井の低い、酒場らしき場所である。狭い店内にはぎっしりと木製の椅子とテーブルが並べられ、客が半数ほど埋まり、様々な料理が湯気を立てている。

客たちは各々、酒をテーブルに並べ、真っ赤な顔を灯油ランプらしき照明にてらてらと光らせて、話し込んだり、酒を呷ったりしている。

視界に入る総てが、アニメの画面そのままだ。

山田が信じられないといった表情になり、小声で呟いた。

「おれたち、アニメの世界にいるんだ！」

二人は顔を見合わせる。突然の怒りが、市川の胸に湧き上がった。

疑問

「冗談じゃねえ！　何が哀しくて、おれたちアニメの世界にいるんだ？　おれは、アニメの仕事をしてはいるが、そんな、馬鹿な……」

市川は声を張り上げた。

ぴた、と酒場に満ちていた喧騒がやむ。

静寂に、市川と山田が周りを見回すと、客たちが怪訝そうな表情を浮かべ、二人を穴の空くほど凝視していた。

ひくひくと山田の口端が引き攣った。無理矢理どうにか笑みを浮かべると、大仰な仕草で、ぺたんと自分の額を叩き、ぺこぺこと叩頭を繰り返して言い訳する。

「お客さん！　もう酔っ払っちまったんですかあ？　酒も呑みすぎは良くありませんな……」

「なんだ」といった雰囲気が満ちて、客は興味を失ったように視線を外し、各々のテーブルに顔を戻した。がやがやとした喧騒が戻ってくる。

山田は、がっくりと市川の目の前の椅子に座り込んだ。手真似をして、市川にも座るよう促す。

市川は山田の向かい側に座った。山田は半身を乗り出し、囁いた。

「ここではあまり、そんな話はよそうや。何が起きたか、さっぱり判らんが、どうやら、用心したほうがいい」

市川は神妙に頷いた。

が、心臓は早鐘のように打っているのを感じている。

頭の中がぐわんぐわんと脈打ち、疑問が次から次へと湧き上がり、全身から噴き零れそうだった。

山田が右手を挙げ、テーブルの間を独楽鼠（こまねずみ）のように駆け回っている少年を呼び寄せた。

少年は真剣な顔付きで飛んでくる。

「はい、親爺さん。何でしょう？」

少年の姿を目にして、市川は「ああ」と一人合点した。少年は確かに、市川が木戸の依頼を受けて設定した、酒場で働くボーイそのままである。

山田は少年に料理と、ビールを持ってくるよう命令した。少年は生真面目に頷くと、再び独楽鼠のように早足で引き下がった。

あっという間に注文の品を盆に載せて戻ってくると、てきぱきと二人の前に料理と、ビールが並ばれた。

少年は一礼して、別の客の注文を取りに戻っていった。山田はビールのカップを持って、口を開いた。

「ともかく、一杯やろうや。こんな訳の判らない時は、これに限る！」

「うん」と生返事で市川はカップを取り上げ、口に近づけた。ぐい、と呷ると、やや酸味のある液体が喉を通り抜ける。

酒精分は含まれているが、これがビールとは思えない。

「これがビールか？　別の酒じゃないか？」

市川の疑問に、山田は首を振った。

「いや、これもビールさ。

但し、ホップの入っていない高温醗酵の酒だ。おれたちが知っているビールは、低温醗酵菌による下面醗酵アルコールで、ドイツが発祥だ。

こちらのビールは、もともとエールと呼ばれる上面醗酵の、イギリスが発祥地の酒だ。どちらも麦芽が原料だから、ビールと呼ばれている」

時々、山田は妙な雑学を披露する癖がある。山田の講釈に市川は「ああ、やっぱり、山田さんだ」と変な感心を憶えた。

鏡！

「とにかく、やたら妙な事態が起きているのは確かだ。おれたち、本当にアニメの世界にいるのか？　こりゃ、夢じゃないのか？」

市川は山田の忠告に従い、小声で囁いた。

山田は「ふむ」と唇を歪めた。じろじろと店内に目をやる。

「確かに、アニメの世界だな。背景は、おれが描いた酒場の設定そのまんまだし、タッチも、おれが指定しそうなものだ……。おれたちだって、アニメの絵になっている……。君の顔も、あの悪戯書きのキャラクターそっくりだ」

市川は慌てて自分の顔を撫で回した。手で触れた自分の顔は普段のままだが、鏡がないから判らない。

鏡！

市川は自分の物入れを探った。ごちゃごちゃと小物が入れられ、どうやら鏡らしき平たい物体を掴み上げた。

取り上げると、表面がキラリとランプの明かりを受け、輝いた。

怖々と自分の顔を映し出す。

「ひえっ！」

そこにあったのは、確かに自分が悪戯書きをしたキャラクターそのままだった。いつも吃驚したように飛び出した両目と、こけた頬。

自分の顔が、こうして描かれているのを目の当たりにして、どうしてもっといい男に描いておかなかったんだろうと、後悔が押し寄せる。

女剣士

「おれにも見せてくれ！」

山田は市川の手から鏡を引っ手繰る。まじまじと鏡を覗き込み、見る見る不機嫌な表情になった。

「ひでえ爺いだ！　おれ、そんな爺さんに見えるかい？」

山田には悪いが、市川は「くつくつ」とくぐもった笑いを堪えるのに必死だった。

だって、山田は五十に近い年齢のはずだ！　市川にとっては、爺さんに見えても仕方ない。

気分を害したらしき山田は、市川の顔を睨んで何か言いかけた。その時、店内に女の甲高い声が高々と劈いた。

「何すんのよっ！　あんた、馬鹿じゃない？」
「あんたこそっ！　その手をどけなさいっ！」

二人はギクリと、声の方向に視線をやる。

店の、出入口付近のテーブルで、二人の女が怖ろしい剣幕で睨み合っている。

二人とも、布地を極端に節約した衣装を身に纏い、腰には大振りの剣を提げていた。見るからに旅の女剣士の装いだ。

二人は顔を真っ赤にさせ、親の仇と言わんばかりの表情を浮かべている。

市川は二人の姿に見覚えがあった。特に、一方の女剣士には……。

「ありゃ、洋子ちゃんじゃないか？」

山田が市川の疑問を先回りして叫んだ。

あぶない水着

二人の女剣士は、店の出入口を塞ぐ格好で睨みあっている。視線は険しく、二人の間には、ぱちぱちと火花が散っているようだった。

いや、本当に散っていた。

二人の眼球からは、空中を繋ぐように火花が飛び散り、背後の背景は、怒りの炎を象徴したイメージとなっている。アニメでは、よく見られるテクニックだ。

市川は呆気に取られ「本当にアニメの世界に入っちまってる！」と驚愕していた。

一人は市川が悪戯に設定した、宮元洋子の女剣士姿である。極端に布地を節約した――つまり水着とほぼ同じような衣装を身に着けていて、胸の谷間がありありと見えている。

市川は洋子の胸を、実物よりは二倍ほど強調して描いていたから、ほとんど顔と同じくらいの巨大な丸みが突き出している。そんなに大きいのに、重力に抗して、ぐいっと盛り上がっている眺めは、驚くべきものだ。

もう一人の女剣士もまた、洋子に負けず劣らず……と言うべきなのか？　ともかく最小限の布地で身体を覆っている。

細い紐に、小さな三角布がついただけの衣装で、布地の足りない分をごちゃごちゃとイヤリングや、腕輪、脚輪などで補っている印象だ。

「その肉は、あたしのもんだからね！」

洋子がテーブルの上で美味そうな湯気を立てている肉の固まりを指さして叫んだ。

なんだ、食いものの争いか……。市川は思わず、心中ズッコケてしまった。

山田を見ると、呆れた内心を表すためか、大きな汗が色トレスで描きこまれ、顔の上半分がブルーのグラディーションになっている。

アニメのギャグ表現で、「ちょっとセンスが古いな」と市川は思った。

多分、自分も同じような表情を浮かべていると思うと、うんざりする。

「何を言ってんのよっ！」

相手の女剣士は叫ぶと、素早い動きでテーブルの肉をひっ攫い、口に咥える。

洋子は「あっ！」と叫ぶと、相手に掴み掛かった。たちまち二人の間で、取っ組み合いが起きる。

わあ！　と店内が騒然となり、客たちが一斉に立ち上がって歓声を上げた。全員、興味津々といった表情を浮かべ、拍手をしている男も見受けられる。

「おい、止めなきゃ！」

山田が立ち上がって、市川も釣られたように椅子を蹴って神輿（みこし）を上げた。あたふたと山田は取っ組み合いを続けている二人の女に割り込んだ。

「止めろ！　おい、乱暴はよせ！」

しかし山田の言葉はてんで二人には届かない。むしろ火に油を注ぐ結果になって、洋子は山田の頬を「ぱしーん！」と音高くひっぱたく。

山田は踵を中心に独楽のように回ると、ずでーんと音高く引っくり返ってしまった。

「山田さん！」

市川が慌てて近寄ると、山田は床に大の字になって伸び、頭の上にはキラキラ星と、ピーチクパーチク騒がしく小鳥が囀（さえず）って、くるくると円を描いている。

やりすぎだ！　多分、木戸監督のセンスだろうが、悪ノリしすぎだよ……。

市川は情けなくなった。

大騒ぎ

顔を上げた瞬間、女の回し蹴りが腹に入ってきた。猛烈な痛撃が突き上げ、市川は一瞬空中に浮かんで、そのまま背後に倒れこむ。

「ぐぎゃっ！」

悲鳴に目をやると、背中側に客の一人が押し潰され、じたばた藻がいている。振り回した拳が、偶然、隣で呑んでいた男の顎に命中した。

「何しやがるっ！」

大声を上げるや、殴られた男は顔を真っ赤に染めて立ち上がり、仕返しに殴りかかってきた。

市川は、ぶーん、と振り回した拳を、ひょいと頭を下げてよけた。男の拳は明後日を向いて、別の客に命中する。

後はもう、大混乱である。

次々と連鎖反応のように店内は殴り合いの饗宴で、椅子が飛ぶわ、テーブルが引っくり返るわ、瓶や食器が割れるわの大騒ぎ。

市川は這いつくばった姿勢で、伸びている山田に近づいた。

「山田さん、おい、しっかりしろ！」

ぺたぺたと頬を叩く。山田は「ぷう！」と息を吹き返し、両目をパッチリと開いて、キョトキョトと辺りを見回した。

「なんてこった……」

呆然と呟き、上体を起こした。

省略

もくもくと煙が三枚の繰り返しで作画され、時々乱闘を続けている客たちの手足や、顔の一部が見えている。

本当に数十人の乱闘を動画で表現するのは至難の業で、「何か大騒ぎが起きているんだぞ」と、視聴者にメッセージを伝える目的の表現だ。動画枚数も節約できるし、テレビ・シリーズでは、よく見かけられる画面である。

山田と市川は、その煙に飛び込み、洋子と思しき女剣士を探した。飛び込むと、すぐに洋子が見つかった。

これも、アニメの省略だ。

「おい、洋子ちゃん！」

ぐい、と女剣士の腕を引っ張り、山田が声を掛ける。

呼びかけられ、女剣士の表情が驚愕に歪んだ。

「あ、あたし？」

市川は、止めを刺した。

「宮元洋子。君の名前だろ？」

洋子は「はっ！」と自分の頬を両手で押さえた。目を丸くして市川と山田の顔を凝視する。

「あんた……市川君、それに、山田さんよね？」
「そうだ！　思い出したかっ？」

山田が大声で叫び返した。

「ど、どうなってんのよ……変な？声？が聞こえたかと思ったら、後は何も判らなくなって……。ここ、どこよ？」

市川は周りの騒音に負けじと大声を張り上げた。

「『蒸汽帝国』の、最初のシーンで出てくる酒場だ！　原作そのままだ！」

市川の叫びに、山田は、きっとなって睨んだ。

「何だって？　市川君。正気か？」

市川は声を限りに喚いていた。正気を疑っているのは、自分でも同じだ。こんな馬鹿げた話、自分でも信じられない。

「他に考えられるか？　おれ、少ししか原作を読み込んでいないけど、冒頭のシーンそのままの展開だと思わないか？」

山田は唇を噛みしめ、大きく頷いた。

「そうだ。おれも読んでいる。何しろ自分が美術を担当する漫画の原作だからな」

洋子が割り込んだ。

「ちょっと、もし原作そのままなら、これから大変な状況になるんじゃない？」

市川と山田は顔を見合わせる。すぐ「ああっ！」と叫びあった。

「そうだ、原作通りなら、この後……」

ぴりりりり……！

甲高い笛の音が、辺りを支配する。すぐに命令に慣れた、横柄な喚き声が聞こえてきた。

「乱闘が起きているというのは、この店か？　よし、踏み込めえ――っ！」

どかどかと重々しい靴音が聞こえてきて、見るからに警官といった扮装の集団が、店内に雪崩れ込んできた。

全員、警棒と盾を手にしている。次々と乱闘を続ける客たちの手足を押さえつけ、手錠をガチャリ、ガチャリと嵌めていく。

「おい、逃げ出そう！」

市川は素早く山田と洋子に囁いた。二人は、すぐさま「うん」と頷いた。

視力

遠くから「がちゃん、どしん！」という機械の音が聞こえてくる。合間に「しゅーっ！　しゅーっ！」という蒸汽が噴き上がる音が挟み込まれ、まるで工場の中にいるような騒音が周りに満ちていた。

空を振り仰ぐと、満天の星空に、空を突き刺すように何本もの煙突が立ち並び、一斉に白い煙を吐き上げている。

明らかに夜なのに関わらず、市川の目に周囲の情景は、はっきりと見てとれた。全体に青みがかかり、遠くの建物には一面に燈火が点っている。

アニメの夜の場面で、本当に何も見えない真っ暗な場面は、ほとんど存在しない。アニメの嘘で、ある程度まで周囲の景色は判るよう、色指定されるのが通常だ。

また馬鹿な考えだ……。と、市川は自分の顔を、ぶるぶると手の平で拭った。いい加減、こんな埒もない思考は止めなければならない！

市川は拭った自分の手の平をまじまじと見つめた。驚きが胸に込み上げる。

自分は、眼鏡を架けていない！

視力は〇・1を切っていて、眼鏡がないと何も見えないのに等しいのだが、今の市川は眼鏡なしでも、はっきりと辺りの景色を見てとれた。

アニメの世界に入り込んで、得もあるんだ……！

「『蒸汽帝国』かあ……」

ぽつり、と市川は呟いた。隣で座り込む山田が、微かに頷く。

「ああ、まさに『蒸汽帝国』の世界だ」

「もうっ！　二人とも呑気な台詞、口にしてばかりじゃないっ！　どうなってんのか、教えてよっ！」

二人の目の前に、洋子が苛立った様子で地団太を踏み、叫んでいた。足踏みをする洋子の胸が、ゆっさゆさと揺れるのを見て、市川は慌てて視線を逸らした。

ふと隣の山田を見ると、両目が飛び出ていて、口許はだらりと開かれていた。山田は市川の視線に気付き、顔をこっちへ向けてきた。

どちらともなく「うへへへ……」と笑い声を上げていた。

「馬鹿っ！」

ずかずかと洋子が近づくと、素早い手の動きで二人の頬を張り飛ばした。

きいーん、と耳鳴りがして、市川の目の前を極彩色の星や、稲妻が乱舞した。

洋子は真剣に怒っていた。

「何考えているのよっ！　何が起きているのか、あんたらには判っているの？」

山田がゆったりとした口調で話し掛けた。殴られた頬を、もそもそと撫でている。

「何が起きているのか、さっぱり理解できていないのは、おれも同じだよ。洋子ちゃん」

最初に目覚めた酒場をほうほうの態で逃げ出し、三人はどうにか人目を避け、建物の裏手を伝ってこの空き地に逃げ込んだ。

周りに聳える建物は総て裏側を向け、窓は一つも開けられていない。

都市計画によくある、エア・ポケットのような空き地らしい。

裏側の壁には、無数の配管がくねくねと葉脈のように伝い、建物と建物の間の空中には、蜘蛛の巣のような電線が張り巡らされていた。

夢？

ばたり、と洋子は両手を下ろし、首を振った。
きらりと目が光ると、市川を睨む。

「な、何だよ……？」

市川は吃驚して顔を挙げ、心持ち後ろに下がった。
ずい！　と洋子は一歩前に進むと、まじまじと市川の顔を睨みつけた。

「この格好、あんたが悪戯で設定したあたしよね？　あんたも、山田さんもあの悪戯書きそのままなのは、全責任があんたにあるんじゃないの？」
「よ、よせよ……」

じりじりと洋子に迫られ、市川はいつしか建物の壁に背中を押し付けていた。

「どうして、あたしたち、アニメの絵になっているの？　答えなさいっ！」
「し、知らねえっ！　本当だっ！」
「洋子ちゃん。もう、その辺にしとけ」

見かねて、山田が洋子の肩を掴んだ。洋子はさっと手を上げて山田の腕を振り払う。

「あんたたち、さっきからここが『蒸汽帝国』の世界だって何遍も言ってたじゃないの。どうしてそんな気違いじみた話、信じられる

の？」

山田が「やれやれ」とばかりに首を振った。

「そりゃ、辺りの景色を見れば即座に判るさ。建物の形や、様子は、おれが美術設定した『蒸汽帝国』そのものだしな。なあ、市川君？」

市川は急いで同意した。

「そうだ。今までチラリとしか見ていないが、店に踏み込んできた警官隊の服装も、おれが設定したデザインそのままだ。何から何まで木戸さんの『蒸汽帝国』なんだよ！」

洋子はヒステリーを起こしたように金切り声を上げる。

「だから、何でそんな阿呆らしい事態になっているの？　これは夢？　夢ならいつ覚めるの？」

関西弁

――夢や、おまへんで……。

モチャモチャした関西弁に、三人はギクリと身を強張らせた。

あの？声？だ！

――『蒸汽帝国』が結末がないままアニメ化されましてん。

仰山のお人が、木戸はんの『蒸汽帝国』ちゅう世界を共有して、この世界が生まれましたんや。このまんまだと『蒸汽帝国』は未完成になってまう。

そりゃ敵（かな）わんちゅうこって、あんたらを呼び寄せたちゅう話しでおま。

「その関西弁をやめなさいよっ！　あたし、これでも関西出身なのよっ！　あんたのインチキ臭い関西弁を聞いていると、苛々しちゃうわっ！」

――ほな、失礼します。ほんでも、この口調、わいの地ぃやからしゃあないな。我慢しとくれまへんか？

洋子の怒りの爆発にも、蛙の面になんとかで、？声？は、しゃらっと言葉を続けた。

――あんたらにして欲しいのは、なんとか『蒸汽帝国』のストーリーに結末をつけて貰いたいんや。お願いでけまっか？

市川は仰天した。

「ストーリーに結末をつけろ？　馬鹿を言うな！　それは木戸監督に言えよ！」

――その木戸監督はんが手ぇ上げてしまったさけ、あんたらに白羽の矢が当たったちゅうわけだす。

依頼

山田は宙を睨んで叫んだ。

「木戸監督ができないなら、なおさらおれたちにできるわけない！おれたちゃ、絵描きで、作家じゃないんだ！」

――あんたらしかおまへんのや。何しろ、『蒸汽帝国』の世界を一等、理解しておるのは、あんたらやからな。あんたら三人と、三村はん。新庄はんの五人で、ストーリーを続けて貰いたいねん。

市川は山田の真似をして宙を睨みつけ、叫んだ。

「どうやって？　どうすりゃいいんだ？」

――何でもええ。あんたらのやりたいように、やりなはれ。何でもええから、ジタバタすれば、それがストーリーになるんや……。

？声？が徐々に遠ざかる気配がして、市川は慌てて喚いた。

「おい、待て！　そんな無責任な……！　それに、木戸さんは、どうなってる？　なぜ、木戸さんの名前が出てこない？」

――あん人には、別の役目がおます……。

謎めいた口調を最後に、？声？はふっつりと跡絶えた。

がちゃーん、どしーんと重々しい機械音が戻ってくる。

主人公

三人は顔を見合わせた。
最初に口火を切ったのは洋子だった。

「三村君と、平ちゃんを探せって命令してたわね？」

「うむ」と山田が重々しく頷く。洋子が「平ちゃん」と言うのは、新庄プロデューサーの呼び名である。洋子だけが、気軽にその呼び名をつかう。

「しかし、どうやって？」

山田は腕を組んだ。市川は、恐る恐る推測を口にした。
「どう考えても、今までの出来事は『蒸汽帝国』の冒頭、数ページそのままだったよな……？」

いかにも厭そうに、山田と洋子は渋々同意する素振りを見せた。
市川は先を続けた。

「となると、おれたちは『蒸汽帝国』の登場人物……しかも、主人公じゃないか、と思えてくる！」
「そんな馬鹿な！」

山田が両目を一杯に見開いて叫んだ。
「主人公は、とうに市川君が設定してあったじゃないか！　あれは、どう見ても、おれたちとは似ても似つかない……」

市川は素早く言葉を差し挟んだ。

「そりゃそうだ。だけど、主人公は三人。旅の女剣士、盗賊、老人……悪いな、でも山田さんが【老人】の役割だと考えると、ぴったり表札が合うじゃないか」

市川の最後の台詞に、山田が「表札？」と問い返した。うんざりした様子で、洋子が訂正を入れる。

「平仄よ。市川君。もうちょっと、日本語を勉強しなきゃね」

市川は恥ずかしさに頬の火照るのを感じていた。難しい言葉は苦手だ！　照れ臭さに頭を掻き毟り、言葉を続ける。

「それに、冒頭の酒場での乱闘シーン。最後に警官隊が乱入して、主人公が逃げ出す展開も、同じだ！　おれたちが主人公の役目を負わされているんだよ！」

方法

「なんてこった……」

ぺたりと地面に山田が座り込む。その横に、洋子が椅子の高さほどの木箱を見つけ、腰を下ろした。

二人とも呆然と市川を見詰めている。反論すら、する気力がなさそうだ。

「二人とも『蒸汽帝国』の原作を思い出してくれ！　原作の三人が、あの後、どうなったかを……」

洋子が空を見上げ、思い出しながら、ゆっくりと言葉を押し出す。

「確か……、警察の追及を躱(かわ)すために、帝国軍に入隊するんだったわね。傭兵になるんじゃなかったかしら？」

山田が「うんうん」と何度も頷いた。

「そうだ、そうだ！　思い出してきたぞ。それから――えーと、どうなるんだっけ？」

頼りない口調で市川を見る。市川は首を振った。

「そんな目で、おれを見るなよ！　おれだって一遍、軽く目を通しただけなんだから……。後で打ち合わせするつもりだったから、その時に木戸さんから詳しい説明を聞こうと思っていたんだ」

洋子が「ぽん」と手を叩いた。

「それで、平ちゃんと三村君。どうやって探すの？　市川君、あの二人をキャラクターなんかにしていないでしょ？　もし、あの二人

がこの世界にいるなら、あたしたちに見分けがつく？」

山田がにいっ、と笑った。

「それなら、方法があるぞ！　おれたち、二人とも市川君の悪戯書きそのままだ。ならば、逆に考えれば、市川君があの二人の悪戯書きをすれば、おれたちに見分けがつく」

似顔

「へっ？」

市川は混乱した。

「待て待て、山田さん。そりゃ、どういう話だ？　おれが悪戯書きをすれば、あの二人がこの世界に登場するような口振りじゃないか。ちょっと待ってくれ……頭の中がグラグラしてきたぞ……！」

山田が呟いた。

「まるで落語の『あたま山』だな。

桜の種を飲み込んだ男の頭に桜の木が生えてきて、その下で花見の客がドンチャン騒ぎ。

その煩さに堪えかね、桜の木の根元にできた池に、自分で身投げした……。しかし他に、おれたちに見分けがつく方法はないよ」

市川は立ち上がった。地面を物色する。

あった！　この場所に駆け込んでくる際に、目にしたのだが、地面にはあちこち石炭屑が散乱している。『蒸汽帝国』のタイトル通り、今いる世界は蒸気機関が盛んに使用されているらしい。そのせいで、石炭の屑も、あちらこちらに投げ棄てられているのだろう。

石炭屑を手に取り、市川は漆喰の塗られた壁に向き合った。

「それじゃ、やってみるぞ」

腕を伸ばしさっさ、と石炭屑を使って三村と新庄のキャラクターをスケッチする。

二人の顔は、市川の脳裏に刻み込まれている。市川は人の顔を覚える際に、一旦アニメのキャラクターに変換する癖があった。そのほうが、ちゃんと人の顔を憶えやすい。

「そっくり！」

描き上げると、洋子が歓声を上げた。

漆喰の壁に、市川の手による、三村と新庄の姿が現れていた。ひょろりと痩せて、細長い三村の姿。鼻が高く、彫りの深い顔立ちながら、視線は今にも叱り声が聞こえてくるのではないかと、オドオドしている。

その隣に、やや上目がちにこちらを睨みつける新庄の厳つい顔があった。二人の姿は、今にも動き出しそうな臨場感があった。

山田は嬉しそうな声を上げた。

「うん！　これなら、おれたちにも見分けがつくな！」

洋子がぼんやりと呟いた。

「それにしても、木戸さんは、どうなったのかしら？」

市川が半畳を入れた。

「絵コンテ描いているんじゃないのか？」

三人は思わず爆笑した。

恐怖

とぼとぼと、真っ暗な闇を、木戸純一が当てもなく歩いている。

なぜ歩いているのか、どこを目指しているのか、本人にもさっぱり判っていない。ただ、立ち止まるのが怖ろしく、かといって無闇と走り出す無謀さも持ち合わせず、こうして項垂れた姿勢のまま、歩いている。

闇なのに、自分の身体ははっきりと見てとれる。とぼとぼと歩む、自分の足下もちゃんと見られる。

木戸は、市川たちの直面したアニメ化を経験していない。視界に入る、自分の手許、足下はごく普通に見えた。しかし、どこに光源があるのか、それも見当もつかなかった。

演出部屋で全員に取り囲まれ、窮地に陥って叫んだ瞬間、何か奇妙な出来事が起きたらしい。が、何が起きたのか？　記憶は模糊として曖昧である。

いったい、いつから自分は、こうして目的地も定めず、歩いているのだろうか？　歩き出したのは、ついさっきのようであり、また随分と長い間、ひたすら歩いていたようでもある。

自分は、すでに死んでいるのではないか？　ここは死後の世界か

もしれない……。

不意に恐怖が込み上げてきた。ひやりとした汗が、背中を伝い、心臓が凍りそうな恐ろしさが爆発する。

厭だ！

木戸は走り出した。猛然と、歯を食い縛り、全身の力を足先に込めて、全力疾走を試みる。

足音は全くしなかった。全身全霊を込めて走っているのに、ぱた、という音すら、聞こえてこない。これほど全力で走っているのに、前方から吹き付ける風すら、そよとも感じない。

やがて、木戸の駆け足は止まり、立ち止まった。

ぜいぜい、ひいひい、はあはあと喘ぐ。

心臓は、ばくばくと大きく鼓動し、タップダンスを踊るように、陽気に胸の中で飛び跳ねている。

どっと熱い汗が額から零れ落ち、木戸はその場で、へたりこんだ。

透過台

手の平で、地面をまさぐる。

足下はすべすべしていて、そのくせ、材質が何でできているのか、さっぱり判らない。硬いようで、柔らかくも思える。

「おおおいぃぃ……！」

木戸は闇に向かって思い切り叫んだ。

すぐ後悔した。

叫び声は、完全に反響すらなく、闇に吸い込まれていく。

木戸は昔、残響を完全に消去するという無反響室なるものに入った経験がある。様々な形の板が壁一面に接続され、あらゆる音を吸収する無反響室の体験は、実に奇妙なものだった。

何かの音響工学機器メーカーの実験室とかで、自分の声がまったく反響しない部屋での滞在は、今になって改めて考えても、ぞっとするものだった。

今の状態は、それを思い出す。

何でもいい……何か、この、べったりとした闇に、変化が欲しい……。

狂おしく周囲を見回す木戸の視界に、小さな光の点が映った。

何だ、あれは！

木戸は立ち上がった。さっきの全力疾走で、膝元は頼りなく、よろよろとした動作だったが、心の中に希望が赤々と点っていた。

再び走り出す。光の点は、木戸の疾走に合わせ、着実に近づいてくる。木戸の下半身に、力が漲った！

ぱたぱたぱた……。

気がつくと、自分の足音が聞こえる。

光はぐんぐんと近づいてきた！

「やっほう――！」

能天気な歓声を、木戸は思い切り上げていた。自分の顔は今、ひどく晴れやかになっているだろうと想像する。両目は輝き、口元は笑いの形に貼り付いているはずだ。

遂に、光の正体が判明した。

木戸は立ち止まった。

これは……。

自分の演出机だった。光は机の表面に装着されている透過台（トレス）から洩れていた。

神でも悪魔でも……

——木戸はん……。

木戸は、ギクリと身を強張らせた。

あの？声？だ。

どっと記憶が蘇る。演出部屋で、雷鳴の中、破れかぶれで叫んだ瞬間、奇妙な光に包まれ？声？が聞こえてきたのだった。

「誰だ！」

誰何し、キョトキョトと宙に視線を彷徨わせる。

——誰でもおへん。わいは、ただの管理人。あんさんに少し、頼みがおますのや……。

「頼み？」

馬鹿のように鸚鵡がえす。

——そうや。あんたでしか、でけへん仕事なんや。

「仕事？」

――なんや、阿呆になったんか？　わいの台詞、繰り返すだけやないか？　しっかりしてくれんかな……。

？声？は一時、木戸の様子を窺うように言葉を切った。やがてもう一度、話し掛けた。

――木戸はん。あんた、言うたやないか。この窮地を救ってくれるなら、神でも悪魔でも構いまへん、ちゅうて……。

「神でも悪魔でも……」

思わず繰り返した木戸の胸に、再び恐怖が込み上げる。耳もとで囁く？声？は、どう考えても、神様とは思えない。

棚

「まさか……！」

両目を裂けよとばかりに、一杯に見開く。？声？は慌てたように否定した。

――ちゃうちゃう！　そのどっちでもありまへん。

わいは、管理人とでも申しましょうか、下働きとでも申しましょうか、でけるのは限られておるんや。

あんた、追い詰められておりましたなあ。絵コンテを描く時間がのうて、あのままではスケジュールに間に合わず、放映に穴が空く。そんな危機的状況やったの、違いますか？

「う、うん」

がくがくと震える膝頭に力を込め、木戸は椅子に腰掛けた。目の前に、見覚えのある自分の机が視界一杯に広がる。

机の上面は、やや手前に傾いで四角く切り取られ、合成樹脂の白い天板があって、天板は白く輝いている。透過台である。

透過台に光を当て、動画用紙を透かすと、下の紙に描かれた絵が判る。何枚も透かして、動きを確認して、動画マンや演出は、アニメを制作するのだ。

透過台は戦前から存在しており、古くは白熱電球を使用していた。白熱電球は熱を帯び、夏などは堪らなかったそうで、蛍光灯が導入されたのは戦後である。

机の上には棚があり、そこにはチェック済みの動画用紙や、絵コンテを突っ込む。棚の下面の板には『蒸汽帝国』用のキャラクター表や、美術設定が何枚も貼られて、常に確認できる仕組みになっていた。

時間

「おれに、何をしろと言うんだ……」

――やっと素直に話を聞ける状態になって、ほっとしましたわ……。

?声?は、わざとらしく安堵の溜息をついた。

――絵コンテや！　時間は、たっぷりありまっさかい、あんたの気の済む限り、描いておくれなはれ……。

「絵コンテ?」

木戸は大声を上げた。

「馬鹿を言うな！　おれは絵コンテが描けなくて、逃げ出したいほどだったんだ！　今更、描いて下さいと言われて、はいそうですかと描けるわけない……」

――そうやろか？　本当にでけへん――と、あんた言うのでっか？

？声？の調子が変わった。猫なで声のような、あるいは誘惑するかのような声音に、木戸は、自分のうなじが、ぞわぞわと逆立つのを感じる。

――まあ、やってみなはれ。でけるか、でけんか、試して見るのもええや、おまへんか……。時間は、たーっぷり、ありまっさかい……。

徐々に？声？は遠ざかる。

「おい、待てよ！　おれを一人ぼっちにするなよっ！」

ぱっ、と頭上から出し抜けに光が降り注ぎ、木戸は両手を顔に押し当てた。目の眩むほど、強烈な光だ。

やがて目が慣れてきて、木戸は辺りを見回した。

四角い四畳半ほどの小部屋。

【タップ】の演出部屋だった。

絵コンテ

気がつくと、演出机にどっさりと絵コンテ用紙が山積みになっている。ペン立てには、ぎっしりと、愛用の２Ｂの鉛筆。一本を摘み上げ、机の左側に置いてある鉛筆削りに突っ込む。

がりがりがり……と逞しく鉛筆削りは２Ｂの先端を飲み込んでいく。引き抜くと、当たり前のように先が尖っていた。

鉛筆を凝視したまま木戸の指が、ぶるぶると震えていた。ぼきり！　と鉛筆を手の中でへし折る。怒りの衝動が込み上げた。

「畜生！　誰の悪戯（いたずら）だ？」

ドアに突進した。ドアはきっちりと、元の通りに戻っていた。いつ修理したんだ？

がちゃり！　とノブを掴んで外を目掛け、前も見ずに夢中になって飛び出す。

が、呆気に取られ、立ち竦んだ。

木戸の身体は元の演出部屋に立っていた。確かに、外に飛び出したはずなのに……。

ノブを掴んだまま振り返る。

演出部屋が見える。視線の先に、ドアのノブを掴んだ自分の背中が見えた。その自分の身体の先にもう一つの演出部屋があって、さらに視線の向こうに、またもう一人の自分の背中が見えて……。

まるで合わせ鏡のように、無限に続いている。木戸はぞっとなっ

て、ノブを離し、ドアを閉めた。
これ以上、見続けていたら、気が変になってしまう。いや、もう、なっているのかもしれない……。
ばたり、と音を立て、ドアを閉め、そのままへたへたと演出机の椅子に腰掛けた。

頭を抱え、じっと待ち受ける。

何も起きない。
顔を挙げ、呟いた。

「判ったよ……やるよ、やりゃあ、いいんだろう？」

ふーっ、と息を吸い込み、決意したように鉛筆を掴み、絵コンテ用紙を広げる。
じいっ、と何も描いていない用紙を睨みつける。
さらさら……と、鉛筆の先が絵コンテ用紙の表面を走る。

描ける……！

あれほど苦渋していた絵コンテが、今では嘘のようにすらすらと描ける。後から後からイメージが湧き、止まらない！

木戸はもう、夢中だった。

夜明け

夜が白々と明けてきて、市川たちはそれまで潜んでいた建物の裏手から、表通りへと移動した。

雑踏が、市川たちの目の前に表れた。

道路は総て石組みで、雑踏を構成する市民らしき人々の姿は、十九世紀のものだ。

男はフロック・コートに山高帽という、陰気な服装で、女は目の覚めるような色鮮やかなドレスを身に纏っている。

時折、洋子と同じような、肌の露出が多い服装の若い女性も混じっていた。大多数はヨーロッパ風の衣装だが、アジア風の、いや中近東付近だろうか、異国風の衣装を身に纏った通行人も混じっている。

印象的なのは、かなりの割合の通行人が、市川がベルトから提げているような武器を所持している光景だった。もし、ここが現代日本なら、即座に通報され、逮捕されるだろうが、皆いずれも平気な顔で通りすぎている。

市川は無言で、通り過ぎる群衆をじろじろと、無遠慮な視線で眺めていた。自分が同じ場面を作画するとなると、やはり今ここで見ているような通行人を描くはずだ。

通行人の動きを観察し「やっぱり三コマのタイミングだ。作画枚数を節約するために、スライディングを使っているな」と瞬時に思った。このような異様な状況にあっても、市川の作画マンとしての本能は、アニメの製作過程を頭に描く悲しい習性が働いてしまう。

雑踏は、全体に雑多で、猥雑とさえ言えた。

通行人の間を、からからと路面を鳴らしながら辻馬車（ハンサム）が行過ぎる。と思ったら、しゅっ、しゅっと白い蒸汽を吐き出して、蒸汽の力で動く自動車が通過する。

空を見上げると、細長い飛行船が、朝の光を目映く反射してゆったりと飛行していた。

ここでは中世と、近代が入り混じっていた。ぼけっとそれらを眺める市川たち三人の姿を、見咎める視線は、一つとしてなかった。

臭気

市川は鼻をくんくんさせた。

匂う！

地面から、下水の腐敗臭と、路面にぼとりぼとりと散乱する馬糞の入り混じった不快な臭気が辺りに漂っている。夜中では気付かなかったが、朝になって気温が上がり、臭気が込み上げたのだろう。

「こんな大都会なのに、ひでえ匂いだ！」

市川の不満に、山田が当然だとばかりに返事をした。

「大都会だからさ。この町は十九世紀をモデルに設定している。だから下水道も、その時代のものだ。

馬糞の匂いは予期しなかったが、下水道の匂いは、ありえるな。近代的な下水道はまだ、整備されていないんだろう。

フランスで長期夏期休暇（バカンス）が盛んだった理由は、下水の臭いに耐えられず、避暑地に逃げ出したからだという説すらある」

市川はがっかりした。煉瓦積みの、近代的な町並みに、今や日本の田舎でもお目に掛かれないほどの臭気が、まるで似合わない。

山田は、にやりと笑った。

「そのうち、慣れるさ。おれは子供の頃、田舎で育ったから、あまり気にならないがね」

洋子は黙って顔を顰めていた。山田は平気な顔をしているが、市

川と洋子は、立ち上る臭気に参ってしまった。

山田が眠そうに伸びをする。

「ふわあああ……。さて、どこへ、どうやって行けばいいんだ?」

洋子が素早く答えた。

「原作では、主人公の三人は、王宮の兵士募集に応募するって、筋書きよね!」

市川は洋子の言葉に頷いたが、すぐ疑問を口にした。

「その王宮って、どこにあるんだ?」

三人は思わず顔を見合わせる。市川は、自分の言葉に、不意に不安が込み上げるのを感じた。

「そうだよ……。おれたち、この町の地理についちゃ、何にも知らないんだ」

その時、甲高い子供の声がして、全員ギョッとなった。

「親爺さん！」

明らかに、山田に向けて掛けられた言葉だ。山田は当惑したように、きょろきょろと辺りを見回す。通行人を掻き分け、一人の少年が真っ直ぐ走ってくる。

「ああ……、ありゃ、最初の酒場にいた、ボーイじゃないか！」

市川は少年の顔を見て、思い出した。名前は確か「ランス」といったはずだ。山田の役割は酒場の親爺で、ランス少年は孤児という設定だ。山田も少年の顔を見て、思い出したようだった。

少年は山田に駆け寄ると、心配そうな表情を浮かべ、口を開いた。

「親爺さん。どうしちゃったんです？　昨夜、いきなり消えちまって……。心配したんですよ！」

山田は無言で首の後ろを撫でていた。どう答えていいか、迷って

いるらしい。
やがて大きく息を吸うと、少年に話し掛けた。
「いや、済まんな。実は、ちょっと一言では説明できないんだが、おれはこの二人と王宮へ出かけ、兵士募集に応じようと思っている」
少年の瞳が、驚きにまん丸になった。
「本気ですか？　親爺さん。店はどうするんです？」
山田は探り探り、といった口調になった。
「店は……ああ、お前に任せるよ。ええと、店には……調理人が他にもいる……よな？」
ランス少年はあやふやに頷く。
「そりゃあ、ベータさんもいるし、アルファ姐さんだって……。でも、親爺さんの店なんですよ。それを放り出してだなんて！」
ベータにアルファか……。なんて適当な命名なんだ！
市川は心中、密かに呆れ果てた。名前の出た二人については、市川は心当たりはない。多分、名前だけの存在なのだ。

町の名前

真剣に山田の顔を見上げている少年を見ているうち、市川の頭上に電球が点った。市川は素早く視線を上げ、自分の頭上に点っている電球を確認した。アニメの……いや漫画の、名案が閃いた時の表現だ！

「ランス……」

市川に声を掛けられ、少年は吃驚したような目を向ける。

「おれたち、この町……なんだっけ？」と市川は山田に質問の矛先を向ける。山田は短く「ドーデン」と答えた。

ああ、そうだった、と市川は小さく笑う。

自分は作画監督のせいか、町の名前とか、建物の名前は覚えにくい。キャラクターの名前ならすぐ覚えるのだが。

山田は美術設定をしているから、地名や建物の名称はすぐに出てくるのだ。市川は再び少年に向かって話し掛けた。

「おれたち、このドーデンの町についちゃ、さっぱり不案内なんだ。それで、君に案内して貰えないかと……」

こっそり山田を見ると「それ、いい考えだぞ！」とニッコリしている。市川は期待を込めて言葉を続けた。

「君、王宮への道案内、できるかな？」

ランス少年は不審そうな顔を山田に向けた。なぜ山田が道案内し

ないのだろうと思っているのだ。しかし山田は、すっ呆けて頷く。

「ランス。頼む」

山田にまともに頼まれ、ランスは素直に頷いた。中々、性格の良い子供のようだ。

「判りました、こっちです！」

くるりと背を向け、小走りに道案内を買って出てくれる。三人は意気揚々と、ランスの後に従った。

王宮

案内された王宮を見上げ、市川は驚きのあまり、大声を上げてしまった。

「王宮って、これか？」

山田は真面目に頷く。

「そうだ。以前、木戸監督から設定依頼をされた、王宮だ。おれと監督がアイディアを出し合って……いや、ほとんど、おれのアイディアだがな……美術設定したやつだ。ちょっと、変わっているだろう？」

言い終わると、山田は得意そうな表情になって、瞳を煌（きらめ）かせた。

洋子が腰に手をやり、首を傾げた。

「とてもじゃないけど、王宮には見えないわね。どこかの工場かしら？　それとも、鉄工所？　どっちにしても、住み心地が良いとは、どうしても思えないけど」

まさしく洋子の指摘した通り、首都ドーデンの中心部に聳える王宮は、市川の常識からすると、まるで度外れた景観をなしていた。

外観は、臨海工業地帯に連なる、無数の配管や、煙突がおっ立つ工場のような建物である。鉄骨が剥き出しで、あちこちにガントリーやホイスト・クレーンがにょきにょきとはみ出し、いたるところに「危険！」「頭上注意」「制限高さ」などの警告板が、無秩序といって良い混乱を作り出している。

「工場萌え」オタクなら、狂喜しそうだ。

ついでに説明すると、市川たちが目にした町の看板、道路標示すべてが、日本語で書かれている。市川は日本語が表示されている看板等を見つけ「どうなってんだ！」と思わず歓声を上げた。完璧な十九世紀のヨーロッパの町並みに、日本語が表示されている眺めは、実に奇妙だった。

山田は「美術設定のとき、看板や表示板の文字は日本語にしておいた」と説明した。それが今ここで見る、町並みに引き継がれているのだろう。

タイミング

その山田が、得々と説明を続けた。

「なにしろタイトルが『蒸汽帝国』だろう？　監督の説明では、あらゆるところに蒸汽が使われたスチーム・パンクっぽい世界設定なんだそうだ。だもんで、おれも王宮は、思い切って工場みたいな設定にしたんだ。もっとも、内部まで工場内部のようにするわけには絶対いかないが……」

「あのう、親爺さん……」

ここまで案内してくれたランス少年が、山田を見上げ、もじもじしている。山田は少年を見て「ああ！」と笑顔になった。

「ここまで案内してくれて、有難うな、ランス！」

もぞもぞと、身に着けた衣服を探る。

やがてポケットから数枚の硬貨を取り出した。日の光を浴び、硬貨はきらりと硬質な光を反射した。それをランスの手に握らせる。

市川は密かに、自分もこの世界で通用する通貨を所持しているか、後で確認しようと決意した。

「これは、お礼だ。それじゃ、ここでお別れだ。元気でやれよ」

ランスは手の平に載せられた硬貨を見詰め、顔を真っ赤にさせた。

「こ、こんなに！　あ、有難う御座います！　親爺さんもお元気で！」

ぺこりと頭を下げると、脱兎のごとく駆け出した。それを見送り、市川は首を振った。

「しかし、あの子供がうまく山田さんを見つけてくれて良かったよ。おれたちだけじゃ、王宮にいつになったら辿り着けたか、怪しいもんだからな」

山田はなぜか、渋い顔になった。

「そうだ。実に好都合に、あの少年が現れたもんだ……。好都合すぎる！」

市川は吃驚して、山田の顔を改めて見上げた。

「どういう意味だい？」

洋子が用心深そうな表情になる。

「何か、厭な予感がするんだけど。あたしの想像が確かならね！」

山田と洋子は見詰め合った。二人同時に頷くのを見て、市川はむらむらと癇癪の虫が、むっくりと頭をもたげるのを感じる。

説明

「何でえ、二人とも。お互い判っていて、おれには、さっぱり判らねえぞ！」

山田は渋い表情のまま、口を開いた。

「おれたちが、木戸さんの『蒸汽帝国』って作品の世界にいるって状況だよ。おれたちは、この中で、主人公の役割を担わされている」

洋子が相槌を打つ。

「そうよ。デーブ・スペクターが無理に関西弁を喋っているような、変な?声?の命令でね！」

じわじわと市川にも、二人の言わんとする道筋が見えてきた気がした。市川は二人を見て、目を一杯に見開いた。

「まさか……そんな阿呆らしい……?」

洋子が皮肉な笑みを浮かべ、肯定する。

「そうなのよ。あたしたち、木戸さんの描いたコンテに従って行動しているんじゃないかって思い始めたのよ」

山田が口を挟んだ。

「それなら、ランスが都合よく、おれの目の前に現れた説明がつく！　まるで、テレビ・アニメのシナリオじゃないか！」

市川は弱々しい声で抗議した。

「よせよ、おい……おれは信じないぞ！　おれたちが好き勝手に行動すれば、この無茶苦茶なストーリーが進行して、エンディングに辿り着けるはずだろう？　な、そうだよな？　おれたちの行動はすべて、自分たちの自由意思なんだろう？」

山田は吐き捨てるように答えた。

「そうだと良いんだが……！　この先、木戸さんが主要な登場人物の誰かに、死に直面するような展開をさせる、などと思いつかないよう、ひたすら願うしかないだろうな」

市川は何度も首を振り、叫んでいた。

「よせったら！」

しかし山田と洋子は押し黙ったまま、答えなかった。

門

おれたちは木戸監督の絵コンテによって、行動しているのでは……。

山田の推測を頭から振り払い、市川は空元気を振り絞って、大股に歩き出した。立ち尽くしている山田と洋子に、自分でも驚くほど快活に声を掛ける。

「面倒臭い考えは、やめだ！　とにかく、兵士募集とやらに応募してみようぜ！」

山田と洋子は市川の空元気に、ほっとした様子だった。頷くと、歩き出す。

目指すは、正門だ。

工場のような王宮の建物の前には、堂々とした？門？が聳えている。市川は、王宮そのものが工場か、製鉄所のような外観だから、門も同じような造りかと想像していたのだが、やはり王宮であるからには、それらしい門構えが必要なのだろう。

どっしりとした御影石の門柱に、鉄製の柵が、ぐるりと王宮そのものを取り囲んでいる。鉄製の門扉の上には、燦然と輝く黄金色の紋章が装飾されている。

紋章そのものは様々な色合いが施され、彩色は、七宝焼きらしきエナメル質の光沢を見せている。

隣の山田は門を見上げ、ぽかんと口を開きぱなしになっていた。
市川は山田の顔色を見て、話し掛けた。

「どうしたんだい、山田さん。この門は、あんたが設定したんじゃないのか？」

山田は「ふーっ！」と大きく息を吐き出した。額に浮かんだ汗を、芝居がかった仕草で拭うと、苦笑を浮かべた。

「ああ、まさしく、おれが美術設定した王宮の門だ。しかし、自分で設定した場所が、このように現実になっているのを見ると、つい職業的に見てしまうもんだ。もし同じ場面をＢＧオンリーで描けと言われたら、どうしようかと思ってね。こんな手の込んだ画面、一日で描けきるかなと思ったんだ……」

BGオンリー

BGオンリーとは、背景画だけでワン・カットを見せる手法である。アニメでは、背景画をBGと呼ぶ。背景（バック・グラウンド）を省略した言葉だ。

市川も苦笑を返した。山田も同じだと、共感したのである。

正門前には、すでに数人の先客が並んでいた。皆、市川や洋子のように、腰のベルトや背中に、思い思いの武器を装備している。多分、兵士募集に応じた連中だろう。

その連中を見て、市川は内心「はて？」と首を傾げた。

今、市川が行動している『蒸汽帝国』の世界は、明らかに十九世紀末の科学文明を誇っている。蒸気機関による動力や、夜の照明などは、電気を利用している。

それなのに、集まってきている連中の武器といえば、刀や斧、棍棒など、恐ろしく古めかしい装備だ。

一人として、拳銃やライフルなどの火薬を利用した武器を持つ者はいない。刀や槍などの武器は、江戸時代の武士のように、ある種の権威の象徴なのかもしれない。

集まっている応募者の中に、市川は見慣れた顔を見つけた。

山田と洋子の注意を喚起する。

「おい、あの女……」

市川がこっそりと指さした方向を見て、山田と洋子はあんぐりと口を開けた。

山田が洋子を見て、尋ねる。

「昨夜、洋子ちゃんと……」

市川が口を挟む。

「肉の取り合いしてた女だ！」

市川の言葉に、洋子はさすがに真っ赤になった。食いものの争いとは、あまり外聞が良くないからだろう。

相変わらず、肌の露出が多い衣装を身に纏っている。その代わり、足下まで達する、長いマントを背中から垂らしていた。

腰にぶら下げているのは、長大な剣だ。他の応募者とは違い、あちこち傷だらけで相当に使い込んでいそうである。

ほっそりとした肢体に、髪の毛は、やや亜麻色がかり、くるくるとウエーブが掛かっている。肌は小麦色の健康的な色合いで、きりっとした口許の、かなりな美人である。

「あの女、木戸さんの依頼でキャラクター設定を起こした覚えがあるな……」

市川の呟きに、山田は目を剥いた。

「へえ！　じゃ、名前も判ってるのか？」

市川は「いいや」と首を振った。

「キャラクター打ち合わせのとき、あとで登場させる予定だから、キャラクターだけでも起こしておいてくれと言われたんだ。だから、名前は知らない。木戸さんが自分でラフを描いて、おれに寄越したんだ。相当な思い入れがあるらしくて、細かく注文を付けてきたな」

洋子は、ちょっと薄笑いを浮かべて口を開いた。

「もしかして、木戸監督の初恋の人かもね！」

三人は思わず顔を見合わせた。

「ぷっ！」「くくくく……！」と、一斉に吹き出す。その声が聞こえたのか、女は怪訝そうな表情で、こちらに視線を向けてきた。

「いけねえ！」と市川は慌てて視線を逸らす。

その時、重々しい音を立て、正門の鉄扉が開き始めた。応募者は、ぞろぞろと応募受付へ向け、歩き出す。

市川たちも歩き出した。

応募

応募係りは、四角い蟹のような体型の中年男であった。薄緑色の軍服を身に纏い、四角い顔立ちに、髪の毛は短く刈り上げ、天辺を平らにして、これまた四角い顔を強調している。

「名前は？」

「市川努」という市川の返答に、男は奇妙な表情を浮かべた。

「イチカワ・ツトム……？　妙な名前だな。外国人か？」

市川は、思わず背後の山田と、洋子を振り返る。そう言われれば、そうだ。この『蒸汽帝国』では、「ジョージ」とか「マリアン」などの西洋風の名前が主流である。

男はペンを手にし、尋ねてきた。

「どこの国の出身だ？」

「日本！　東京都杉並区出身です！」

応募係りが、益々珍妙なものを見る目つきになる。

市川は、にやにや笑いが浮かぶのを抑え切れなかった。応募係りの顔に、怒色が浮かぶのを見て、少々やりすぎたと反省する。

それでも応募係りは市川の言葉どおりに、さらさらと手元の用紙に書き込んでいく。見かけは厳ついが、律儀な性格なのだろう。

応募の用紙を受け取り、その場から離れると、山田と洋子が同じように返答して、応募係りの男はぐっと怒りを堪え、用紙に記入する。

山田と洋子は市川に追いつき、懸命に笑いを堪えた表情で並んで歩き出した。

「おい、あの応募係りの顔を見たか？」

市川が囁くと、山田は頷いた。が、すぐ心配そうな表情になる。

「大丈夫かな？　悪ふざけと思われないか？」

洋子はきつい目付きになって、市川の脇腹を思い切り突っついた。

「市川君！　もっと真面目になりなさい！」

脇腹をつつかれ、市川は思わず「ぐえっ」と呻き声を上げる。洋子は見かけによらず、性格が悪い。いや、見かけどおりと言うべきか？

階級

用紙に記された地図を頼りに、王宮の内部を歩いていく。山田は自分の設定が現実になっているのが珍しいのか、しきりと天井の飾りや、壁に架けられた絵画に見とれ、歩みが遅くなる。

王宮内部はやや近代的な、山田の言葉によれば「アール・デコ」様式の造りになっていた。現実世界では、一九二〇年代から三〇年代に流行した形式らしい。直線と、曲線が巧みに組み合わされ、簡素さの中に、優雅さが織り込まれている。

地図に導かれ、市川たちは広々とした部屋に辿り着いた。部屋には、すでに何名かが先着し、思い思いに椅子に座ったり、壁際に背中を押し付けるようにして立っている者も見受けられる。

市川たちは最後の組らしく、入口から内部に歩を進めると、先着の応募者たちがじろりと鋭い視線を送ってきた。

皆、押し黙ったまま、待ち続けている。

市川たちは、木製の長椅子を見つけ、三人で並んで座り込んだ。

市川は会場の前方に、あの女の後ろ姿を見つけた。女は一人、椅子に腰掛け、長い亜麻色の髪の毛を見せている。

しばらく待つと、もう一方のドアが開き、数人の軍人がぞろぞろと入室してきた。

全員、応募者を前に、整列した。

ばりっとした制服の胸には、様々な略綬が埋め尽くすように飾られている。皆、将官クラスの階級であった。

その列の最後尾にいる一人の男に、市川は注目した。襟元の階級章は、中佐を示している。市川は以前、戦争もののアニメを経験していて、階級賞には詳しい。

そっと隣の山田に話し掛ける。

「おい、あの中佐……」

山田も「うん。判ってる」と頷き返す。

ゆっくりと洋子が囁いた。

「平ちゃんよ！　あんたの設定したキャラクター、そのまま！」

新庄平助――。アニメ制作会社『タップ』の社長にして『蒸汽帝国』プロデューサーであった。

適性

居並ぶ将軍の中で、もっとも派手な軍服を身に纏い、もっとも多くの勲章を胸に飾った代表者が、応募者たちを睥睨して口を開いた。

でっぷりと太り、口許にはブラシのような口髭を蓄えている。襟元の階級章は、大将であった。

「諸君！　我が蒸汽帝国軍外人部隊（スチーム・エンパイア・フォース）への応募、実に感謝の念に耐えぬ！　我が蒸汽帝国は、首都防衛と国内治安維持のため、諸君らの力を借りたいと思っておる。従って、諸君らの適性を知りたい。諸君らには、希望する部署の適性試験を受けて貰う方針になっている。よろしいかな？」

将軍はジロリと厳しい視線で、室内の応募者たちを見渡した。一瞬、室内が緊張に張り詰めた。

が、将軍は、すぐに笑顔になった。

「見るからに諸君らは、腕が立ちそうな、頼もしい面構えをしておる！　我が蒸汽帝国軍も、これで安泰というもの。期待しておるぞ！」

列の最後尾にいた新庄プロデューサー――今は軍服を身に着け、生まれながらの軍人らしさを現している――が声を張り上げた。

「それでは、応募者全員の適性を知るため、競技場へ案内する！　全員、起立！」

その声に、室内の応募者たちが立ち上がる。軍隊の規律を学んでいないため、動きは不揃いであった。

がたがたと椅子を引く音が室内に響き、将官たちは微かに顔を顰めた。多分、訓練を受けた兵士なら、起立の号令に対して一瞬に反応するのだろう。

驚愕

ぞろぞろと出口へ向かう列の最後尾に、市川たちは並んだ。

出口では、応募者たちが希望する部署を新庄に伝えている。新庄はそのたびに、応募者にどの部屋へ向かえばいいか、答えている。

あの女が新庄の目の前に立つ。新庄は女を見上げ、一瞬怪訝な表情を浮かべた。女は自分の希望を述べた。新庄はすぐもとの表情に戻り、てきぱきと指示をする。女は頷き、出口へと向かっていった。新庄は何事もなかったかのように、事務的な態度を取り戻した。

市川は、じっと新庄プロデューサーの顔を見詰めていた。新兵にしては、明らかに無遠慮といえる視線である。新庄は近づいてくる市川の顔に、不審の視線を返してきた。

その顔が驚愕に弾けた。

まず、真っ青になり、ついで赤くなると、どす黒く変色した。視線が部屋の中を忙しく彷徨い、明らかに動揺を隠せない。どっと額から汗が噴き出してくる。

市川が目の前に立つと、背筋をぴんと立て、そっぽを向いて口の端で喋った。

「希望する部署は？」

「あんた、新庄さんだろう？」

市川の言葉に、ぎくりと新庄は身を強張らせた。ロボットのようにぎくしゃくと顔を向けると、まじまじと見つめ返す。

「君は……市川君か？」

洋子が前へ出て、話し掛ける。

「平ちゃん！　思い出した？」

相談

新庄は、きょときょと落ち着かなく、辺りを見回す。市川はわざと列の最後尾についていたため、背後には誰もいない。将軍たちもすでに退席していて、部屋には市川たち三人と、新庄だけの四人である。

「市川……それに、山田さん。洋子ちゃんか。あんたら、何か知っているのか。この……この状況について……！」

新庄は見る見る、軍人らしき態度をかなぐり捨て、以前のアニメ制作会社社長らしき物腰を取り戻してくる。

市川たち三人は、深く頷いた。新庄の瞳が、考え深いものになった。

「ここでは、まずい！　おれはこれでも、帝国軍の中佐だ。どこか、人目のつかない場所で相談しようや」

山田が口を開いた。

「何か、考えがあるのか？」

「うむ」と一つ頷くと、新庄は指先を上げ、廊下の先を示した。

廊下は長々と伸び、片方は窓になっていて、もう片方の壁には何枚もの扉が、ずらりと並んでいる。

「三つ目のドアが、おれに与えられた執務室だ。入室禁止の札を架けておけば、誰も入ってこられない。一緒にぞろぞろ歩くのはまずいから、後で訪ねてきてくれ。しかし、ここに来たところを見ると、

あんたら、帝国軍兵士になるつもりなのか？」

市川は軽く肩を竦めた。

「そうだ。そうでないと、物語が進行しないからな。軍隊に入るなんて、ぞっとしないが、しかたない」

洋子も同意する。

「そうなのよ！　あたしたち、元の世界へ戻りたいの。そのためには、兵士になる必要があるの」

もう一度「ふーむ……」と唸ると、新庄は首を振った。一瞬のうちに、決意の表情が浮かぶ。

「それなら、近衛兵に応募するのが、一番いい！　近衛兵は、王族と王宮を守る役目を負っている。実を言うと、おれは帝国軍で近衛部隊の隊長を務めている」

「つまり、近衛兵になれば、あんたの指揮下に入るってわけだな？」

新庄は市川の言葉に、くしゃっと歪んだ笑いを浮かべた。

「まあな！　しかし、そうなれば、色々おれが便宜を図れる。よし、君らの用紙を渡してくれ。おれがサインをしておく！」

引っ手繰るように新庄は慌しく三人の用紙を受け取ると、手近の机に上体を折り曲げ、胸に差したペンを抜き取り、さらさらと用紙の隅にサインを施した。

最後に、べったりと判子を捺した用紙を掲げ、にったりとした笑みを浮かべた。

「用紙を持って、装備品の受け取りに行け！　そこで君らの装備が揃う。一人前の軍人らしくなったら、おれの執務室に来い！」

きびきびとした口調になった。新庄の口調は、軍人というよりは、有能なプロデューサーそのままだった。

市川たちは用紙を受け取ると、その場から立ち去った。

通路を足早に歩いていくと、ちらりと視界の片隅に、あの女が立

っているのを認めていた。

女は、ありありと不審な表情を浮かべ、市川たちを見送っていた。

ダブル・クリップ

「できた！　第一話の絵コンテがついに完成したぞ！」

木戸純一は大声で叫ぶと、今しがた完成した絵コンテ用紙の束を掴み上げ、椅子から立ち上がった。

用紙の上端にダブル・クリップを挟み、机の上に投げ出し、大きく伸びをして、背中を反らした。

ぽきぽきと、背骨の関節が鳴って、達成感が押し寄せる。

いったい何時間……いや、何日が経過したのだろう？　夢中になって描き続けていたが、途中まったくといっていいほど中断はなく、眠気も一切、襲ってこなかった。

不思議なのは、尿意すら感じない。空腹もなかった。一度たりともトイレに立ちたいとか、何か口にしたいなどという欲求は、湧いてこなかった。

あの妙な？声？が、木戸の肉体的な欲求を奪い去っているのだ！

木戸は、じろりと演出部屋を見渡し、声を張り上げた。

「おい！　あんた！　名前があるのかどうか知らないが、いつまでおれを、この部屋に閉じ込めておくつもりだ？　絵コンテは終わったぞ！　いい加減、出してくれ！」

部屋は森閑と静まり返って、応えはない。ただ木戸の息遣いだけが、荒々しく響いているだけである。

木戸の胸に、凶暴な怒りが込み上げる。

「出せ！　おれを、ここから出せ！」

唸り声を上げると、木戸は自分の椅子をがっしりと両手で抱え上げた。そのまま、ガラス戸を目掛け、思い切りぶん投げる。

ぐわしゃん！　とガラスが粉々に砕けるかと思ったが、椅子はまるで岩の壁にぶち当たったかのように、ごん！　と鈍い音を立てて跳ね返された。ガラスには、罅一つ入ってはいない。

「畜生……！」

悲鳴のような叫び声を上げると、無茶苦茶に部屋の中のものを手当たり次第、ガラス戸に投げつける。

しかしガラス戸は、まったく変化なく、無表情に木戸の狼藉を受け止めるだけだった。

牢獄

はあはあと荒々しい息遣いをして、木戸はよろよろと演出机に近づいた。演出部屋は事実上、いや、どんな言い繕いをしても、牢獄である。木戸には耐えられない。

自暴自棄が木戸にとんでもない行動をとらせる。

木戸はたった今、書き上げたばかりの絵コンテ用紙を取り上げた。ぐいっと用紙の真ん中を握りしめ、びりびりばりばりと引き裂こうとする。

――やめなはれ！　折角、書き上げたばかりやおまへんか！

木戸は？声？を耳にして、にったりと唇を笑いの形に歪めた。？声？には、微かに狼狽の響きが認められたからだ。

「ここから出られないなら、こんなもの！」

ぐいっと、用紙の束を捻じる。

――あんたには、無限といっていい時間をくれてます。短気は、よしなはれ。

木戸は絶叫した。
「どうして、おれを出してくれないんだ！　見ての通り、絵コンテは完成したんだぞ！」

――第一話だけや、おへんか？　シリーズはワン・クールあるんやど。

木戸は、あんぐりと口を開いた。
「十三話、全部そっくり描けってのか？」

テレビは十三週でワン・クールという数え方をする。ほぼ、三ヶ月分に相当する。普通、アニメのシリーズは二十六話、つまり、ツー・クールで一まとめとなる。一年続くと五十二話。つまり四クールである。
十三話というのは、かなり短い。本来はツー・クールあったほうが、後々ＤＶＤなどにして販売する際、営業上も有利なのだが、プロデューサーの新庄は大事を取って十三話という構成にしたのだった。

――そうや、この際やから、あんたには全部の話を絵コンテにしてもらいたいんや。時間は仰山、ありまっさかい、存分にやっておくんなはれ！

へたへたと木戸は膝を折り曲げ、座り込んだ。真っ暗な絶望感が込み上げる。

「いやだ！　おれはもう、耐えられない……。ここから出してくれよう……」

すすり泣く。

が、？声？は答えようとしなかった。

最終カット

どれほどの時間が経ったろうか。

木戸は蹲（うずくま）った姿勢からようやく立ち上がり、自分がぶん投げた椅子を、のそのそと取り上げた。椅子を演出机の前に置くと、不貞腐れたように、ぐったりと座り込む。

じっとそのまま、絵コンテ用紙を見詰める。

ぱらぱらと、自分が描いた絵コンテのカットを眺める。

自分が描き上げたとは、今でも信じられない。あれほど苦吟していたのが、嘘のようにすらすらと描き進める自分に、ただただ驚くばかりだ。

何だか、どこか別の場所で『蒸汽帝国』の主人公が活躍して、自分は主人公たちの行動を背後からじっと見ていたような気分である。自分は主人公たちの行動を、そのまま描き写していたような感覚があった。

第一話の最終カットは、主人公の三人が帝国軍に入隊する場面で終わっている。

木戸は目を細めた。

しげしげと、自分の描いたカットを見直す。

妙だ。

なぜか、主人公三人の顔が、作画監督の市川、美術監督の山田、色彩設計の宮元の顔に似ている。

確かに自分では、もともとのキャラクターを描いているつもりだった。ところが、見直すと、三人の顔に変貌していた。

机の棚には、キャラクター表がある。

木戸は顔を上げ、キャラクター表を見直して、驚愕のあまり叫んでいた。

「なんだ、こりゃ……！」

未練

主人公のキャラクター表が、さっきの三人の顔に変わっていた。
木戸は考え込んだ。これには自分でも想像がつかない、とんでもない訳がある！

どう対処すべきか……。

木戸は諦めて、鉛筆を握りしめた。
とにかく描き進めるしかない。

新しい絵コンテ用紙を取り上げ、机の上に広げる。鉛筆の先を白紙に押しつけ、さらさらと最初のカットを描く。
あとは自動書記のごとく、勝手に手が動いて、カットを描いていった。
ぱた、と鉛筆を握る手が止まる。

白紙の動画用紙を取り上げ、ある一人のキャラクターを描いていった。描いたのは、女性のキャラクターだった。

ほっそりとした身体つきに、挑戦的な意志の強そうな瞳の美少女である。
木戸は、うっとりと自分の描いたキャラクターを見詰めていた。

いつか『蒸汽帝国』のストーリーに登場させようと考えていたキャラクターである。

美少女には、モデルがあった。木戸の脳裏には、モデルとなった少女の顔がハッキリと焼きついている。

「絵里香（えりか）……」

木戸は、ぽつりと呟いた。

と、不意に自分が描いた動画用紙をくしゃくしゃと丸め、壁に投げつける。両手で顔を覆い、込み上げる悲痛に耐えていた。

未練だ！　執着だ！　いい加減、諦めたらどうだ？　こんなキャラクターにして自分のシリーズに登場させても、本当の相手を振り向かせるなんて、金輪際できる訳ない！

ぐいっと溢れた涙を拭い、木戸は再び絵コンテへの挑戦を続けていった。

軍服

王宮内の、装備支給所で軍服や、装備品を受け取り、市川たちは着替え所に入った。洋子は女性用に入る。

「なんだ、おれの服は？　こりゃ、どう見ても、コックの服じゃないか！」

憤懣を顕わにして、山田は不平を洩らした。

市川は自分の軍服を着用するのに手間取り、山田の着替えなど眼中になかった。

支給されたのは十九世紀風の、肋骨服と言われるものである。色は目の覚めるような青に、ズボンは真っ白な中に、赤いラインが入っている。まるで玩具の兵隊のようである。

頭に被るのは、天辺に羽根飾りのついた帽子であった。どう見ても、儀典用としか思われない軍服であった。

軍服は、市川がキャラクター・デザインしたときに同時に描いたものだ。とはいえ、自分で着込む事態など、まったく考えに入っていなかった。様々なボタンや、ベルトがややこしく、実に手間取る！

目を上げると、確かに山田の着ているのはコックの服装である。コック帽に、前掛け、足下は長靴であった。

市川は、思わず吹きだす。

「似合うじゃないか、山田さん」

「受付の奴、おれが応募のとき、市内で酒場をやっていたと聞いていたから、おれをコックにしやがった！」

山田はむすっと呟いた。じろりと市川の軍服を見やる。
「君はいいよな。なんだか、昔のグループ・サウンズの衣装みたいだが」
市川には山田の言葉が判らない。
「なんだい、そりゃ？」
山田は「聞き流してくれ」とでも言うように、片手をひらひらさせる。時々、山田は市川の知らない過去の思い出話に浸るのが癖で、それが少しばかり市川には鬱陶しい。
「そろそろ宮元さん、着替え終わったかな？」
市川は、つい、洋子を姓で呼ぶ。山田は「かもな」と受けて、着替え所の出口へ向かった。

着替え所を出ると、不機嫌ありありの洋子の出迎えを受ける。並んで洋子の出で立ちを目にした市川と山田は、同時に顔を見合わせた。

洋子は顔を赤くさせた。

「なによ、二人とも！」

「いや、どうも……」

山田は素っとぼけて、首の後ろを撫でる。

市川はニヤニヤ笑いが浮かびそうになるのを、必死に抑えていた。

洋子の軍服は、胸元が大きくはだけた、実に色っぽいものだった。庇つき革製軍帽を被り、両足は剥き出しで、膝小僧を覆うブーツを履いている。

「なんだか、ナチの女看守って感じだな！」

つい、市川は正直な感想を述べるという、おそろしく馬鹿な真似

をしてしまった。市川自身、自分の口の軽さに、ついつい後悔するが、もう遅い。

「馬鹿っ！」

ぱあん！　と大きく音が鳴り、目の前に極彩色の火花と、星が幾つも散った。

きいーん、と耳鳴りがして、市川は踏鞴を踏む。

洋子のビンタが市川の頬に炸裂したのだ。じんじんと市川の頬から顎にかけ、痛みが沁みてくる。

「本当っに、男って馬鹿なんだからっ！」

どすどすと大きく足音を立て、洋子はくるりと背を向けると歩き出す。

山田を見ると、横を向いて肩が震えている。

笑っているのだ。

執務室

新庄に教えられた扉の前に立ち、軽くノックをする。すぐドアが開き、新庄が顔を出した。

首を突き出し、廊下に人気のないか確認すると、手を忙しく振って「入って来い！」と合図した。

執務室というわりには、新庄の個室は狭苦しい。間口二メートルほどの奥行きがひどく長い、鰻の寝床のような部屋である。

窓はなく、天井から壁を伝って、伝声管やら、ダクト、用途不明のパイプなどが数本、室内に伸びている。空気を循環させるためか、大きな換気扇が、からからと微かな音を立てている。

部屋のどんづまりには、デスクが設置されている。デスクの前には簡単な応接セットがあった。

新庄はデスクにちょこんと腰掛けると、市川たちに応接セットに座るよう指示した。

「さて、どうなってる？　演出部屋で妙な？声？が聞こえて、その後は、何が何だか判らなくなって……気がつくと、市川君が声を掛けてきた。それで全て思い出したのだが」

洋子が勢い込んで喋り出だした。

「あの？声？が、あたしたちを、この『蒸汽帝国』の世界へ連れて来たんだわ！　理由は、あたしたちに未完成の『蒸汽帝国』のストーリーを完成させるんだって！」

新庄の目はぐいっと見開かれたが、口許はしっかりと閉じられ、何も言わなかった。無言で先を促す。

今度は市川が、口を開いた。

「そうなんだ！　おれたちが行動して存在しない『蒸汽帝国』のストーリーを進行させ、エンディングまで辿り着ければ、元の世界へ帰れるそうだ。だから、新庄さんを探していたんだ」

山田も身を乗り出し、会話に加わる。

「あと、三村君だ！　おれたち四人と、三村君の五人でストーリーを進めなきゃならないらしい……」

新庄は頷き、やっと口を開いた。

「そうか……。しかし、訳が判らんな。なんでわざわざ、おれたちをこんな世界へ引っ攫うなどと七面倒臭い手間を掛ける必要がある？　あんたらの話じゃ？声？は、まるで神様みたいな力がありそうじゃないか。

神様なら、何でもできるんじゃないか？」

――わしは、神様なんかや、あらへん。

不意に？声？が響き渡り、四人はぎくりと天井を見上げた。

洋子の唇が「あの？声？よ！」と声を出さずに動く。山田は顔を真っ赤にさせ、新庄は凍りついた姿勢のまま、大きな両目をぐりぐりと動かしていた。

――仰山の人が同じ世界を思うと、その世界は現実のものになりますんや。ちょうど、この『蒸汽帝国』のように……。

けど、肝心の木戸はんがストーリーをおっ放り出して、中断してしまったさけ、この世界は不安定でおますねや。

このままでは『蒸汽帝国』の世界は消滅してしまいます。この世界に生きる数十億の人々とともに……。せやから、わしが非常手段を採らざるを得ないんや。

あんたらが活躍してくれたら、この世界は本当のものになりますんや……。

堪らず、市川はすっくと立ち上がり、怒鳴った。

「あんたは誰だ！　神様じゃないとしたら、なぜ、おれたちを連れてくる？」

代打

――だから、世話役のようなもんや。わしのでけるのは、限られておる。

せいぜい、あんたらを連れてくるくらいが限界や。

木戸はんがお手上げになったさかい、あんたらに代打を頼みたいんや。なんとか、この世界で活躍してもろうて、ストーリーを進めてくれんやろうか？

新庄が疑問を呈した。

「そのストーリーだが、どうやって進めるんだ？　おれたちは誰一人、シナリオなど書いた経験はないぞ」

――もう始まってまっさ！　あんたらの行動すべてが、『蒸汽帝国』のストーリーとなるんや！　あんたらが行動する結果、この世界は自然な反応を起こす。ゆえに、あんたらは『蒸汽帝国』の主人公や！

新庄の腰掛けているデスクの表面に、出し抜けに一束の真新しい紙が出現した。背後の気配に、新庄は飛び上がった。

「な、な、なにを……？」

――あんたらの道具や。それを使って、お仕事しなはれ……。

再び？声？は遠ざかっていった。ふっつりと気配が跡絶え、四人は呆然としてお互いの顔を見合わせた。

市川はぎくしゃくと立ち上がった。緊張で、全身が、かちんこちんに強張っている。

デスクを覗き込むと、出現したのは動画用紙の束であった。十六対九の、ハイビジョン画面比率に合わせた用紙である。

市川は呟いた。

「これで、何をしろ、ってんだ？」

市川はもう一度、呟いた。デスクには動画用紙の束がずしりと鎮座している。

胸の奥で、怒りの導火線がぶちぶちと火花を散らして燃えているのを感じる。今にも爆薬に点火し、爆発しそうに思える。

その時、山田が、のんびりとした声を上げた。

「ところで三村君は、どこにいるんだ?」

「へっ?」

市川の怒りの炎が、呆気なく消滅した。山田の場違いともいえる、呑気な声を耳にすると、いつもこうなる。山田の声を聞いていると、怒りを持続させるのが難しいのだ。

洋子が小さく頷いて、口を開いた。

「そうよね。あの?声?は、五人で揃って行動しろって命令してたわ。三村君が加わって、五人になる計算よ」

新庄は。ぎろぎろと両目を光らせた。

「どうやって見つければいいんだ? この広い世界で、たった一人の人間を」

山田はなぜか自信満々に、にやりと笑った。

「それなら心配ない! あの?声?が言っていたろう。おれたちは

『蒸汽帝国』の主人公だって」

市川は、がしがしと頭を掻いた。

「判んねえなあ！　それが何の関係がある？」

「つまりだな」

山田は相変わらず、のびやかな口調である。

「おれたちが主人公なら、おれたちの行動がストーリーを作る。主人公の一人に三村君が加わるなら、おれたちが行動していれば、そのうち勝手に登場するはずだ！」

市川は呆れて、ぽかんと口を開いた。判ったような、判らないような、奇妙奇天烈な論理である。

「それじゃあ、何かい？　おれたちが無闇無鉄砲に動けば、そのうち三村が、おれたちの目の前に現れるって、あんたは保証するのか？」

山田は大きく頷いた。

「おれは、そう思っているがね」

「ふうん」と市川は唇を突き出す。と、ある事実を思い出した。

「それにしちゃ、ちょっと変だな」

洋子が市川の様子に顔を上げた。

「何が変なの？」

市川は洋子に顔を向け、答えた。

「木戸さんの絵コンテ。ほら、演出部屋でたった五枚しか描かれてなかったろう？　多分、最初の場面だと思うんだが、おれが見た絵コンテは、原作と全然、違ってた」

市川の言葉に「え？」と反応したのは、新庄だった。新庄は市川を睨みつけるようにして話し掛けた。

「そりゃ、本当か？　原作と違っているって……？」

「うん。原作は皆、知っていると思う。まず、酒場でおれたちが出会う場面だ。実際、おれは酒場で、最初に山田さんに出会って……」

「あたしを見つけた」と洋子が市川の話を受ける。

市川は頷いた。

「そうだ。全く、原作と同じだ。だが、木戸さんの絵コンテは、違ってた。おれの覚えのない場面だったな」

「どんな場面だった？」

新庄は真剣だった。身を乗り出し、市川の言葉を全身で聞いている。

大問題

市川は新庄の態度に少し気押され、考え考え答える。
「えーと……確か、森の中でおれたちと同じ主人公たちが目覚めるんだ。そこで、お姫さまを襲う怪物と戦って、やっつける……」

山田は顔を顰めた。
「なーんて月並みな出だしなんだ。お姫様を襲う怪物だって？　それを主人公が戦って救うのか？　百万年前も昔のパターンじゃないか！」

新庄は、ぽつり「そうか……」と呟いた。
どこか放心したような表情に、市川は不審を抱いた。

「どうしたんだい、新庄さん。木戸さんが原作と違う絵コンテを描いたのが、そんなに気になるのか？」

新庄は市川の質問に、ぐいっと顔を上げて、ぶるぶるっと大きく首を振る。
「知らん！　おれは、何も知らん！」

大きく叫ぶと、べろりと顔を撫でた。気を取り直したように肩を竦め、宣言する。
「さあ、おれたち、元の世界へ戻るため、頑張ろうじゃないか！　もっとも、何をどう頑張ればいいのか、さっぱり判らないがね」

にやりと笑いかけると、それまで腰掛けていたデスクから、ぴょ

んと床に飛び降りた。
「君たち、おれの手配で近衛中隊に入隊するんだ！　いいな？　これは原作どおりだぞ」
じろりと全員を見据える。市川たちは、新庄の気迫に、一斉に点頭をした。

市川は、新庄がさっきの話題を大急ぎで変えようとしているように思えた。木戸が原作と違う展開で絵コンテを描くのが、新庄にとって大問題であるようだった。

なぜだろう？

汗

トランペットが朗々たる行進の合図を奏で、数百人の軍靴が一斉に上がって、大地を踏みしめた。

玩具の兵隊のような軍服に、真っ赤なラインが入った真っ白なズボン。全員が銃剣つきの歩兵銃を手にし、両手は真っ白な手袋に包まれている。

先頭を歩く指揮官は、指揮刀を掲げ、演壇にずらりと居並ぶ顕官、貴族、将軍に対し、敬意を表している。

演壇を通りすぎる兵士は、さっと右手を挙げ、きびきびとした敬礼をして通過する。将軍たちは鷹揚に片手を挙げ、それに応えている。

空は晴れ渡り、日差しが兵士たちの装備に反射して眩しいほどだ。

暑い！

市川の被った軍帽はむしむしと蒸れ、額からは後から後から汗が湧いてくる。

首筋はきつい詰め襟で締め付けられるようだ。軍服の背中には、滝のように汗が流れているだろう。

「酷い汗だな」

見かねて、新庄が小声で囁いた。

市川は無言で頷く。新庄はこの世界では市川の上官であり、しかも中佐という階級だ。他人(ひと)目がある今の状態で、気軽な口調で会話するわけにはいかない。

ちらりと市川は隣の洋子の胸元を覗き込んだ。洋子は平気な様子で、汗もかかない。もっとも、あんな露出の多い軍服だから、涼しいのかもしれないが。

「何を見てんのよ！」

唇の端で、洋子がぴしゃりと決め付けた。市川は思わず首を竦めた。

閲兵

閲兵式であった。

王宮前の広場には、閲兵式を見物にドーデン市の市民が詰めかけ、見物している。

市川と洋子は、新庄と一緒に演壇に立ち、通過する兵士の列を眺めている。一応、警備兵として立哨しているのだ。

新庄が自分の個人的な部下として、市川と洋子を登録し、便宜を図ったのである。閲兵式は王宮の重要な祭典で、ここに参加すればストーリーが進行するのではないか、という新庄の推測であった。

山田は調理人として、王宮のキッチンで腕を揮っている。妙なのは、山田はキッチンで一人前の調理人としてすぐ通用した。今まで厨房に立った経験すらないのに、持たされたフライパンや、包丁を器用に操って、料理を瞬く間に調理している。

おそらく、調理人という役割をあてがわれているため、習った覚えのない料理をできるのだろう。

同じ理屈で、市川と洋子もまた兵士としての適性があった。刀を抜いた経験すらないのに、支給された軍刀を楽々と扱え、訓練に参加できたのである。

「来たぞ！　第五王子だ！」

新庄が小声で緊張した声を上げた。

市川と洋子は、ぐいっと背筋を反らせ、近づく蒸汽自動車（スチーム・ロコモービル）を待ち受ける。

閲兵式は、王族のお披露目でもあった。

新庄の説明によると、王宮には五人の王子、王女がいるという。今日は、末席の五番目の王子が成人となり、市民に姿を表す大事な日でもあった。演壇にはすでに成人となった四人の王族が居並び、堂々とした佇まいを見せている。

王族

近づいてくる蒸気自動車は、絢爛たる装飾を施されている。

車体は目にも鮮やかなロイヤル・ブルーで、ボンネットにはドーデン王室の紋章が描かれている。金のモールが車体を取り巻き、日差しに金色の光を帯びている。

後席に話題の王子が座り、手を振る市民に愛想良く手を振っている。王族が通過すると、市民の間から歓声が上がった。

自動車がついに市川の目の前を通り過ぎていく。

後席の王族を見て、市川は「あっ！」と小声で叫んだ。

ひょろ長い身体つきに、これまた長い顔。高い鼻筋、彫りの深い顔立ち。身に着けているのは真っ白な軍服で、肩の肩章が目映く光っている。

しかし、あの顔は……。

むらむらと市川の胸に怒りが満ちてきた。

おれがこんな兵士の格好をしているのに、あいつは王族だと！

王子様だって？

冗談じゃねえっ！

市川は大きく息を吸い込み、叫んだ。

「おいっ！」

王子の態度が急変した。それまで身につけていた王族らしい物腰が、市川の叫びに呆気なく剥げ落ちたようだ。

きょときょとと、二つの目玉が、落ち着きなく辺りを見回している。

市川は、もう一度、思いっきりの大声で叫んだ。

「三村健介っ！」

警備隊長

市川の頭には、全身の血が、かっと昇っていた。目も眩む怒りに、すでに周りに気を回す心の余裕など完全に吹き飛んでいる。

呼びかけられた王子――三村健介は見るも無残に今までの態度を急変させ、おろおろぶりは、見っともないほどであった。

三村の視線が、睨みつける市川の目と合った。

瞬間、三村の長い顎がだらりと下がり、両目が大きく見開かれた。さっと顔色が白くなり、まるで音を立てて血の気が引いていくようだった。

「すっ、すみませんっ！　僕が悪いんです！　ご、御免なさいっ！」

頭を抱え「ひいーっ！」と笛が鳴るような悲鳴を、長々と上げた。王子の急変ぶりに、パレードは凍りついた。蒸気自動車は急停止し、運転している兵士と周りを警護している騎馬隊全員が、何事かと厳しい表情で周囲を窺っている。

遂に警備隊長の視線が、王子を睨みつけている市川の顔に止まった。さっと腰の指揮刀を抜き放ち、剣先を突きつける。

「そこの兵士っ！　何を騒いでおるっ？」
「へっ？」と、市川は我に帰った。
きょろきょろと辺りを見回すと、演壇の顕官、王族、将軍たちが一斉に厳しい視線で睨みつけているのに気付く。

指揮刀

「いけねえっ！」

市川は唇を噛みしめた。側にいた新庄プロデューサーは、必死にどこかへトンズラを決め込もうと、逃げ口を探している。

洋子といえば……とっくの昔に姿は欠片もない。市川が叫んだ瞬間、雲を霞と逐電したのだ。

「その場を動くなよ！」

指揮刀を振り翳した騎馬隊長は、さっと馬から降りると、猛然と演壇に駆け上がって、市川を目指して殺到する。

市川には、何もできない。ただただ、自分を目掛け、怒りの炎を両目に燃え上がらせた騎馬隊長の顔を見詰めているだけだ。

指揮刀の切っ先が、市川の喉元へ擬された。

「お前は誰だ！　所属は？　名前は？」

真っ赤な顔で、騎馬隊長が矢継ぎ早に質問を重ねる。口許には真っ黒な髭を蓄え、髭先は念入りにポマードで固められて、ピンと両端に撥ね上げられていた。両目に、折角の閲兵式を台無しにされた怒りが、めらめらと燃えている。

市川は、ぱくぱくと口を開くだけであった。答えようとするのだが、喉元に何か塊が込み上げてくるようで、一言も返答する余裕は

ない。

隊長の視線が、市川の所属を現す肩章に止まった。表情が「意外なものを見る」とばかりに、一瞬ぽかんとした顔つきになる。

「近衛兵か！　すると、シン中佐の指揮下にあるのだな？」

シン中佐とは、新庄プロデューサーの現在の呼び名である。隊長の視線が、じろりと新庄に向けられる。

「中佐殿。これは、どういう騒ぎなのですかな？」

隊長の階級は、大尉である。一応は上官だが、新庄の返答如何によっては、タダでは置かない意気込みが溢れている。

新庄はどぎまぎとした態度で、身を強張らせている。やっと口が開いた。

「そ、それが、そのお……この暑さで、ちょっとおかしくなったのではないか、と」

「ふうむ。おかしく、ね！」

隊長は皮肉たっぷりの表情になって、念入りに新庄の顔を、まじまじと見詰める。

反感

市川には隊長の胸の内で、中佐の階級を持つ新庄に対し、今にも舌なめずりしそうな内心を見てとった。

騎馬隊と近衛兵は、すこぶる仲が悪い。

王族に近侍する騎馬隊に対し、近衛兵は王宮全体を警護する。騎馬隊の隊長は階級は低く押さえつけられているのに対し、近衛兵の指揮官は少佐、中佐は当たり前。時には将軍までを輩出する仕組みに、癪に思っているのだ……とは、後で市川が新庄から知らされた内情である。

新庄は背中を反らせ、高々と声を上げた。

「大尉！」

「はっ！」

軍隊の規律に、隊長はかちんと音を立て踵を合わせると、背筋をピンと伸ばした。

「兵士の処分は、わたしが直に処理する！　このような大事を招来させた責任を痛感し、念入りに調査を行うと約束しよう！　貴官は、即座に自分の本分に戻るよう、命令するっ！」

騎馬隊長はピクピクと全身を震わせ、新庄への反感と、兵士としての規律に引き裂かれている。
しかし、規律が勝り、渋々とではあるが、右手が挙がり、敬礼の形を取った。新庄は、さっと答礼を返す。

「行ってよろしい」

くるりと背を向けると、隊長はしゃっちょこばった姿勢のまま、パレードに戻った。
隊長が乗馬すると、やっと閲兵式は再開された。静々と列が動き、がっくりと背中を曲げた三村を乗せた蒸気自動車が動き出す。

じろり、と新庄は市川を睨みつけた。
「市川君、ありゃ、超まずいぞ……超々……とにかく、こんな場面じゃ絶対あってはならん失態だ！」

新庄は「ふーっ」と深々と息を吐く。歩き出し、ちょっと市川を振り向く。

目には「なぜ従いてこない」と非難がありありと浮かんでいる。
市川は、ぼけっと突っ立っていた。
市川は慌てて新庄の背中を追いかける。

背後を見ると、車から三村が、ぼんやりとした表情で、市川の動きを目で追っていた。
演壇に居並ぶ全員は、反逆者を見る目で市川を睨んでいた。

営倉

市川の処分は、三日間の営倉刑と決まった。

新庄の説明では、これでも信じられないほど軽い処分なのだそうだ。新庄があちこち八方に手を回し、三日間の禁固刑に減刑したのである。

王宮の地下に設けられた兵士の営倉は、立って半畳、寝て一畳を文字通り再現したものだった。

この世界で畳は存在しないだろうが、きちきちに狭い室内に、やっと跨れるだけの小さな便器。横になると、両肩が、両方の壁にぴったりと押しつけられる。

しかも、壁はすべて金属製で、触るとひやりと冷たく、天井は逆に高々として、十メートルは優にある。もし閉じ込められたのが冬であれば、確実に凍死する。

ごろりと市川は営倉の床に寝ころび、両腕を頭の後ろに回し、ぼんやりと天井を見上げた。

天井には、ぽつりと小さな電球が一つ、黄色い光を室内に投げかけている。

電球か……。

市川の放り込まれた『蒸汽帝国』では、蒸気機関と電気は日常の一部となっている。

市川は、科学の歴史を思い出そうとしていた。マイケル・ファラデー、エジソン、フルトン、キャベンディッシュなどの科学の偉人の名前が頭に浮かぶ。

市川はアニメ業界に飛び込む前の中学生時代、それら科学の歴史に興味があって、発明家や科学者の偉人伝などは図書館で貪るように読んだものである。

この世界にもエジソンのような発明家がいて、電球を発明したのだろう。しかし、政治体制は、十九世紀以前の、王制が維持されている。市川は原作の世界設定を思い出そうとしていた。

確か、帝国――ボーラン帝国という――が存在する大陸は、市川の元いた世界ではヨーロッパ大陸に酷似し、周辺には様々な王国が覇権を競い合っている。

似た歴史を探せば、戦国時代の日本か、都市国家が群立する中世イタリア、あるいは統一前のドイツ・プロイセン諸王国か。

これから先、どうなるんだろう……。

言い知れぬ不安に、市川の心は揺れた。

がちゃり、と営倉の通路に扉の開く大きな音が響いた。
次いで、こつこつ、と足音。足音は一人だ。
市川は首をもたげた。

かたん、と営倉の扉につけられた覗き扉が開いた。

「市川さんっ！」

囁き声に、市川は驚き、寝転がっていた床から一飛びで跳ね起きた。覗き扉に縋りつく。

「三村か？」
「はい……」

市川が覗き扉に顔を押し当てると、通路に立っていた三村が、ちょっと身を引いた。

相変わらず、おどおどした態度だ。背後から、誰かに怒鳴られるのではないかと、両目をぐるぐるさせて、周囲に気を配っている。
身に纏っているのは、豪奢な王族専用の軍服に、背中に翻した真っ赤なマントである。
黙って立っていれば、周囲をひれ伏さんばかりの貴族的な顔立ち

をしているのだが、今は、ただの臆病者でしかない。

ごくり、と喉仏を動かし、三村は覗き扉に顔を押し付けている市川に視線を戻した。

「僕、三村健介、ですよね？」

市川は嬉しさに、思い切り叫んでいた。

「そうだっ！　思い出したか？」

「ええ……」と三村は、あやふやな態度になった。市川は眉を顰めた。

「どうした？　お前、元の世界へ帰りたくないのか？」

三村は両目を見開いた。

「帰れるんですか？」

善処

市川は勢いづいた。

「そうさ！　おれたち五人――おれと、宮元さん、山田さん、新庄さん――それに、お前の五人で行動すれば、元の世界へ帰れる！」

市川は、そもそもの最初の経緯から説明した。演出部屋で聞こえた謎の？声？から始まって？声？が市川たちに理不尽な命令を下し、市川たちは不承不承承知した次第など、など。

「そうですか……」

頼りない三村の返事に、市川は苛立った。

「どうしたんだよ！　お前、まさか、この世界が気に入っているんじゃあるまいな？」

三村は、ぎょっと顔を上げた。慌てて否定の言葉を口にする。

「ち、違いますっ！　僕だって、元の世界へ帰りたい……。でも、どうしていいか……」

市川は、にんまりと笑った。

「それなら抜群の手がある！　いいか、あの？声？は、おれたち五人が一緒になって行動して、エンディングまで辿り着けと命令していた。五人は揃った！　お前が最後だ！　とすればだな、お前が王

子としての権威を利用して、おれたち五人が常に一緒に行動できるよう、命令すればいいんだ！　判るか？」

「ええ、何となく……」

相変わらず三村の返事は、蜻蛉の羽音のように頼りない。

これが三村の地であると、市川は思い出した。常に三村からは、自信という二文字がぽっかりと抜け落ちているのだ。

「判りました、何とか善処します……」

朦朧とした表情で頷くと、足を引き摺るようにして、三村は出口へと立ち去った。

三村を見送り、市川は「大丈夫か？」と思い切り首を捻っていた。

あまりに捻りすぎて、首筋の筋肉が痛むほどだった。

出獄

三日が過ぎ、市川はようやく解放されて、ヘロヘロの状態で引き出された。

身動きがとれない、狭苦しい部屋での禁固刑が、これほど体力、気力を消耗するものだとは、思っても見なかった。今度、主人公が牢獄に閉じ込められるアニメの仕事があったら、リアルに作画できるなと能天気に思った。

刑期を勤め上げた市川は、新庄の執務室に迎え入れられた。執務室には、すでに山田と洋子が待っている。

長椅子にへたりこんだ市川の目の前に洋子が立ちはだかり、両手を腰にやって高々と説教する。

「馬鹿ねえ……。あんたが馬鹿だとは前から思ってたけど、あれほどの掛け値なしの、最低の大間抜けだとは知らなかったわ！」

市川には言い返す気力は、一ミリグラムも残ってはいなかった。

「おい、説教もほどほどにしとけよ。市川君も、こってり身に応えたろうし」

山田が相変わらずの、のんびりとした口調で嗜める。洋子は「ちっ」と舌打ちした。

「それで、王子様が三村君だってのは、確かなの？」

市川はのろのろと顔を仰向かせ、洋子の質問に軽く頷いた。
「そうか」と山田は腕を組む。
軽く眉を寄せ、何か考え込む仕草である。
「どうなるんだろうな……。これからストーリーは、まともに進行するんだろうか？」

その時、ばたり！　と大きな音を立て、執務室の扉を開いて、新庄がせかせかした様子で入室してきた。

「大変だ、大変だ！　大変だったら、大変だ！」
まるで歌うように、奇妙な抑揚をつけている。「大変だ」と言う割には、表情は輝き、両目にはウキウキした態度が見られる。

大ニュース！

山田は腕組みを解き、新庄を見た。

「どうしたんだ……」

新庄は扉を背中で閉めると、その場で小躍りしている。顔を上げると、注目している三人に気付き、照れたように額をぴしゃりと、手の平で打った。

「ニュースだ！　大ニュース！　何と、五番目の王子様の結婚が決まったぞ！」

「何だって！」と、三人は一様に叫ぶ。市川もまた、それまでの鬱々とした状態から、一気に目が覚めた思いであった。

「五番目の王子様って、三村の……？」

市川の呟きに、新庄は大いに頷いた。

「そうさ！　前々から話はあったが、今度の成人の祝いと同時に、発表があった！　王子様――つまり三村君は、これから隣国のお姫様に会いに出発する！　しかも、おれたち四人が、御付きの者として選出された！」

さっと市川は立ち上がった。

やりやがった！

おれの忠告に従い、三村の奴、行動を共にするため王子の特権を

利用したんだ！
ストーリーが動き出した！

これからの予想は困難だが、これで現実世界への帰還が、一歩だけは近づいた！
その時、市川は、心底から確信していたのだ。

少なくとも、この時点では……。

飛行場

ブラス・バンドが国歌を演奏し、礼砲が飛行場に鳴り響いた。

空は相変わらずの晴天である。

抜けるような青に、ぽっかりと白い雲。

市川は「そういえば、今まで曇天は見ていないな」と胸のうちで呟いた。アニメでは、特別な場面でない限り、空は晴れ渡っているのが普通だ。

飛行場には、長さ百メートルはあろうかと思われる葉巻型の飛行船が横たわっている。葉巻型の胴体には、ボーラン帝国の紋章がでかでかと描かれていた。

飛行船には階段が横付けされ、前方には帝国の重要人物が勢ぞろいして、五番目の王子――つまりは、三村健介――を見送りに来ていた。

三村は見送りの人々と律儀に握手を交わし、時々、短く会話をしている。

堂々としていて、余裕すら感じさせる態度に、市川は「あれが三村か？」と密かに呆れていた。現実世界での三村とは、どうしても同一人物とは思われない。

それら見送りに来た連中との会話を切り上げ、三村はゆっくりと飛行場に整列している兵士たちに近づいてくる。

市川たち四人は、列の最後尾に並んでいた。

三村は近づくと、市川の顔を認め、表情にちらりと弱気らしきものが浮かぶ。

つい、と視線を逸らし、小走りになって階段へと急いだ。そこだけ見ると、やはり普段の三村である。

軽い足取りになって三村は階段を登ると、搭乗口付近で背後を振り返った。

わあああ……。

飛行場に詰め掛けた見物の市民から、一斉に歓声が湧き起こる。

三村は階段の天辺から、腕を挙げ、市民の歓呼に応えていた。

優雅な仕草で三村は軽く頭を下げ、飛行船の船内に姿を消した。

「なんとまあ……」

市川の隣に立っていた山田が、首を振り振り、驚きの声を上げていた。

「あれが、三村君かね？　まるで、生まれながらの王子様に見えるぞ」

山田の言葉に、市川は無言で頷いた。まったく、同感だ！

伏線

「全員、搭乗！」
指揮官が大声を上げ、その場にいた兵士たちが動き出した。ぞろぞろと階段を登り、次々に船内に入っていく。
搭乗する兵士の列を見上げ、市川は驚きに目を見開いた。

あの女！

ほっそりとした肢体に、帝国の軍服を身に着けた、木戸監督の特別注文でキャラクター設定をした女が、列の先頭付近にいた！

市川の胸に、むらむらと予感が湧いた。
きっと、あの女、何か仕出かす！
予感というより、確信だった。
だって、今いる世界はアニメの世界なんだぜ……。しかも女は、何度も市川の目の前に伏線として登場している。何か仕出かさないと思わざるを得ないじゃないか！

面白くなってきた……。

自分の感想に、市川は吃驚していた。何だか、この冒険を自分は楽しみ始めているのではないか、と疑い始めていたのである。

違う、違う！　断固、違う！　おれは何としても、元の世界へ帰るんだ！　こんな気違いじみた状況は、どうあっても耐えられそうにない……。

が、確実にそうだと言い切れない自分にも気付いていた。

飛行船

ふわりとした上昇する感覚が足下から達し、市川は客室の丸窓に顔を押し付け、外の景色を眺めた。

飛行場は一面に芝生が植えられ、真っ赤な軍服を身に纏った軍楽隊が行進曲を奏でている。遠くには、王子の出立を見送る市民の群れが、盛んに手を振っていた。

ぐうん、と地面が遠ざかり、細長い飛行船の影が落ちている。見る見る飛行場は小さくなり、遙か地平線近くに、ボーラン市と、王宮の建物が見えていた。

「さて、ようやく出発だ！」

新庄が満面に笑みを浮かべ、宣言した。ストーリーが動き出し、前途に希望を見出したのだろう。

山田も、洋子も、同じように思っているらしく、笑顔になる。

三村は、ややぼんやりとした表情で、窓の外を眺めているだけだ。

飛行船の、王族専用の客室である。判りやすく説明すれば、飛行船は御用飛行船であった。

本来なら百人以上も乗船できる構造だが、王族が乗り込むため、定員は半分以下になっている。空いたスペースには、王族のための客室や、料理のためのキッチンが設置されている。つまり、空飛ぶホテル、というわけだ。

市川は山田に尋ねた。

「これから向かう先は、何て場所だい？」

「はて」と山田は首を捻った。

「そう言えば、隣国としか聞いていないな。新庄さん、あんたは知っているかい？」

新庄は目をギョロギョロと動かし、細かく首を左右に振った。

「おれも知らん！　三村君はどうなんだ？　何しろ、花婿なんだろう。相手の花嫁の名前くらい、聞いていないか？」

役名

三村の顔が、見る見る不安に歪む。ぶるぶると、何度も、否定に横に振られた。

「ぼ、僕……知りません！　そうだ、僕、何て名前でしたっけ？」

洋子が呆れて声を上げた。

「三村健介でしょう？　しっかりしてよ、自分の名前も思い出せないの？」

三村は今度は大きく首を振る。

「いや、そうじゃないんです。僕の言いたいのは、役名ですよ！　この世界の、ボーラン帝国の五番目の王子としての役名です。ほら、新庄さんは帝国軍でシン中佐と呼ばれているじゃないですか！」

「あ！」と全員が顔を見合わせた。

「そうだ！　アニメのキャラクターなら、名前があるはずだよ！　おれたち、最初から軍隊に応募するとき、本名を使っていたから気にしなかったけど、うっかりしてた……」

市川は、無意識に、頭をがしがし掻いていた。本来なら、応募する際、アニメのキャラクターの名前を名乗るべきだったのだ。

山田は市川に向き直った。

「市川君は、王子様とか、お姫様のキャラクター設定をやったか？」

市川は首を振った。

「まだ、やっていない。何しろ、王子様の出てくる話数は、かなり後になるからな。おれのやったのは、最初の二話三話だけだ。原作では……」

市川は脳裏に、木戸純一による『蒸汽帝国』の原作を思い浮かべていた。

思い出せない！

愕然となった。確かに、原作は読んでいるはずなのに、名前が浮かばない……！

お仕事

「どうしよう！　憶えていないぞ！」

市川の叫びに、全員が顔を見合わせた。

新庄が大声を上げる。

「それがどうした？　名前くらい、別に大した問題じゃないだろう？　三村君は、三村君。健介王子様でいいじゃないか？」

いかにも新庄らしい、雑駁な結論だった。

――王子様の名前はアラン王子や……。

部屋に響いた？声？に、全員飛び上がった。

――しっかりしてくれんかな？　そんな曖昧な記憶じゃ、お仕事を任せられん。

市川は、むっとなって言い返した。

「なんだよ、お仕事って？」

?声？はすぐさま、反応した。

――アニメのお仕事や！　あんたら、冒険だけしとったらええと、呑気に思ってるんやないやろな？

洋子は目を光らせる。

「違うの？　あんた言ったじゃないの。あたしたちが行動して、ストーリーを進めろ、って。他に何をしろ、って言うの？」

――さっきも言ったように、アニメのお仕事や！　これからあんたらが向かう隣国、バートル王国の設定と、王子様と出会うお姫様。王国の大臣、王様、兵士、一切合財が全て必要や。そうでないと、隣国は存在せえへん。

立ち上がった市川は、手足を振り回し、喚いていた。

「そんなの、無理だ！　木戸監督と打ち合わせしていない！　打ち合わせなしで、設定するなんて、無茶もいいところだ！」

?声？は冷酷に返答した。

――無茶でも何でも、やりなはれ。どんな設定しても構わん。とにかく、ストーリーが進行するのが大事やからな……。

遠ざかる?声?に、市川は「待ってくれ!」と叫んだが、無駄であった。

自覚

ふっつりと気配が消え、残された全員は呆然と、お互いの顔を見合った。

ふと、市川は三村を見た。

三村は王族に用意された豪華な椅子に座り、宙を虚ろに見詰めている。

唇が動き、呟いた。

「僕は、アラン王子。それが僕の名前……」

不安になって、市川は三村の前に立ち、まじまじと見つめた。三村の表情には、新たな決意のような色が浮かんでいる。

「おい、どうした、三村君」

いつもは「三村！」と呼び捨てにするのだが、今の三村にはそうさせない、何か奇妙な雰囲気が漂っている。

三村の視線が動いて、市川を見た。

一瞬、以前のおどおどとした、臆病そうな表情が浮かんだが、すぐに拭い去るように消え去り、市川がはっとするほど断固たる表情に変わった。

すっくと立ち上がった三村は宣言する。

「僕は、アラン王子！　そうなんだ、僕はボーラン帝国の、第五王子なんだ！」

拳を握りしめ、立ち尽くす三村を、市川はただ驚きに打たれ、見詰めるだけだった。

絶対拒否！

全員、しばらく無言だった。？声？の命令を、じっくりと胸の内で咀嚼していたのである。

「設定がないと、これから向かう……確か、バートル国とか聞いたな……は存在しないと言っていたな」

山田が、のそのそとした口調で口火を切った。

洋子が大きく頷いた。

「そうよ！　あたしたちが設定を描かないと、どこにも行けない話しよね。本当かしら」

「冗談じゃねえ！」

むかむかとした怒りに、市川は思わず手近の椅子を蹴り飛ばした。

椅子は、どっしりとして、市川が蹴っただけでは、びくとも動かない。市川の爪先が痛んだだけであった。

「痛ててて……！」

爪先を抱え、ぴょんぴょんと飛び跳ねる市川を、洋子は唇の端に笑いを浮かべ、皮肉そうな表情で眺めている。

洋子の表情を目にして、なぜか市川は、さらに荒れ狂った。

「何が可笑しいっ！　おれは絶対、あいつの命令なんか、御免だからなっ！　キャラクターを描けだって？　厭だっ！　金輪際、何が何でも、一切合財……」

後は語彙が貧弱で、続かない。

ともかく妙な？声？のお告げなど「はい、そうですか」と従う気には金輪際なれなかった。

山田はポカンとした表情を浮かべ「呆れたな」と言わんばかりに口を丸くしている。

「おいおい、市川君。何をそんなに臍を曲げているんだ？　君は、現実世界へ戻りたくはないのか？」

山田に問い詰められ、市川は渋々ながら頷いた。

「そりゃあ、いつまでもこんな気違いじみた世界に島流しなんて、御免だよ」

山田は首を振った。

「それじゃあ、すぐ仕事に取り掛からないと……。おれは、バートル国の設定……王宮とか、城下町を設定するから、君は町の住民や、王様、兵士、お姫様の設定を頼む」

市川は、歯を食い縛った。

じろりと一同を見やり、呻く。

「本当に帰れるのか？　おまえら、あの？声？の言葉を信じるのか？」

「市川っ！　いい加減にしろっ！」

堪りかねて、それまで無言だった新庄が大声を上げた。顔は真っ赤に染まり、眉間には深々と皺が刻まれている。

「おれは御免だぞ！　おれには、家族がいるんだ！　女房に、子供に、それに【タップ】の社員にも責任がある。こんな世界で、引っ掛かっていられねえんだ。それに、何としても『蒸汽帝国』をもの

にしねえと、会社が立ちゆかねえ……」

最後の台詞で、新庄は「あっ」と口を押さえた。が、もう遅い。山田は立ち竦んでいる新庄を凝視していた。

洋子がポツリと呟いた。

「平ちゃん……」

山田は、チラリと洋子を見ると、新庄に向き直った。

「新庄さん、そりゃ本当か？　会社が危ないのか？」

新庄は、がくりとソファにへたりこんだ。顔色は元に戻っている。両手を握り締め、視線を床に落としている。

山田は静かに話し掛けた。

「説明してくれないか？」

新庄は自棄になったように、不貞腐れた顔を上げて、全員を見回す。

「ああ、本当だ」

皮算用

新庄は楽な姿勢になると、口を開いた。

「【タップ】は危ねえってのは、本当だ。何しろ、外注の支払に、三ヶ月の先付け手形を切っているほどだからな。外注先からは、ぶうぶう文句を言われているよ。しかし『蒸汽帝国』が、きちんとオン・エアされれば、事情が違ってくる。何しろ、【タップ】制作って冠がつく……。

今までの【タップ】は、大手の下請け、孫請けだったが、今度は元請だ！　代理店と直で取り引きできるんだ！　もう、上の制作のピン撥ねなんか、一切ねえんだ……。それに、著作権料も入ってくる。それもこれも、『蒸汽帝国』がきちんと制作できるってえ、前提なんだ……」

一気に捲くし立てると、背中を反らして、じろりと迫力ある目付きで全員を睨みつけた。

新庄の目付きには「文句なんか言わせねえぞ！」と、無言の圧力が籠められている。

市川は、ある疑問を口にした。

「どうして【タップ】が元請になれたんだ？　今まで下請けばかりだったんだろう？」

新庄は苦笑いをした。

「木戸さんが、おれと同期だったからだよ！　あいつとおれは、大学の漫研仲間だったんだ！　あいつの口利きで【タップ】制作が決まったんだ！」

今度こそ、全員に衝撃が走った。

なぜか、市川に笑いの衝動が湧き上がる。

「な、な、なあーる、ほど……。あんたと木戸監督が同期の桜って、知らなかったよ！」

けたけたと気違いじみた高笑いをする市川は、なぜこんなに可笑しいのか、自分でもさっぱり判らない。

苦々しげな新庄、呆然とこちらを見ている洋子や、山田の視線を感じると、さらに爆笑の発作が襲う。

内省

山田が市川の背中を軽く叩いた。

「もう、その辺にしとけ」

市川は「ひいーっ！　ひいーっ！」と必死になって笑いの発作を抑え込む。あまりに笑いすぎて、息が苦しい。

洋子が大きく、両手を上へ差し上げた。

「なるほどね、【タップ】の台所事情は、ぜーんぶ、判ったわ！　でも、そんなの、あたしたちには関係ないわ！　あたしは、どうしても、元の世界へ帰りたいわ！　何たって、こんな……こんな馬鹿げた衣装しか着られないなんて、耐えられないわ！」

洋子は自分の身に着けている軍服を、忌々しげに睨んだ。胸元が大きく開き、ぴちぴちに短いスカートに、まるでＳＭショーの衣装のような長い革靴という格好である。じろっと市川を睨みつける。

「あんたのせいだからね！　あんたが、こんな衣装を設定したから……。ねえ、どうしてもっと、まともな設定にしなかったの？」

市川は、ぶすっと返答した。

「しょうがねえじゃないか。木戸さんの注文なんだから……」

山田も考え深げに呟いた。

「おれだって、元の世界へ帰りたいのは同じだよ。おれにも家族がいるしな……。末の娘は来年、中学に進学だ。こんなところで、う

ろうろしちゃいられないんだ……」

市川は、自分はどうなんだろう、と考えた。独身で、家族もない。恋人さえ、いなかった。

杉並の、アパートに待つのは、ＤＶＤの山と、ゲーム機、それにネットに繋がったパソコンだけである。

是非とも会いたいと思う、友人すら全然いない。

思えば、中学卒業と同時にアニメ業界に飛び込み、無我夢中でやってきた。好きな仕事ができるだけで満足で、他の余計な考えが忍び込む余裕すら、欠片もなかった。

市川は、それまで、ずっと黙って立ち尽くしている三村に注意を戻した。

出し抜けに聞こえてきた?声?が、三村の役名である「アラン王子」の名前を耳にした瞬間、態度が激変した。

三村は全員に背を向け、窓の外を食い入るように見詰めている。

市川は、三村の背中に呼びかけた。

「おい、三村!」

びくり、と三村の背中が緊張し、首がぐいと捩じ向けられた。

「は、はい、何でしょう……」

表情に、以前の気弱な性格が戻ってきている。視線が、おどおどと周囲を彷徨った。

「おめえは、どうなんだ。おめえも、元の世界へ帰りたいんだろう?」

「は、はい……」

一応、市川の問い掛けには返事しているが、まるで上の空だ。

市川は心中「三村には注意すべきだ!」と決意していた。?声?の命令が本当なら、五人全員が揃っていないと、現実世界への帰還は難しそうだ。

が、三村の様子を綿密に観察するにつれ、断固として現実世界への帰還を願っているようには、思えない。

確かに自分には、待ってくれている愛しい相手はいない。元に戻っても、相も変らぬアニメ業界の、忙しい日々だろう。

しかし、市川は、それでも構わないと思った。今、市川は、猛烈に、アニメの仕事への渇望が湧いているのを感じていた。

設定作業

何だか、これ以上しつこく我を張るのが馬鹿らしくなり、市川は山田と机を並べ、設定作業に入った。

新庄が執務室に？声？が寄越した動画用紙の束を保管しておいたので、それが作画用紙となった。

「どっちが表だ？」

市川は紙を取り上げ、明かりに透かして見た。

用紙の表と裏では、描き味に、微妙な差がある。表側は滑らかで、裏側はやや毛羽立っている。どちらが描きやすいかは、人それぞれであるが、市川は表側を好んでいる。

鉛筆は、できたら三菱のユニ４Ｂが望ましい。市川は筆圧が高いので、ＨＢなどの硬いやつでは、先がぽきぽき折れてしまう。

本当だったら、作業中に音楽を鳴らしているのだが、今はプレイヤーもお気に入りのＣＤもないので、しんと静まり返った飛行船の客室で作業に取り組んでいる。

以前、山田から聞いたが、やはり静寂の中で作業をするのは苦手とかで、山田はテレビの音を背景音としているのだそうだ。テレビの会話は中身がないから、かえって気が散らないのだという。

「山田さん、どんな線で行く？」

山田に質問すると「そうだなあ」と両手を首の後ろに回し、天を仰いだ。

「今までがスチーム・パンクの世界観でやってきたから、がらりと

内容を変えてはどうかな？　例えば、魔法が使える世界だったら」
「設定を変えるのか？」

市川は吃驚した。そんな変更、監督との打ち合わせなしでやって、いいのだろうか？

「まあ、木戸さんがいないしな。それに、同じような世界観では、視聴者に飽きられる」
山田はニヤリと笑い返した。山田の悪戯っぽい表情を見て、市川もノッってきた。

「そうか……もし、木戸さんが絵コンテをどこかで描いているなら、おれたちの設定をどう料理するか、楽しみだ！」

市川は振り向き、ぼけっと突っ立っている三村に声を掛けた。

「おい、三村。これからお前さんのお嫁さんを設定するんだが、どんなお相手がいい？」

三村はキョトンと市川の顔を見詰め返す。

「ぼ、ぼ、僕の……お、お嫁さん？」

たちまち、三村の顔が真赤になった。

隣で、山田が、くつくつと忍び笑いをしている。

市川は作画用紙に向き直り、さらさらとお姫様らしき姿を描いていった。

あれ？

ナゼだろう。どういうわけか、市川はお姫様の顔を、あの謎の女の顔にしていた。今まで何度かお目にかかった、すらりとした肢体の、意志の強そうな表情をした娘である。

消しゴムで顔を消し、別の顔を描こうとしたが、やはり市川の筆先は、あの娘の顔になってしまう。

ええい、ままよ！

何か訳があるのだろうが、市川は自分の勘を信じた。きっと、こ

れから先の展開に、あの女は関わってくるんだ。それで、お姫様の顔があの娘の顔になってしまうんだ。

お姫様、大臣、王様、兵士、町の人々……。市川はいつものように、あっという間に描き上げた。市川の手は早い。

それを見て、山田は洋子を振り向き、呟いた。

「洋子ちゃん、色指定、しないとな」

洋子は山田の言葉に両手を広げた。

「色指定って、どうすんのよ？　道具がないわよ！」

山田は首を振った。

「君、色指定の番号でやれないか？」

アニメがコンピューター入力で制作されるようになって、色指定の方法も様変わりした。

普通なら、市川のキャラクター表をスキャナーで取り込み、パソコンの画面に呼び出して、スポイト・ツールで色を入力する。

パソコン導入以前の色指定は、取り引きしている絵の具会社のカラー・チャートに指定されている色番号を、キャラクター表に直に書いていって、指定したものである。

絵の具はすべて特別に調合されたもので、色の種類もせいぜい五、六十ほどしかない。それで、色指定は背景画の色と合うよう、また、フィルムの現像上がりを予想して指定したのだ。

完成

「そりゃあ、できるけど……」

洋子は不服そうに唇を尖らせた。

色指定の番号でやれる、というのは、洋子がデジタル以前の、手作業で色を一枚一枚しっかり塗っていた頃の作業をやっていた証拠である。歳がばれると思ったのだろう。

洋子は市川からキャラクター表を受け取ると、素早く色番号を指定し始めた。

「あら？」

洋子は目を丸くした。

「どうした？」

市川と山田は、洋子の手許を覗き込んだ。

「色が……」

洋子が手にしたキャラクター表に、見る見る色が着いていった。鮮やかな色彩で、あっという間に色指定表が完成していた。

「おいおい、こっちもだ……」

山田が頓狂な声を上げる。

市川は山田の美術設定を見て、驚いた。

「山田さん、いつ色を着けた？」

山田の描いた美術設定には、すでに色が着色されていた。背景画そのもののタッチで、美術ボードとなって完成している。

山田は呆れたように首を振った。

「判らねえ……。おれは設定を描くとき、絵の具で描いた完成画を頭に浮かべて描くんだが、一枚、描き上げた途端、こうなった……」

「ふうん」と市川は一人、頷いた。

「多分、これも、この気違いじみた世界での約束事なんだろうな。いいじゃないか！　山田さんも、ラクできらあ！」

新庄が立ち上がり、三人の背後に立った。

「美術設定と、キャラクター表ができたのはいいが、これをどうするんだ？」

OKサイン

市川は三村を見た。

「そりゃ、常識的に考えれば、木戸監督に渡してOKを貰う段取りだよ。三村が制作進行なら、届けなきゃならねえ……」

「僕が、ですか」

恐る恐る、三村は市川と山田から設定画を受け取った。

「わっ！」

三村は小さく悲鳴を上げた。

何と、受け取った三村の手許から、設定画がじわじわと空中に溶け込み、消えていった。

きょろきょろと五人は、客室の内部を見回していた。

「どこへ行った？」

「消えちまったぞ！」

はらり……と空中から再び用紙が出現し、ふわりと床に舞い散った。

一枚を手に取り、市川は喚いていた。

「これを見ろよ！」

全員が市川の手許を注目した。市川は一同に用紙がよく見えるよ

う、掲げた。

「木戸さんの……」と新庄。

「ＯＫサインだ！」これは山田。

出現した設定用紙には、木戸監督のＯＫサインが、でかでかと書かれていた！

床に散らばった設定画を、新庄は這いつくばるようにして掻き集めていた。

と、その手がぴたりと止まる。一枚の設定画を手に、さっと立ち上がり、無言で手元の紙を見詰めていた。

表情が険しくなっている。

「このキャラ表は？」

市川は、新庄の問い詰めるような厳しい口調に驚いて、顔を上げた。新庄は真剣な眼差しで、市川を睨んでいる。新庄の手にしているのは、お姫様のキャラである。

「ああ、そりゃ三村のお嫁さんだ。つまり、これから行く隣国のお姫様だよ」

「何で、このキャラを設定した？」

明らかに新庄は詰問の口調だ。市川はむらむらっ、と癇癪の虫が、むくりと頭をもたげるのを感じていた。

「何でって、知らねえよ！　手が勝手に動いたんだ！　どうして、そのキャラが気になるのか教えてくれよ！　元々は木戸さんが、おれにラフを描いて寄越して、これを後で使うからキャラクター起こしてくれと頼んだんだ」

「そうか……」

新庄は、ほっと肩の力を抜いた。が、眉は未だに顰められ、何か

考え込んでいる様子だ。

「どうしたの、平ちゃん？」

洋子が心配そうに声を掛ける。

新庄はぷい、と横を向いた。

「何でもない……」

「何でもなくは、ないだろう！」

市川の声が甲高くなった。一歩、ずい、と前へ出ると、新庄を睨みつける。

「そのキャラ、おれたちが兵士募集で王宮に集まったときにもいたぜ。あんたは顔を合わせているはずだ。憶えてないのか？」

新庄は、ぽかりと口を開いた。目が虚ろになっている。

「あっ！　そういえば！　確かに、見た覚えがある……。だが、あのときは、まだ君らに声を掛けられる前で、記憶が戻っていなかった……」

市川は唇をぺろりと舐めた。

「それに、言わせて貰えば、その女。この飛行船にも乗り組んでいる！」

「えっ！」

新庄は今度こそ、心の底から驚いた様子で、両肩ががっくりと下がっていた。よろよろと数歩、後ろに下がり、頭に手をやって呆然となった。

さらに問い詰めようと、市川が息を吸い込んだ瞬間、ノックの音

が響いた。

ぎくり、と一同は身を強張らせた。

存在

「失礼致します！　報告に参りました！」

ドアの向こうから、四角張った声が聞こえ、市川は三村を振り返った。

三村は、ぐっと背を伸ばし、王子らしい物腰を取り戻していた。

「入ってよろしい！」

凛とした、王子らしい命令口調である。市川は、三村の変貌ぶりに呆れた。

がちゃりと音を立て、ドアが開くと、全身を、ぴんと突っ張らかせた騎馬隊長が立っている。相変わらず、口髭はこってりとポマードで固め、両端をピンと撥ね上げていた。

「現在、飛行船はバートル国の領内に入りました！　護衛の者、総て到着に備えておりますので、是非とも殿下の謁見を賜りたく存じます！」

市川たちの視線が素早く交わされた。山田は市川の向かい側に立ち、頷く。無言で「設定画を完成させた途端だな！」と目が語っている。市川も頷き返した。

つまりは、隣国が存在を始めたのだ。

「分かった……。今、行く」

三村は鷹揚に頷いていた。三村の態度は、微塵も元々の気弱さを感じさせない。

かちゃん！　と踵を打ち合わせ、騎馬隊長はきびきびとした敬礼をして退出した。

感触

「おい！　ストーリーが動き出したじゃないか！」

新庄が爛々と目を輝かせている。

市川はさっと身を翻すと、窓に顔を近づけ、外を覗き込んだ。

地平線の彼方に、森に囲まれた王宮と、その周りを城下町がぐるりと取り囲んでいる。全体に中世ぽい雰囲気で、ごつごつとした岩山に、へばりつくように城が聳えている。

市川は子供のように叫んでいた。まさしく、たった今、山田が設定したお城である。

城のデザインは、中世ヨーロッパに準拠していたが、山田は中近東らしき、モスクの建築様式も取り入れ、どことなく無国籍な雰囲気を漂わせている。

「バートル国の王宮だ！」

市川の側に洋子が近づき、顔を並べた。

「本当だわ！　凄く綺麗……」

無意識であろうが、洋子の胸が市川の背中にぎゅっと押し付けられていた。柔らかな胸の丸みが、はっきりと感じられ、市川は思わず顔が火照るのを感じていた。

「おい！　外を眺めるのは、いつでもできる！　それより、謁見だ！」

新庄の言葉に、市川はぎこちない仕草で、窓から身を離した。
洋子も身を離し、市川の背中の二つの重みが消えた。もう少し、堪能したかったのに！

ドアを出て、狭苦しい廊下を三村を先頭にぞろぞろと歩く。
真っ直ぐ進むと、船尾部分に向かう。そこは広々として、公的な行事を執り行える構造になっている。

船尾には、すでに三村の――いや、アラン王子の謁見を待つ護衛の兵が整列していた。
みな、きちんと制服の皺を伸ばし、背筋をぴんと反らし、アラン王子の今や遅しと、到着を待っていた。

「アラン王子殿下！　謁見――！」

入口で待ち受けていた儀場兵が、爵杖を振り上げ、高々と語尾を延ばして叫ぶ。ざざっと音を立て、全員が直立した。
ゆったりと王族の威厳を漂わせ、三村が歩き出す。市川たちは御付きの者であるので、入口付近に立ち止まって控えている。

と、市川の視線が、列の真ん中付近に立っている一人の女兵士に止まった。

あの女だ！

なぜか女兵士は、ぎらぎらと怒りの視線を三村に注いでいた。口許がぎゅっと引き絞られ、強情そうな意志の強さを顕している。

三村が女兵士の前を通り過ぎると同時に、女は腰の剣をすらりと抜き放ち、叫んだ！

「アラン王子！　覚悟！」

剣戟

ぎょっと、その場にいた全員が凍りつく。
魂消るほどの喚き声を上げ、女は振りかぶった剣を、三村目掛けて振り下ろした！
自分でも何を叫んでいるのか判らず、思わず市川は飛び出していた。かっ、と血液が逆流し、市川は自分の剣を抜き放っている。

ちゃりーん！

市川の剣と、女の剣が空中で火花を散らした。
ぎりぎりぎり……と、女は恐ろしい膂力で市川の剣を押さえ込む。
市川は近々と女の顔を覗きこんでいた。女の両目には、怒りと、激しい闘志が、めらめらと燃え盛っている。

「邪魔……するな！」
女は一言一言、息を詰めて、区切りながら話し掛ける。

「そうは、いかねえよっ！」

市川は「うむっ！」と全身に力を込めると、思い切り女の剣を撥ね上げた。ちらっと振り向くと、三村は呆気に取られた表情で、その場で立ち竦んでいる。

「三村……」と言いかけ、市川は言い直した。
「アラン王子殿下っ！　お逃げ下さいっ！」

呼び掛け

何事か、喚き声を上げ、あの騎馬隊長が駆け寄ると、三村の背後から抱きとめた。後ろに、ずるずると引っ張っていく。

恐ろしい迫力をもって、女は次々と三村に切りつけていた。市川はその前に立ち塞がり、手に持った剣で防いでいる。

女の動きは目にも止まらぬほど早く、市川は剣を打ち合わせるのがやっとである。が、互角に勝負しているのは、確かだ！

こんなに自分が剣の達人であるとは、全く知らなかった！　まるで時代劇のチャンバラそのものじゃないか？

きいーん、かきーんと型通り二人の剣が交錯し、剣が打ち合うたびに、鉄が焼ける。金臭い臭いが、市川の鼻腔を打つ。

「その女を捕えよっ！」

騎馬隊長がやっと自分の本分を思い出したのか、顔を真っ赤に染め、喚いていた。

騎馬隊長の命令に、その場に立ち尽くしていた全員が、目が覚めたように動き出す。

わっ、と女を目掛けて飛び掛る。

女は素早く周囲を見回すと、ぐっと身を沈め、思い切り飛び上がった。

市川は呆然と女を見上げていた。

女は、完全に、全員の頭の上を飛び越えていた。まるでアニメの活劇場面だ！　いや、今は自分はアニメの世界に入り込んでいるか

ら、これは当たり前の描写か？

空中でひらりと、女は蜻蛉返りを打つと、すたっ！　と音を立て、着地する。

女の目の前に、新庄が立っていた。

新庄は女の顔を見詰め、呟いた。

「君、絵里香だろ？　田中絵里香。違うかい？」

絵里香、と呼びかけられた女の動きが止まった。ぽかりと口を開け、まじまじと新庄の顔を見詰めている。

「あんた、平ちゃん？」

軽飛行機

二人の会話は、すぐ間近にいる市川以外は、聞かれていない。

女は背後から殺到する兵士に気付き、再び動き出した。目の前の新庄を、どん、と突き飛ばし、そのまま通路をまっしぐらに駈けて行く。

「捕えよーっ！　逃がすなーっ！」

騎馬隊長が両手を振り回し、叫んでいる。

市川は先頭を切って追いかけた。

女は通路を全速力で駆け抜け、船首部分へ急いでいた。横道へ飛び込んだ女を追い、市川も通路を辿る。

横道のどん詰まりには、飛行船に繋留されている軽飛行機に乗り組むタラップがある。

女は勝手知った動きでタラップを駆け下りると、軽飛行機の操縦席に飛び込んだ。

ちらりと、女は市川を振り向く。

気がつくと、市川の背後に新庄が立っていた。新庄は女に向け、叫んでいた。

「君もか？　君も、この世界へ呼び寄せられたのか？」

女は「訳が分からない」といった表情になった。が、すぐにきっと前に向き直ると、繋留レバーをぐいと引いた。

がちゃん、と軽い音を立て、軽飛行機が飛行船から離脱した。

ばすん、ぶるぶるぶる……というエンジンの音が聞こえ、軽飛行機はプロペラを回転させ、空中に飛び出していた。

「糞っ！　逃がしたかっ！　暗殺者が乗り組んでいたとは、不覚……」

騎馬隊長が、悔しさに奥歯をギリギリと噛みしめ、叫んでいた。

口調

「実に見事な剣さばきであった！　拙者、感服いたしたぞ！」

つやつやと頬に赤みを差し上らせ、あの騎馬隊長が満面の笑みを浮かべ、市川に対し、賛辞を送っている。なぜか騎馬隊長の口調は、時代劇そのものになっていた。

女が逃走し、悔しさに地団太を踏んでいた隊長は、それでも三村……アラン王子の無事に安堵し、こうして市川の働きを褒め称えているのである。

女は、エリカ・ターナと名乗っていた。本名かどうかは分からない。また、王子を襲った動機も、判然とはしていない。

田中絵里香……が、女の本名なら、安直な変名である。もちろん、市川は女と新庄との遣り取りなど、一言も洩らしていない。

新庄は重々しく口を開いた。

「アラン王子殿下にあらせましては、危うく一命を失う危急に遭遇し、お疲れと思われます。まず着陸する前に、お疲れをお取りになられ、暫時、空中にて休憩を賜るのが、宜しかろうと愚考いたしますが？」

おそろしく持って回った、慇懃な口調である。市川は新庄がこのような本格的な宮廷口調で喋るのが可笑しくてならない。

が、笑っては駄目だ！　隊長以下、その場に居合わせた兵士全員、新庄の言葉に深く頷いていた。

態度

「全く同感ですな！　王子殿下、まずは、お休みなされませ！　バートル国へは、旗流信号にて、到着の遅れを伝えますゆえ……」

三村は素直に頷いた。隊長は一歩ささっと前へ出ると、表情に誠意を溢れさせ、言葉を重ねる。

「殿下の身の安全のため、わが騎馬隊の精鋭を護衛に侍(はべ)らせたいと存じますが？」

三村はちら、と市川たちを見る。ゆっくりと騎馬隊長の目を見て、首を振った。

「いや……それには及ばぬ。わたしは、わたしの選んだ従者に守って貰うつもりだから……。悪く思わないでくれないか？」

騎馬隊長は「はっ！」と大きく返事をすると、全身をそっくり返らせるような直立不動の姿勢になった。大袈裟な男だ。

「それでは諸君、わたしは少し、休ませて貰おう……」

軽く頭を下げ、三村は堂々とした物腰のまま、退出する。市川たち四人も、その後を追った。全く、生まれながらの王族としか思えない、毅然とした態度である。

再び王族専用の客室に戻ると、洋子は両目に力を入れて、新庄を睨み据えた。

「何か、話しがあるはずよね。平ちゃん！」

「うむ……」と、新庄は洋子の眼差しを受け、口篭った。逡巡している。

「言いなさいよ！」

「わ、判った……！」

軽く両手を上げ、新庄は観念したように、ソファにどっかりと腰を降ろした。

「おれの話は、ちょっと長い。座ってくれ」

新庄に言われ、市川たちも新庄を囲むように椅子を引いて、座り込む。

「あの女の名前は、田中絵里香。ご推察の通り、おれは大学生時代、出会っている」

市川は口を挟みこんだ。

「例の、漫研でか？」

新庄は頷いて、話を続けた。

「おれは三年生のとき、絵里香は一年で入ってきた……」

その時、部屋全体がもやもやとした陽炎のように揺れて、市川は驚きの声を上げた。

「な、何だっ？」

市川の大声に、吃驚して新庄は口を噤む。同時に、陽炎のようなもやもやは消えた。

少し待って、再び新庄は口を開いた。

「ええと、どこまで話したかな？」

「平ちゃんが三年で、あの女が一年生で漫研に入ってきた、ってとこよ！」

洋子が口を添える。新庄は頷いた。

「うん。おれが三年生だった頃……」

再び、もやもやが始まった。市川の頭上に、電球が灯った！

「判った！　これは回想シーンに入るって合図だ！」

「木下恵介か……」

訳の判らない相槌を打って、新庄は話を続けた。

内容は、新庄と木戸監督が大学時代の話であった。もやもやが消え、オーバー・ラップで、市川の目の前に、若い二人の姿が映し出される。

誕生

ごたごたとした部室に、午後の日差しが差し込んでいる。机には、描きかけの漫画原稿が散乱し、壁際の本棚には、ぎっしりと漫画の単行本が背を並べていた。

ああ、実写だな……。と市川は思った。その場の光景は、アニメの表現ではなく、実写映像であった。これが新庄プロデューサーが、大学時代、所属していた漫画研究会の部室なのだろう。

木戸純一……髪の毛を肩まで伸ばし、ほっそりとした身体つきの若者だ……が、机に覆い被さるようにして、ペンを走らせていた。隣では、同じくまだ若く、髪の毛をリーゼントにした新庄平助が、刷り上った同人誌の束を整理していた。

部屋には、もう一人、市川の知らない男がいた。年恰好からすると、新庄、木戸と同じ三年生だ。

ただし、顔色は蒼白を通り越し、不健康な青黒さを帯びている。見知らぬ男は、両目を光らせ、大学ノートに一心不乱に鉛筆で、何かを書いている。どうも、ネーム……漫画の簡単な下書きである……を書いているらしい。

何を書いているのだろう、と市川が関心を寄せた途端、視界がぐーっとズーム・アップし、手元の紙面が拡大する。

タイトルが見えた。『蒸汽帝国』。

市川の胸に、驚きが弾ける。

では、これが木戸監督の『蒸汽帝国』誕生のエピソードなのだ！

モデル

原稿用紙から顔を上げ、木戸が大学ノートに向かい合っている男に話し掛ける。

「ネームはできたかい？　祐介」

「祐介」と呼びかけられた男は、木戸の声に顔を上げ、にやりと笑った。

驚くほど、げっそり痩せこけ、笑うと頬に縦皺ができる。こほこほと、男は軽く咳こんだ。

「ああ、完成だ！　世界設定、キャラクター、全部できているさ。ただ、ストーリーがな……。オープニングは何とかなったが、結末が思いつかない……」

そこまで喋ると、祐介と呼びかけられた男は「げほげほげほ！」と大きく身体を波打たせるように咳き込んだ。慌ててポケットから吸引器を取り出すと、口に咥える。

すーっ、はーっと何度か吸い込み、やっと咳が止まった。おそらく、祐介は喘息なのだろう。

かちゃり、と軽い音がして、部室のドアが開く。三人が顔をそちらに向けると、一人の少女が心配そうな表情で、咳き込む祐介を見やっていた。

ほっそりとした身体つきに、健康そうな浅黒い肌。印象的なくっきりとした顔立ちをした、意志の強そうな少女である。明らかに、木戸監督が描いた、モデルの女の子である。

とすれば、この少女は田中絵里香という名前だろう。

絵里香は小走りに、咳き込み続ける祐介に近寄ると、素早く額に手を伸ばした。手の平を額に押し当て、懸念の表情を浮かべる。

「ひどい熱！　こんな場所に来ちゃ、駄目よ。ねえ、祐介。帰って寝たら？　あたしが送っていってあげるから」

祐介は、煩そうに絵里香の手を払いのけた。

「今、大事なところなんだ。『蒸汽帝国』を出版社に持ち込む期限、ぎりぎりだからな。おれが原作を書かないと、純一は後を続けられない……」

咳

絵里香は、きりっとした目付きで、木戸と新庄を睨んだ。
「平ちゃん、それに、純一！　あんたら、平気なの？　祐介は無理している。あんたらに義理立てしてね！　帰って寝ろよ、と言うのが、本当の友達じゃないの？」

絵里香の言葉に、新庄と木戸はもじもじとバツの悪そうな顔を見合わせた。新庄は祐介に対し、おずおずと声を掛ける。

「なあ、絵里香の言葉も、もっともだ。帰って寝ろよ。後は、おれたち何とかするから」

祐介はうっすらと笑いを浮かべた。なぜかしら、透明な笑いであった。
「そんな強がり言ったって、おれにはちゃーんと判ってら！　純一は、おれがいねえと、コマ割り一つできねえ……。平ちゃんだって、漫研に所属はしてるが、へのへのもへじ一つ、満足に描けねえのは知ってるよ！　いや、駄目だ！　編集部に持ち込むまで、おれはここを離れねえぞ！」

その時、祐介は突き上げる咳の衝動に、身体を投げ出すように倒れこんだ。

げほげほ！　がほがほと恐ろしいほど、祐介は苦しそうな咳き込みを続けた。
祐介は震える手で、吸引器を取り上げ、口に持っていく。新庄は、慌てて、祐介の手を押さえた。

「おいっ！　祐介っ！　そいつは、一遍に何度も使っちゃ駄目だって、医者に言われているんじゃないのか？」
「いいんだ……」
意固地になった祐介は、吸引器を口に咥える。すーっ、はーっと何度も吸い込んだ。
ぜいぜい、ごろごろと祐介の喉が鳴る。
絵里香は眉間に皺を寄せ、沈痛な面持ちで祐介を見守っていた。
そんな絵里香を、木戸は熱い眼差しで見詰めていた。

似顔

場面は変わって、葬式の映像が現れた。単調な読経の声が響き、あちこちで啜り泣きが聞こえている。

遺影が正面にあって、それは祐介の顔だった。そこに新庄のナレーションが被った。

「最終学年、卒業間際に、祐介は死んだ。新入生歓迎のコンパで、一気飲みの、急性アルコール中毒だった……」

「ちょっと待って！」

洋子が金きり声を上げ、市川は再び客室に座っている自分を取り戻す。洋子は呆れたように眉を上げ、新庄を睨んでいる。

「胸の病気で死んだんじゃないの？　今までの話の筋なら、どう考えても……」

新庄は素っとぼけた表情で、肩を竦める。

「祐介は虚弱体質だったが、喘息だ。胸の病気とは違うよ」

洋子は、がっかりしたように「はーっ」と溜息を吐いた。新庄は「続けようか？」と誰ともなしに呟く。

一同はもちろん、大いに頷く。先が知りたいからだ！

「葬式の際……」

新庄が話を再開し、再び回想に戻る。

神妙な表情で、木戸と新庄が正座をしている。少し離れた場所に、絵里香の姿もあった。

木戸は、ちらちらと絵里香の横画を盗み見、手元のメモに、何か描いていた。メモがアップになると、それは絵里香の似顔だった。

隣に座る新庄が、木戸の手元を覗き込んで呆れ顔になる。

新庄は木戸を肘でつつき、囁く。

「おい、葬式の最中だぞ！　場所をわきまえろ！」

新庄に注意されて、木戸は顔を赤らめた。が、絵里香を見つめる視線は、じりじりと焦げるほど、熱っぽい。

新連載

やがて葬式は終わり、一同は外に出る。

並んで歩き出した新庄と木戸に、絵里香が駆け寄った。表情には怒りがはっきりと見てとれ、眼差しは険しかった。

しかし、怒りに燃えていながら、絵里香には曰く言いがたい美しさがあった。怒りは、絵里香の美しさを微塵も損なわず、むしろ別の美しさを付け加えているようであった。

「ちょっと待ちなさいよ！」

二人は、ぎくりと歩を止めた。木戸は絵里香の凝視に、顔を背ける。絵里香の怒りの視線は、木戸一人に向けられていた。

絵里香は手に、一冊の漫画週刊誌を持っている。絵里香はその雑誌を、木戸に向け、突きつけた。開いたページは『蒸汽帝国』連載のものだった。

「これは、何？　昨日発売の雑誌よ。あんたの新連載とやらが載っていたわ！　どうして祐介の名前がないの？　この漫画は、祐介の原作でしょ？」

絵里香の突きつけた誌面を見て、新庄は驚きの表情になった。さっと木戸を見て、新庄も詰問の口調になった。

「おれも知らなかった！　てっきり原作者の名前に、祐介の名前が入るものだと……」

顔を背けたまま、木戸はもごもごと口の中で呟くように答えた。

「祐介が言ったんだ。自分の名前は出さなくていいって……。おれの……木戸純一名義で描いてくれと……。だから……」

絵里香は怒りから、呆れ顔になった。
「そんなヨタ話、信じろと言うの？」
が、新庄は考え込む表情になる。
「いや……祐介なら、ありえる」

「えっ？」

新庄の言葉が、絵里香には意外だったらしく、目を丸くしたままでいる。木戸も、新庄を見詰めた。

「祐介だったら、言うかもしれないな。名前を出さなくてもいい、と。どうだい、絵里香。祐介の性格、君ならよく知っているんじゃないのか？」

新庄は最後のセンテンスに意味を込めるように強調し、ちらりと木戸を見た。

木戸は新庄の言葉に、顔を真っ赤に染めている。顔を背けたまま横目で絵里香を盗み見しているが、視線には嫉妬がめらめらと燃え盛っていた。

ふっと絵里香の勢いが萎む。

「そうね……。祐介だったら、言いそうな台詞ね。あの人、原作者の名前云々なんか、全く気にしない人だったから……」

顔を挙げ、もう一度きつい眼差しになると、木戸に対し、言葉を浴びせかける。

「いいわ、もうゴチャゴチャ言うのは、やめるわ！　だけど、約束なさい！」

木戸は怯えた視線を、絵里香に向けた。

「や、約束？」

「そうよ！　祐介の『蒸汽帝国』を、絶対に完結させるって約束す

るのよ！　あれは未完の大作なんだから……。途中で放り出すなんて、あたし、許さないっ！」

暫し、三人の間を重苦しい静寂が支配した。

新庄が木戸の脇腹をつついた。
「おい！」
木戸は弾かれたように、頷く。
「わ、判った……。きっと、完結させる。約束だ！」
木戸は大きく息を吸い込むと、一歩、絵里香に近づいた。
指――小指を近づける。
「指きり、しよう……。約束の……」
絵里香は不審そうな表情になるが、やがて晴れやかに頷いた。
「ええ！　指きり！　約束よ！」

木戸と絵里香の指が絡み合う。指きりの動作が終わっても、木戸は絵里香の指から自分の指を離そうとはしなかった。

「ちょ、ちょっと！」

絵里香が再び怒りの表情になり、木戸は慌てて指を離した。じっとりと、粘っこい視線で絵里香を見つめる。
ぞくっと絵里香の顔は蒼白になった。くるりと背を向けると、言葉もなく走り去る。木戸は絵里香の後ろ姿を、じっと見送っていた。

新庄は不安そうに、そんな木戸を見守っていた。

覗き穴

場面は夜中の住宅街になった。街灯の明かりの下を、絵里香が肩を怒らせ、大股に歩いている。目には怒りが燃え、口許はきゅっと引き絞られていた。

新庄のナレーションが被った。

「絵里香は在学中に、雑誌の編集部にアルバイトとして入り込んだ。『蒸汽帝国』を掲載している漫画雑誌の編集部で、木戸の知り合いという関係で、原稿の回収の役目を絵里香は任された」

絵里香は三階建ての、外階段のついた集合住宅玄関に立つ。目を上げ、窓に明かりが灯っているのを確認すると、勢いよく階段を駆け登っていった。

ドアの前に立ち、インタホンを押す。

室内でチャイムが鳴っているが、返事はなかった。絵里香はドアの覗き穴を睨んだ。

ふっと覗き穴が暗くなる。

絵里香は叫んだ。

「純一っ！　そこに隠れていないで、開けなさいよっ！　いるんでしょっ？」

さっと覗き穴が明るくなった。
穴に目を押し当てていた木戸が、慌てて身を引いたのだ。

絵里香は思い切り、ドアを蹴飛ばした。
がん！　もう一度。ぐわん！　と、大袈裟な音が深夜の住宅街に響く。

「開けないと、朝まで続けるからね！」
「わ、判った……」

蚊の鳴くような心細い声が聞こえ、開錠音がして、僅かにドアが開く。
絵里香はドアノブを両手で握りしめ、閉じられないよう、力任せに開く。
わわっ、と木戸が外へ飛び出してきた。どてん、と見っともなく転ぶと、青ざめた顔を絵里香に向ける。

「え、絵里香……」
「入るわよっ！」

返事も待たず、絵里香は土足のまま、ずかずかと木戸の仕事部屋へと踏み込んでいく。

手遅れ

木戸の部屋は、乱雑で、足の踏み場もない。仕事部屋は、アシスタントのために、何組もの机と椅子が置いてあったが、今は木戸一人だけだ。

窓際にある木戸の机に駆け寄ると、描きかけの原稿用紙を取り上げた。ペンも入っておらず、下書きのままである。

「どういう訳？　今夜中に原稿を完成させる約束よね？　あたし、編集長に直に命令されているのよ。何が何でも、あんたのところから、原稿を持ってこいって！　一枚も完成していないじゃないの！」

絵里香の詰問に、木戸はぺたりと座り込み、小さく身を縮こまらせているだけだった。ゆっくりと何度も首を振った。

「お……おれ、描けねえ……。先を続けられないんだ。話が思い浮かばねえっ！」

絵里香の頭に、音を立てて血が逆流した。

「何、子供のような言い訳、しているのっ？　祐介の原作があるでしょうっ！」

木戸の顔がくしゃくしゃと歪んだ。

「もう、ねえよ……祐介の原作は、終わってるんだ……。後を続けようと、精一杯、必死に考えた。でも、どうやっても、おれには話を作るって才能がないんだ……」

だんっ！　と絵里香は足踏みした。
「それじゃ、原作を、他の人に任せるって、手があったじゃないの？　何で、それを言い出さないの？　もう、完全に手遅れよ！」

うわあああ……と、木戸は手放しで泣き喚いた。絵里香は呆然となって、木戸の机を引っ掻き回した。一枚でも、完成原稿が隠れてないかと思ったのだ。

原画

抽斗を開けた絵里香は、身を強張らせた。全身が嫌悪感に震える。
「これ、何？」
引き出しには、一杯に絵里香の似顔らしき原画が詰め込まれている。
絵里香の横顔、正面顔、笑顔、憂い顔。
挙げ句……。

絵里香は一枚の原画を手にした。
ヌードであった。絵里香の顔をした、女性のヌード画が描かれている。

「あんた、仕事をそっちのけで、こんな馬鹿な真似をしていたのっ？」
項垂れた木戸は返事もしない。
と、木戸の顔がゆっくりと持ち上がる。両目には、奇妙な熱情が浮かんでいた。

「絵里香……」

膝まづいた姿勢のまま、ずりずりと絵里香に近寄っていく。絵里香は総毛立った。

「近寄らないでっ！」
木戸は両手を差し伸べ、必死の勢いで絵里香に掻き口説く。
「絵里香、おれは、君が好きだ！　そりゃ、君が祐介を好きだったのは知っている。でも、もう、祐介はこの世にいない。なあ、絵里

香、おれと……」
「それ以上、言わないでっ！　聞きたくないっ！」
絵里香は両耳をきつく両手で押さえると、目を閉じて叫んでいた。
木戸は構わず続ける。
「なあ、おれ、君がいれば、漫画も描けるんじゃないかと思うんだ。おれ、一人ぼっちなんだ……。なあ、頼む……おれと……、おれと一緒になって……」
絵里香はぐわっ、と足先を蹴り上げた。爪先が、まともに木戸の顎に命中する。木戸は「わあ！」と悲鳴を上げ、引っくり返った。
床に仰向けになった木戸に、絵里香はきっと指先を突きつけた。
「もう、あんたなんか、顔も見たくないっ！　あんたは、祐介の原作を汚したのよ！　絶対、許さないからねっ！」
一息に捲し立てると、絵里香は大股に木戸の側を通り抜け、出口に向かう。
「絵里香……待ってくれ……！」
背中に、木戸の泣き声のような叫びが追い縋る。だが、絵里香は一瞥もせず、駆け出していた。

年齢

回想が終わり、市川は再び飛行船の、王族専用客室に立ち戻っていた。飛行船は空中に静止して、窓の外の景色はぴくりとも動かない。

新庄は、淡々と後を続けた。

「卒業後、おれはアニメ制作会社に潜り込んだ。おれは知っての通り、絵も描けないし、物語も作れない。しかし、雑用をこなすのは、苦にならないから、ぴったりの職場だった。木戸は『蒸汽帝国』で漫画家としてやっていけなくなって、おれがアニメ業界に引っ張り込んだ。後は、皆が知るとおりだ」

市川は背筋を伸ばし、新庄に向かって尋ねかけた。

「それで、田中絵里香はどうなった?」

新庄は肩を竦めた。

「結婚したよ。子供もできて、木戸とは二度と顔を合わせなかった」

市川は首を捻った。

「それにしちゃ、妙だな」

新庄は目を見開いた。

「何が、妙だと言うんだ?」

市川は新庄をじっと見詰めた。

「あんたの話じゃ、絵里香は二才しか、歳が違わないんだろう?この世界で出会ったあの娘は、どう見ても二十歳前後にしか、見えない。順当なら、新庄さんか、木戸さんと、そう年齢は違わないは

ずだ。若すぎら！」

新庄は「うむ」と頷く。

「それについては、おれも不思議だと思っていたんだ。おれは現実の絵里香を知っているが、この世界で出会った絵里香とは、別人だ。あれは、本物の絵里香だろうか？」

展開

すると、それまで黙りこくって、新庄の独演を聞いていた山田が口を開いた。

「おそらく、木戸さんの記憶の中だけの、絵里香なんだろうな。市川君に発注したキャラ表は、木戸さんの思い出に生きている田中絵里香なんだ。だから、新庄さんの顔を見分けられた。もし、純然たるこの世界のキャラクターなら、新庄さんが声を掛けても、何の反応もしなかったはずだ」

洋子は眉を顰めた。

「それじゃ、あたしたちが今いる世界は、木戸さんの空想の中ってわけ？　いやだ！　何だか、気持ち悪い……！」

いかにも寒気がしたというように、洋子は腕でむっちりとした胸を抱えた。腕でぎゅっと抱きしめたので、谷間がくっきりと浮き上がった。市川は思わず、洋子の胸元に行きかけた自分の視線を、無理矢理どうにか引き剥がす。

その時、三村が言い難そうに、口を開いた。

「あの……その田中絵里香さんが、これから行く隣国のお姫様と同じキャラクターなんですよね？　絵里香さんは、なぜか僕を殺そうとしました。大丈夫でしょうか？」

三村は、市川たちと一緒の時は、以前どおりのオドオドした、気弱な面を見せる。今も、口にするのさえやっと、と見えた。全員の凝視を受け、慌てて顔を伏せる。

市川は大声を上げた。

「そうだよ！　あの女、三村を――つまりアラン王子――を殺そうとしやがった！　どうなってんだ？　ストーリーはこの先、どうなる？」

新庄は首を捻り、腕組みをする。

「どうなるのかな？　原作にはないエピソードや、キャラクターがポンポン出てきて、さっぱり予想がつかねえ……」

市川は、最初から気になっていた絵コンテの内容を思い出した。

「ところで、木戸さんはなぜ、絵コンテを原作と違って描こうとしたんだろうな？」

新庄は頷いた。

「多分、今度こそ、本当に、自分がストーリーを組み立てる能力があると、証明したかったんじゃないかな？　結局、失敗したが……。しかし今のストーリーも原作にない。とてもじゃないが、木戸さんが一人で考え付くとは思えないが……？」

山田が不吉な予言をするように、目を据えてボソリと呟いた。

「登場人物の誰かが、死に直面するような展開があるかも、という予想は当たったな」

三村は蒼白になって、悲鳴を上げた。

「や、やめて下さいっ！　命を狙われているのは、僕なんですよっ！」

市川は胸に浮かんだ疑問を、口に出しかけた。が、慌てて寸前で呑み込んだ。

本当に、『蒸汽帝国』のストーリーを進めているのは、木戸監督なのだろうか？

猫撫で声

信じられない思いに、木戸純一は絵コンテ用紙から顔を挙げ、たった今、自分が書き上げた絵コンテを、まじまじと眺めた。

ストーリーは中盤に差し掛かり、主要キャラクターのアラン王子が飛行船の謁見室において、エリカ・タナーと名乗る女兵士にあわや、命を狙われるという展開に至っていた。

こんなシークエンス、原作にはない！

最初は原作通りの展開であったが、いつの間にか、木戸の予想もしなかったストーリーに変更していた。

まるで自動書記のごとく、あるいは走らせている鉛筆が勝手に動いて、自分の知らない『蒸汽帝国』のストーリーを物語っているかのようだった。まるで自分は、誰か知らない相手の、筆先として存在しているのではないか、という疑念が常に湧き上がっている。

木戸は演出部屋を狂おしく見渡した。自分以外、誰もいないはずの空間に向け、「おい！」と怒鳴り声を上げる。

「聞いているんだろう？　返事をしろ！」

啜り泣き

返事はない。部屋は、がらんとした静寂が支配している。
木戸は机から離れると、いきなり床に大の字に寝そべり、ジタバタと手足を駄々っ子のようにして暴れる。

「もう、やめだ！　やめ！　絵コンテなんか、知るものか！」

――なんや……。また拗ねてるんかいな……。厄介なお人やな……。

うんざりしたような？声？が部屋に響き渡った。寝そべった木戸は、上半身をむくりと起こし、鋭く視線を辺りに配る。
「おれは本当に、自分で絵コンテを描いているのか？　お前が、おれを操って、絵コンテを描かせているんじゃないのか？」
空中に苛立ったような「チョッチョッ！」という舌打ちが響く。

――なんで、そないな面倒臭い手間ぁ掛けますんや。わいが自分で絵コンテ描ければ、こんな苦労はせんでええやないか！

木戸は怒号した。

「おれには、物語を作る才能はない！　口惜しいが、事実だ！　だけど、これを描いているおれは、次から次に場面が頭に浮かんで、勝手に鉛筆が動いて、絵コンテを完成させちまう……。おれには金輪際できねえ……！　他の誰かが、おれを使って描いているんじゃないのか？　違うのか……？」

最後は、啜り泣きに近かった。

――まあまあ……。そう自棄にならんでよろし。あんたらの『蒸汽帝国』の世界は、すでに一人立ちしておますのや。一つの、完全な世界になろうとしてる、真っ最中や！　それもこれも、あんたというお人がいての奇跡と言ってよろしいな。

？声？は、猫撫で声になった。木戸の惑乱に、慌てて宥めようとしているらしい。

木戸は驚きに、目を見開いた。

「アニメの世界が、本物の世界になろうとしているって？　どういう意味だ？」

――つまりやなあ……。どう言うてええか判らんが、大勢の人が一つの物語を共有するとしますわな？　あんたの『蒸汽帝国』も、沢山のファンがついて、同じ夢を共有しております。それで、世界が誕生しましたんや！

「それじゃ、人間が色んな空想をすると、その空想が別の次元で実体化するのか？」

――全部、とはいきまへん。たった一人で、妄想しても、それは泡のごとく消えてしまいます。しかし、同じ空想を、沢山のお人が共有すると、その世界は実際に存在するようになるんでおます。ただし、その世界へ現実世界の人間が入り込む、ちゅうのは、でけまへんがな……。例外を除いて……。

「例外？」

木戸は呟くと、立ち上がり、演出机に貼られているキャラクター表を見詰めた。

キャラクター表を指差し、叫んだ。

「このキャラ表にあるのは、市川、洋子、三村、山田たちだ！　あいつら『蒸汽帝国』の世界に入っているのか？　冒険をしているのは、あいつらか？」

キャラ表の主要人物は、市川、洋子、三村、山田の似顔になっている。さらにサブ・キャラとして新庄、絵里香の似顔もあった。

――言えまへん……。とにかく、あんたは、真面目に絵コンテを完成させなはれ。それが、一番大事や……。

？声？は遠ざかる。木戸は一歩、踏み込むと、両手を掲げ、泣くように喚いた。

「おれも連れて行ってくれ！　絵里香のいる世界へ、おれも行きたい！」

しかし応えはなかった。？声？の気配は、ふっつりと跡絶えている。

ばたり、と木戸は机に突っ伏し、啜り泣いた。

「絵里香……、お前に会いたい！」

色彩

飛行船が着陸したのは、バートル国の首都から少し離れた草原だった。城や、城下町には、飛行船を着陸させられる空き地が存在しない。

飛行船が着地すると、すぐにバートル国の迎えの馬車が近づいてくる。ここではドーデン帝国のような、蒸気機関は使用されていないらしい。

馬車は六頭立てで、屋根つきの箱型タイプだ。大きさは、マイクロ・バスほどはあった。馬車は一台だけではなく、数台が連なって近づいてくる。当然、ドーデン側の、王子の随員、護衛の兵士のためである。

飛行船が着地した空き地には、すでに軍楽隊が勢ぞろいし、バートル国とドーデン帝国の国歌を、交互に演奏していた。日差しに、軍楽隊の金管楽器がきらっ、きらっと、眩しく反射している。

馬車が停止すると、煌(きら)びやかな衣装を身に纏(まと)った、迎えの人間が出てくる。

市川は飛行船の窓から眺めて、まるで人間信号機だと思った。何しろ、真っ赤な上着に、緑色のスカーフ、真っ青な腹帯(サッシュ)、黄色のズボンという出で立ちである。

「すげえ色の取り合わせだなあ」

感想を述べると、洋子が噛み付いた。

「何よ！　あたしのセンスが悪いって言いたいの？」

目の前の人物を色彩設計をしたのは、洋子だった。市川は思わず、洋子に見えないように舌を突き出した。

市川の知る限り、アニメでは色彩設計の仕事は、ほぼ女性が独占している。ついでに言うと、なぜか色彩設計をしている女性の普段の服装は、吃驚するほど趣味が悪い。市川がこれまで見知った色彩設計の女性の服の色のセンスは、信じられない取り合わせの例が多かったのは事実だ！

今まで目撃した中で、もっとも酷かったのは、紫色のカーディガンに、真っ赤なスエット、緑と黄色のチェックのスカートという取り合わせで、目にした瞬間、色彩の爆発といった感じだった。しかも恐ろしく肥満しているのに関わらず、好んで膨張色である赤を多用していた。しかし、実際の色彩設計はちゃんとこなしていたから不思議である。

迎えの人物は、マッチ棒のように痩せこけた男で、手にはごてごてと飾りがつけられた杖を持っていた。その杖を掲げ、気取った仕草でお辞儀をする。

顔を挙げると、脳天に突き刺さるような甲高い声で、高々と歓迎の辞を述べた。

「ドーデン帝国第五王子アラン殿下御一行様、ようこそいらっしゃいました！　わがバートル国摂政、ターラン閣下と姫君は、アラン王子殿下をお待ちになられておられます！」

飛行船のドアが開き、タラップが地面に伸ばされ、アラン王子――三村健介が、堂々とした物腰で姿を表す。出迎えの男は、全身に電流が流れたように緊張の色を見せた。

市川たちは三村の後に続き、飛行船からタラップで地面に降りる。

出迎えの役人は、飛び跳ねるような動きで、三村を馬車へと案内した。顔には溢れるような好意が表れ、満面の笑みを浮かべていた。

「ささ！　こちらで御座います。お付きの方々も、ご一緒に……」

「お付きの方」と言われ、市川は心中臍をひん曲げたが、顔には出さぬよう用心した。

三村を先頭に馬車に乗り込むと、役人は馬丁に合図した。馬丁は頷くと、手にした鞭を空中でぴしりと鳴らし、馬を進める。

ごとごとと車輪を鳴らし、馬車は進む。馬車が動き出すと、軍楽隊が騒々しい音楽を奏でながら、行進を始めた。

と、市川は場所の窓から、飛行船に目を向けた。一人のドーデン側の若い兵士が、飛行船から外に出てくると、足早に立ち去っていく。

それを見送っていると、山田が進行方向を見詰め、歓声を上げていた。山田の視線の先には、城と、その周りに立ち並ぶ民家が全容を現してくる。

城下町が近づいてきた！

事情

迎えの役人はドットと名乗って、話し好きらしかった。

城下町を馬車が通り過ぎると、沿道には町の人間が勢ぞろいして、物見高い視線をこちらへ向けている。ドットは三村に向き直り「お手を振って下され！　未来の国王陛下に対し、町民どもは歓迎しておりますので」と勧める。

言われて三村が馬車の窓から手を振ると、町民たちは熱烈な歓迎を表す。わあっ……と歓声が上がり

「ばんざーい！　ばんざーい！」と声を上げ、手を盛んに振り返した。

市川はドットの言葉を聞き咎めた。

「未来の国王？」

ドットは、当然とばかりに頷く。

「わがバートル国においては、国王の血筋が絶え、摂政閣下が政治を司っておられますので。しかし、国王がいらせられない状況は、どうにも具合が悪く、それでドーデン帝国との友誼（ゆうぎ）で、アラン王子殿下に白羽の矢が立ったので御座います」

「それじゃお姫様というのは？　御姫様が王位を継いで、女王様になればいいのに」

洋子がドットに尋ねる。表情には、好奇心が剥き出しになっていた。洋子の、ゴシップ好きの感情が刺激されたのだろう。

ドットは丁寧に答えた。

「摂政閣下のご息女で御座います。わが国では、女子は王位を継げ

ませぬ。あくまでも、男子のみが、正式な後継者となります。前王は、ドーデン帝国の血筋のお方であらせられましたが、ご不幸にも、ご結婚前に薨去なされました。それで、ドーデン帝国より、アラン王子殿下をお迎えする仕儀となります」

初耳だった。市川の隣で、食い入るように城下町の家々を眺めていた山田は頷き、小声で市川に説明した。

「十九世紀末の、大英帝国と似た事情があるのさ！　当時、英国はビクトリア女王の治世にあったが、デンマーク、プロイセン、スエーデンなどの王国には、ビクトリア女王の子供が多く婿入り、嫁入りしていた。それで大英帝国は、欧州において、確乎とした地位を保っていた。日本の戦国時代も同じだ。つまり、閨閥というやつだな」

空腹

「ふうん」と市川は納得して、町民に手を振っている三村を見詰めた。

今の三村は、完全に王者としての威厳を漂わせている。アニメの制作進行をしていた三村の面影は、欠片も見当たらなかった。

城下町を通り過ぎると、ぷん、と市川の鼻に香辛料の香りが漂ってくる。

沿道に目をやると、簡単な天幕を張った露天の屋台が立ち並んで、様々な料理を客に出しているのが見える。肉、揚げ物、スープなどが供され、白い湯気があたりに満ちていた。

くんくんと鼻を鳴らし、市川はごくりと唾を飲み込む。

「カレーの匂いだ！　たまんねえ！」

「そう言えば、腹が減ったな」

市川の呟きに、山田が深く頷き、同意した。洋子もまた唾を飲み込んでいる。

「もう……思い出させないでよ。あたし、カレーは大好物なんだから。ああ……、元に戻ったら、一目散に食べに行きたい！」

ドットは、にこにこと人の良い笑みを浮かべている。

「皆さん、ご空腹のようですな！　ご安心めされよ！　城に着けば、皆さん方の昼食を用意しておりますゆえ……」

「本当かい？」

市川は身を乗り出した。馬車の窓から首を突き出し、近づく城門を見上げる。

高い胸壁に、天を指す尖塔。どっしりとした巨大な石組みによって、城は建てられている。

城の中央には巨大なドームが被さり、外壁には色タイルによって、精緻な幾何学模様が描かれている。実に古風な、王宮らしい建物である。

市川は一刻も城に入りたいと、熱望していた。

本当の話

どでん！　と目の前に置かれた料理の鉢を見詰め、市川たちは顔を見合わせた。

城の広間らしき場所に案内され、一同は床に延べられた絨毯に車座になって座る。随員や護衛の兵も同席できるような、縦横十メートル以上もある、巨大な絨毯だ。床に、直に座るのは、中近東風である。

絨毯の真ん中に、数人の人間によって運ばれたのは、巨大な鉢であった。

中を覗き込むと、何やら得体の知れない煮込み料理が、ぐらぐらと地獄の釜のごとく煮え立っている。

つん、とドぎつい香辛料の匂いが漂っている。

ドットは陽気に叫んでいた。

「さあさあ！　どうぞ、お召し上がりになって頂きたい！　ほどなく、摂政閣下と、姫君が渡らせられますので……！　その間、腹塞ぎの食事でも……」

料理は、各自が渡された碗に勝手によそって食べる形式らしい。鉢の中に煮え立っているスープらしきものと、後は炒めた米、火を通した根菜、付け合せの野菜などである。

どれも香辛料がたっぷり使われている。相当に辛そうだ！

市川は原画マンになってすぐ、韓国に出張した経験がある。日本のアニメの、それもテレビ・アニメは、ほとんど韓国、中国、東南アジアなどに発注している。

理由は、毎週五十本以上も放映されるアニメを、国内のアニメー

ターだけでは捌ききれないからだ。国内のアニメ関係者の人数は、約三千人で、この数字はこの四十年、ほぼ変わらない。

なぜか。それは、アニメの制作予算が低く押さえられているからである。そのため、新人アニメーターは安い給料で働かざるを得ない。

市川の聞いた話だが、ある古参アニメーターが、市役所に税金の申告に立ち寄ったおり、役人が「この収入で暮らして行けますか？生活保護を申請なさったらどうです？」と真剣に提案されたそうだ。嘘のような、本当の話である。

思い出

動画一枚が、百円ほどで、どんなに手が速いアニメーターでも、一ヶ月に二千枚を越えるのは稀だ。ましてや新人のうちは、千枚に達するのも、難しい。従って、入ってきてもすぐに辞める人間が多いため、国内のアニメ関係者の人数は横這い状態を続けている。

この人数で、毎週の放映を切り抜けるなど、無理な話だ！　従って、国外発注である。

しかし、肝心な絵のニュアンス、演出の細かい部分は、単に絵コンテや、原画を送っただけでは、どうしても齟齬が生じる。そこで、やはり市川のような国内のメイン・スタッフが常駐して、現場のスタッフを監督する必要があるのだ。

市川は数回、韓国に出張した。その際、現地の激辛料理をたっぷり腹に詰め込んだものだった。

最初はまるで慣れなかったが、そのうち舌が辛さに耐性ができると、逆に日本食は物足りなくなってくる。

目の前の料理から発散してくる、強烈な香辛料の香りは、韓国出張を思い出させた。

恐る恐る、市川は碗の中に、鉢のスープをよそった。スープはどろりとして、真っ黒な色をしている。細かな肉の細片が浮かび、あとは豆などが煮込まれていた。

スプーンを使って、口に運ぶ。

市川を、他の全員が「結果や如何に?」と興味津々に見守ってい

た。

「うん！」と市川は頷く。

もぐもぐと口の中で噛みこみ、飲み込んだ。

「旨い！　辛さは、普通だな……」

ほっと安堵の空気が流れ、一同は我先に料理をよそい、口にする。

一気に、広間は和やかな雰囲気になった。

鋼鉄の舌

もう一杯、お替りしようとした刹那、市川の脳天から延髄に掛け、恐ろしいばかりの衝撃が駆け抜けた！

「くわあああああっ！」

市川は、ぴょん、とその場で胡坐（あぐら）の姿勢のまま飛び上がった。ぼおおおっ！　と、市川の口から火炎放射器のように、炎が飛び出す。辛いものを口に含んだときの、アニメの定番表現だ。

辛い！　なんてものではない！

何かのエッセイで「辛さに肛門が開く」という表現を目にした記憶があるが、まさに今の衝撃を言い表している。

「かあああああっ！」「きいいいいっ！」「けえええええっ！」と、全員がカ行の叫び声を上げ、七転八倒していた。

どっと市川の全身に、熱い汗が音を立てて噴き出してくる。額から、顎から、首筋から、滝のように汗を流し、市川は悶えつつ、踊りを踊るように手足をじたばたさせていた。

ちら、と市川は視界の隅で三村を見る。

何と、三村は皆の騒ぎをよそに、悠然と料理を平らげている。ほんの少し、顔色が赤みを帯びているが、まるで平気だ！

あいつの舌は、鋼鉄製か？

市川は必死になって、付け合せの生野菜を口いっぱいに頬張った。
それで、少しは口の中の炎を消し止める。
じゅう――っ！　と、市川の口から、白い煙が大袈裟に噴出する。
他の全員も、同じように蒸汽を大量に噴き上げていた。

ふうっ、と大きく息を吐き出し、市川は顔を上げた。
その時、広間の奥から、煌（きら）びやかな色彩の一団が入室してきた。

姫

ドットが大声を上げた。
「バートル国摂政、ターラン大公閣下と、エリカ姫のお出まし――！」

エリカ姫？

市川、新庄、洋子、三村、山田の五人は、ぎょっとなって、そちらに注目した。
緋色に金色の刺繍を施した派手派手しい衣装を纏った、ターラン大公らしき老人と、その手を引いている水色のドレスを身に着けた少女が静々と近づいてくる。二人の背後からは、護衛の兵士がずらりと従っていた。

少女の顔を見て、市川は密かに頷く。
やはり、エリカ……あの、エリカ・ターナと名乗った、田中絵里香をモデルにしたキャラクターである。

「あれは……王子殿下を狙った、女暗殺者ではないですか？」
三村の側に近侍していた騎馬隊長が、呆気に取られた表情を浮かべていた。

「ようこそ、いらっしゃった！　わがバートル国は、皆様を歓迎いたしますぞ！」
朗らかな声を上げ、ターラン大公と紹介された太った老人が着座した。その右横に、問題のエリカ姫がしとやかに腰を降ろす。

新庄は、あんぐりと口を開け、エリカ姫をじろじろと無遠慮に眺めていた。

ちら、とエリカ姫の視線が新庄の顔に当てられたが、すぐ逸れる。エリカ姫の視線は、三村に向けられていた。

三村の視線と、エリカ姫の視線が絡み合う。

市川は、息を飲み込んだ。

ターラン大公は、もじもじと居心地悪そうに身動きし、眉を顰めた。

ぴーんと張り詰めた緊張が、その場を支配している。誰も、言葉もなく、三村を――アラン王子――と、エリカ姫を見詰めていた。

「どうか、なさいましたかな？　わが国の出迎えに、何か、手違いでも？」

「いや」と、三村が王子らしく、悠揚迫らぬ態度を保ったまま、軽く会釈をする。

唇の端に軽く笑みを浮かべながら、大公を見詰め「お国の歓迎には、深く感謝いたしております。両国の友誼は、ますます深まるでしょう」と、すらすらと答えた。

しかし、三村の横に、べったりと貼り付くように控えていた騎馬隊長は、そうではなかった。

表情に、ありありと不審の念を浮かべ、澄ました顔で端座しているエリカ姫を睨んだ。

「そちらの……エリカ姫と仰いましたな……。我ら、全く同じ顔をした曲者に出会っておるので御座る！」

「曲者ですと？」

大公は、思い切り渋面になった。

穏やかな温顔をした、品の良い物腰をした老人が、困惑の表情を浮かべている。

騎馬隊長は、さらに厳しい顔付きになった。

「さよう……アラン王子殿下は、あろうまいか、貴国に向かう旅の途中、兵士と偽った女暗殺者の襲撃を受けたので御座る！　その暗殺者こそ、そこにおわす、エリカ姫！」

いきり立ち、隊長はさっと立ち上がった。指を姫に突きつけ、怒号する。

「咄（とっ）！　貴様の正体は何だ！　きりきりと白状いたせ！　王子殿下を狙った訳は？　背後に糸を引くのは、大公殿か？」

あーあ、本気で時代劇やってらあ、と市川はシラけていた。本人は大真面目なのだろうが、傍から見ると、馬鹿みたいである。

報告

しかし、大公は騎馬隊長の台詞に、まともに反応した。

「余に疑いを掛けるだと？　お主こそ、正気であろうな？　いいや、正気であるはずがない！　正気であれば、そのような世迷言、口にできぬわ！　証拠があるのか？」

ざざっ、と音を立て、ドーデンとバートル両国の兵士が身構えた。皆、剣の柄に手をやり、今にも抜き放とうという勢いだ。

その時、広間の入口から、ドーデン帝国の軍服を着た、一人の若い男が現れ、素早い動きで騎馬隊長に近づき、膝まづくと何事か口早に囁いた。

騎馬隊長は、兵士の言葉に大いに頷く。

「わしは、王宮に招かれる直前、この兵士を斥候として辺りを探らせておりました！　何と、この者の調査によると、バートル国王宮近くに、乗り捨てられた我がほうの軽飛行機を発見した、との報告で御座る！　しかも、飛行機からは、王宮に向かって、足跡が一筋、残されておった！　暗殺者は襲撃に失敗し、飛行船の軽飛行機に乗って逃走しております。これこそ、動かぬ証拠！」

大公の唇は、怒りのためか、細かく震えていた。顔色は真っ青である。

が、隣に座っていたエリカ姫は、全然、欠片ほども動じなかった。ゆっくりと顔を挙げ、真っ直ぐに三村を見詰める。

ふっと、姫の口端に笑いが零れた。すっと一挙動で立ち上がると、無言で右腕を背後に回す。

微かに刃の滑る音がして、まるで魔法のように、姫の右手には剣が握られていた。

呆気に取られている全員の目の前で、姫は、たんっ！　と床を軽く踏みしめ、跳躍する。

姫の視線は、三村に向けられている。

「アラン王子っ！　覚悟っ！」

姫の叫び声は、広間に凛と響いていた。空中で拝み斬りのように振りかぶる。

焦り

市川は無我夢中で飛び出していた。
ちらりと視界の隅に、洋子も同じように飛び出すのを認めていた。
がきーんっ！　と三人の剣が交錯し、危うく市川は、三村の脳天に殺到した姫の剣を受け止めていた。

姫は背後の護衛兵たちに叫んでいた。

「皆の者！　このアラン王子は、ドーデン帝国の尖兵ぞ！　妾との婚儀に託け、いずれはバートル国を併合しようとする、意図は明らかである！　国を愛する気持ちがあれば、妾と共に戦うべし！」

それまで呆然と突っ立っているばかりだった護衛兵の間に、姫の喚き声は電流のように貫いた。

ふらふらと彷徨っていた柄に置かれた手が、がっしりと握りしめられ、ざあっと津波のように剣を抜き放つ。

「うぬうっ！」と、騎馬隊長は興奮に顔を真っ赤に染め、剣を引き抜いた！

「者供っ！　王子をお守りしろっ！」

わあっ！　と一斉にドーデン側の護衛兵たちが叫び返し、バートル国側に突進する。

がきーんっ、ちゃりーんっ！　と、広間に数十人が一斉に切り結ぶ剣戟の音が響いた。

市川と洋子は、夢中になって三村を守りながら、エリカ姫の攻撃を受け止めていた。

「ま、待てっ！　戦いはならん！」
広間で、ターラン大公がおろおろ右往左往しながら、弱々しい叫び声を上げていた。
だが、もはや誰も、大公の叫びに耳を貸す者はいない。

糞！　どうすればいいんだ……。

市川は、大いに焦っていた。
姫の攻撃を受け止め、刃を受け流す。だが、ただただ防御に徹するだけで、逆襲など考えも浮かばない。

マント

山田が近づいてくる。山田は手に武器を持っていない。代わりに、調理道具の麺棒を棍棒替わりに振り回している。

「市川君っ！　こんな所に釘付けになったら、ヤバいぞ！　外へ逃げろっ！」

山田の言葉に、市川は目が覚めたようになった。そうだ、何も馬鹿正直に戦っている場合じゃない！

騎馬隊長に叫ぶ。

「飛行船へっ！」

ただ一言だけで、隊長は理解したようだった。大きく頷くと、さっと腕を大きく回し、味方に、退却の合図をする。

じりっ、じりっと後退を続け、出口へと近づいていく。三村の周りにはドーデン側の兵士が密集隊形を作って守っている。

ようやく、出口へ辿り着いた。

姫は諦める様子もなく、口をきっと引き結んで、剣を振るっている。

市川の頭上に電球が灯った！

新庄を見る。新庄は近衛兵たちの隊長らしく、足下まで隠れる堂々としたマントを翻している。

市川は新庄に身を寄せた。

「新庄さん、あんたのマントを貸してくれ！」

新庄は、くるっと市川に顔を向ける。市川の顔付きを見て、何か

悟ったのか、無言で自分のマントを外すと、投げつけてきた。
市川は新庄のマントを受け止めると、姫に向かって全速力で駆け出した。

引き上げ

足音に気付き、姫が顔を捩じ向けた時には、すでに遅かった。市川は新庄のマントを、大きく広げ、すっぽりと姫を覆っていた。

市川の右拳が、姫の鳩尾に決まっていた。腕の中で、姫の身体がくたりと力を失うのを感じる。

市川は我ながら驚いていた。自分にこんな技があるとは、思ってもいなかった。無意識に身体が動き、熟練の戦士のように当て身を食らわしていたのである。

しかし鳩尾に当身を食らわしただけで、相手が気絶するわけはない。息が詰まって、行動の自由を奪うかもしれないが、これで気を失うなどありえない。これもアニメの嘘……いや、ドラマの嘘だろう。

姫の身体を担ぎ上げ、市川は城から飛び出した。城の前庭には、一行をここまで送ってきた馬車が停まっている。

「引き上げ――っ！　飛行船へ帰還する！」

騎馬隊長が喚き、一行はまっしぐらに馬車に飛び乗っていく。三村は兵士たちに守られ、馬車に押し込められた。

新庄は身軽に御者台に飛び乗ると、立てかけてある鞭をぴしりと鳴らす。

馬が嘶き、馬車が動き出した！

城下町を全速力で駆け抜け、飛行船を目指した。

追撃

行きはゆっくりだったが、帰りはあっという間だった。悪魔に急き立てられているかのように、新庄は無茶苦茶に鞭を振り回し、遠慮会釈なく、馬の尻を激しく叩く。

白目を剥き出し、口からは泡を噴き出して、馬は全力で走っていく。馬車の内部は、がたごとと前後左右、上下に揺さぶられ、市川は必死になって内部の吊り革に縋りついた。

騎馬隊長が、市川が担ぎ込んだマントの中身に注意を向けた。捲り上げ、驚きの声を上げる。

「なんと！　エリカ姫ではないか！　人質にしたのだな？」

騎馬隊長の賛辞の声に、市川は軽く頷いた。本当は人質にするつもりはない。しかし、今は、隊長の勘違いを正すつもりはなかった。

城下町の緩やかな坂道を下り、不意に視界が開け、目の前に草原が広がる。

緑の絨毯に、細長いドーデン帝国の紋章をつけた、巨大な飛行船が横たわっている。風に動かされないよう、船首と船尾から、地面に繋留索が地面に突き刺さっている。

馬車が停止すると、騎馬隊長は部下を叱咤し、大急ぎで繋留索を地面から引き抜く作業に入った。

市川は馬車から地面に飛び降り、バートル国の王宮を見やった。城下町に続く道から、追撃の部隊が迫ってきている。

追撃部隊は、重装騎兵だった。甲冑つきの乗馬に、跨る騎兵もまた分厚い装甲の鎧に全身を固めている。手にしているのは、巨大な

槍で、全員が頑丈そうな盾を持っている。

騎兵の後ろから、奇妙な一団が追走してくる。杖を手にし、身に纏っているのは、頭巾つきの、真っ黒なマントである。こちらも乗馬だったが、装甲のない、裸馬である。

あの一団は、自分がキャラクター設定したものだ。もし、設定が、変更されていないのなら、ちょっとヤバイ……！

騎兵

「なあ、山田さん。バートル国の設定をやるとき、魔法が使える設定にした、って言っていたよな？　あいつら、おれの設定した魔法使いたちだぞ。本当に魔法が使えるのか？」

山田は呆然と、市川の見ている先を注目して、頷いていた。

「ああ、確かに魔法が使える設定にしようと、おれは言った。だけど、そりゃ設定だけだぞ。木戸さんが、おれの設定を採用するとは限らない……。第一、ドーデン国の科学技術と、魔法がどう両立するんだ？」

言い合いするうち、バートル国の軍団は急接近してくる。作業を続けている騎馬隊長は、迫ってくる敵兵に、歯を剥き出し、唸った。

「きゃつら！　戦うつもりか？　全員、迎撃の用意――っ！」

作業を続けている兵士を残し、他の騎馬隊の兵士は、飛行船の後甲板に殺到した。

後甲板の扉が開くと、内部にずらりと二輪車が整列している。

騎馬隊とはいえ、通常の装備は、二輪車を馬替わりとしている。本物の馬を、飛行船に乗船させるわけには行かない。馬はひどく敏感な生き物で、飛行船に乗せて運ぶのは、実に困難である。

ばりばりばり！　と、けたたましい騒音を撒き散らし、二輪車の群れが飛行船の甲板から飛び出した。

ドーデン帝国では、蒸気機関が主流であるが、二輪車は内燃機関を使っている。というより、市川がそう設定したのである。

サイド・バルブの４ストローク・エンジン。単気筒五百？。点火

方式は白金プラグの常時点火を採用している。エンジン形式は、十九世紀末にしては進歩しすぎである。が、そこは目を瞑(つむ)ってご勘弁を願いたい。

二輪車の爆音に、バートル国の騎馬は足並みを乱した。薄青い排気を棚引かせ、二輪車の列は急角度で騎馬隊の前面を横切る。

馬は一斉に驚き、棹立ちになった。騎馬隊長は勝利感に、目を煌(きらめ)かせる。

「抜刀――っ！」

隊長の号令に、全員が剣を抜き放つ。日差しを、刀身がきらきらと眩しく反射した。

魔法

二輪車部隊の中には、側車をつけたサイド・カーも含まれている。サイド・カーに座った兵士は、歩兵銃を構えた。

どかーんっ！　と、吃驚するほど巨大な銃声が響き渡り、バートル国の重装騎兵に向かって放たれる。音の割りに、銃弾はそれほど威力は無さそうで、敵騎兵の分厚い装甲は、弾を弾き返した。

が、頭部を銃撃された兵士は、衝撃で脳味噌が揺すぶられたのか、くらくらっと眩暈を起こしたように落馬してしまった。跳ね返したとしても、衝撃はかなりあると見え、敵は怯んでいる。

バートル国の騎兵は銃を装備していない。一方的な戦いになるかと思われたが、後方に控えていたマントの一団が奇妙な手つきを始めた。

指先を開き、頭巾に覆われた奥の眼差しは鋭かった。口許が動き、何やらぶつぶつと呟いているようである。

全員、杖を持っている。杖の握りには、大きな宝石が埋め込まれていた。その宝石が、燦然とした光を放った！

轟っ――！

宝石の内部から、何かエネルギーが放たれ、空中をオレンジ色の火球が飛んだ。

火球は空中を真っ直ぐ飛ぶと、ドーデン側の地面に突き刺さるように落下する。

ぐおおおっ！　と、地面に落下した火球が膨れ上がり、ドーデン騎兵隊を薙(な)いだ。見守る市川まで熱波が達した。気のせいか、眉毛がちりちりと焦げるようだった。

わあっ！　と悲鳴を上げ、二輪車を操縦していた騎馬隊の兵士が火達磨になった。

別の杖を持つマントの男が、再び杖を振るう。

ばりばりばりっ！　と、杖の先端から紫電が放出され、オゾンの匂いが、つん、と鼻腔を抉る。

味方は、瞬時に大混乱に陥った！

退却

「退却――っ！　全員、飛行船に戻れ――っ！」

思いもかけないバートル国の逆襲に、騎馬隊長は完全に頭に血が昇ったようだ。全身を突っ張らかせ、声を限りに喚いている。

隣の喇叭（ラッパ）兵が、トテトテタ～～と、調子外れの退却の合図を吹いた。喇叭兵もまた、隊長以上に逆上しているようだ。

二輪車部隊は、尻を捲（まく）って退却する。後部甲板に、二輪車を格納する余裕もない。

飛行船のタラップに駆け上がれる場所まで近づくと、恥も外聞もかなぐり捨て、二輪車を横倒しに放り捨て、飛行船に乗り込んできた。

嵩（かさ）に掛かったのは、バートル国重装騎兵の群れである。全員、時の声を上げ、手にした槍を持ち上げ、全速力で向かってくる。

ようやく繋留索（ケーブル）が外れた！

ざあああっ！　と、船首と船尾にある放水口から、飛行船のバラストの役目を兼ねた水槽から水が噴出する。非常脱出の際の、重量軽減である。

ぐおおおん……、と重々しい音を立て、飛行船のエンジンが、やっと目覚めた。飛行船の両翼に設置された、三枚羽根のプロペラが回転を始める。

スラットが降ろされ、飛行船は上昇を開始する。魔法使いたちが、飛行船を見上げ、次々と火球や、紫電を投げかける。

飛行船の船体は、ほぼ金属製なので、当たっても塗料が焦げる匂

いがするだけだ。どんどん飛行船の高度が上がると、魔法使いたちの攻撃は届かなくなる。バートル国の追撃手たちは、悔しそうな声を上げ、飛行船を見送った。

市川は、船内から窓越しに下界を見下ろし「ひゃっほうーっ！」と歓声を上げた。安堵感に、市川の軽薄な面が剥きだしになる。

威厳

その時、やっと自分が担いだままの、エリカ姫の存在に気付いた。床に降ろし、新庄に借りたマントを広げると、ぐったりとなったエリカ姫が寝そべっていた。

「拉致しちまったのか？　大丈夫か？」

山田が心配そうな声を上げた。「大丈夫か」とは、余計な真似をしたのではないのか、という疑問である。

市川は、山田の問い掛けに小さく頷いた。

「かもしれない。でも、あの時は、いい思い付きだと思ったんだ。自分でも、どうして攫っちまったのか、判らねえ……」

「何を言っておるのか！　人質だぞ！　これで、わが国は、バートル国と有利な取り引きを行える！」

当然、とばかりに、騎馬隊長がふんぞり返った。エリカ姫を見下ろす騎馬隊長の視線には、一欠片の憂慮など見当たらない。

「諸君！」

その時、三村が毅然とした表情で、騎馬隊長と市川の間に割り込んだ。騎馬隊長は、三村の声に、ぴしっと全身を緊張させる。

「わたしは、これから、エリカ姫に前後の事情について、質問を行いたいと思う」

三村は言葉を切ると、騎馬隊長の顔をじっと見詰める。騎馬隊長は、ポカンと口を開け、まじまじと三村を見つめ返した。

「し、しかし、尋問は、我ら殿下の護衛の人間で、行うのが通例ですぞ！」

三村は、ゆっくりと首を振った。

「仮にも、エリカ姫は、わたしの婚約者です。正式に婚約解消をするまでは……違いますか？　ですから、わたし自ら、エリカ姫に尋ねるのが礼儀でしょう」

「れ……礼儀ですと？　この娘は、殿下のお命を狙ったのですぞ！」

騎馬隊長は顔を真っ赤にさせ、憤慨の表情になった。が、三村は穏やかな眼差しで、じっと見詰めるだけである。

やがて、がっくりと隊長の肩が下がった。

「判りました……。殿下にお任せいたそう」

まさに、アラン王子の威厳である。

市川は、だんだん、三村が本当の王族に見えてきた。

そんな馬鹿な！

市川は瞬時に、自分の感想を否定した。が、どうにも、三村の顔を見ていると、心の中で背筋を正す思いを抑え切れなかった。

目覚め

気絶したままのエリカ姫を、三村の私室に担ぎこみ、ソファに横たえさせる。市川以下、山田、洋子、新庄、三村は、手足を投げ出した姫の顔をしげしげと覗きこんだ。

ドアの向こうには、アラン王子を護衛する兵士が立っているはずである。三村は王子の威厳で、呼ぶまで、何があっても入ってくるなと厳命していたから、今は市川も普通の口調で三村に話しかけられる。

「どうする、三村。このお姫様……」

言いかけ、市川は口を噤(つぐ)んだ。

何か変だ。余人の入らない、市川たち【タップ】のスタッフのみになれば、三村はいつものように、おどおどとした気弱な表情を浮かべるはずなのだが……。

ところが、三村は真っ直ぐに、市川の目を見つめ返している。視線は、全くぶれていない。顎を高々と上げたままだ。

まるで王子様、そのものである……。

「三村……君？」

市川の呼びかけに、三村は微かに首を傾げた。唇が動き、意外な言葉を押し出す。

「それ、わたしの名前ですか？　わたしの名前は、アランです。お忘れですか」

「ええっ！」

市川は驚きのあまり、仰け反っていた。

「三村君っ！」「何を言っているの？」

山田と洋子が、同時に叫んでいた。新庄は、黙って三村を見上げている。

三村は平然としていた。

その時「ふうーっ」と息を吐く気配がして、一同はソファに視線を戻した。

エリカ姫が目を瞬(またた)いている。

視線が室内を彷徨(さまよ)い、三村の顔に止まると、ぎくりと身を強張らせた。

「ここはっ？」

「飛行船の中だ」

新庄がするりと前へ出て、話し掛けた。表情は安心させるように、強いて穏やかさを保っている。

感化

エリカ姫の視線が、探るようなものになった。
「あんた、平ちゃん……よね？」
「そうだ、新庄平助。思い出したか？　君は田中絵里香……。違うかな？」
エリカ姫……または絵里香の目が大きく見開かれた。おずおずと右手が挙がり、自分の額をごしごしと擦（こす）る。
「あたし……あたし、何をしたの？　どうして、ここにいるの？」
新庄は辛抱強く続ける。
「君は、ここにいる三村君……アラン王子に切り掛かったんだ。殺そうとしていた。憶えていないのか？」
絵里香の視線が三村に向かう。一瞬、憎しみの表情が浮かぶが、すぐに消えた。
「あ、あたし……！　そう、アラン王子を殺そうと……ドーデン帝国は妾のバートル国を狙っている！　者ども！　出会えっ！　妾（わらわ）と共に戦おうぞ……！」
途中から絵里香の口調が切迫したものになったが、最後に「はっ」と我に返った。
「今の、あたしの台詞？　あたしが言ったの？」
山田が、首を振った。
「相当、この世界に感化されているな。本来の自分を、エリカ姫という役割が、覆い被せている」

絵里香は眉を寄せた。
「この世界？　この世界って、何？」

新庄がゆっくりと言い聞かせる。
「木戸さんの『蒸汽帝国』だ。おれたちは、木戸さんの描いた『蒸汽帝国』の中にいる」
絵里香の唇が「純一？」と、音もなく動いた。すぐさま全身が弾けるように跳ね上がり、すっくと立ち上がる。
「違うわっ！　あれは祐介の『蒸汽帝国』よ！　あいつなんか、祐介の原作をなぞっただけじゃない！」

その時、三村が口を開いた。
「教えて下さい。なぜ、僕を殺そうとしたのですか？　ドーデン帝国が、あなたがたのバートル国を併合しようとしている、などという考えは、どこから湧いて出たのです？」

絵里香はポカンと、虚脱したような表情になった。
「それは、導師様が……」

訂正

絵里香の表情が虚ろになり、言葉が台詞の棒読みのようになる。
三村は「導師様？」と聞き返す。絵里香はがくり、と頷いた。

「導師様が仰ったの……。ドーデン帝国は、バートル国を我が物にせんと、アラン王子を使わした……。アラン王子との結婚は、バートル国の衰亡をもたらす……」

山田が相槌を打つ。
「どうやら、バートル国は、導師様とやらが精神的支配を治める、神聖王国のようだな。その導師様が、エリカ姫に奇妙な考えを吹き込んだみたいだ……」

そこまで言って、不意に笑いを浮かべた。
「これは、面白くなった。もしかしたら、その導師様という存在が、ストーリーに重要な役割を果たすようだ。どうだい？　エンディングが見えてきたじゃないか？」

山田は市川を見た。
「導師様というキャラクターの設定をする必要があるな、市川君」

急に話題を振られ、市川は戸惑った。
「おれが？」

山田は頷いた。表情に熱意がこもる。
「そうさ、導師様が、もしかしたら、ストーリーの最終的な敵なのかもしれない。ファンタジーの常道さ」

新庄が皮肉そうな表情になった。
「勧善懲悪か？」
と、いきなりドアが外側から激しく叩かれる音が響く。ドアの向こうから騎馬隊長の声が聞こえてくる。
「王子殿下っ！　ただ今、ドーデン王宮に無線連絡を取ったところ、元老院と平民議会は満場一致で、バートル国への宣戦布告を決議いたしました！」
バタンっ、と大きな音を立て、ドアが開かれる。騎馬隊長が興奮も顕わに、背筋をピンと伸ばして敬礼をしていた。
「ドーデン王立空軍、陸軍は、現在バートル国に向け、進撃を開始しておりますっ！」
山田が新庄に向かって訂正した。
「いや、戦争アニメの展開だな」

別人

三村が妙だ……。

市川は圧倒的な気懸かりを感じていた。

何が妙、といって、三村が依然として王子様然としている状態が続いている。物腰は優雅で、口調には気品が溢れ、絶対に喋る前に躊躇ったり、口篭らない。普段の三村を知る市川にとっては、別人としか、思えない。

飛行船は、進軍する王立空軍の部隊との会合地点へと向かっている。引き続き無線連絡で、アラン王子をこの進撃部隊の軍団長に任命する旨、王宮よりの命令が伝えられた。

王立空軍には、ドーデン皇帝よりの玉璽が押された任命書が携えられているはずだ。任命書を受け取った瞬間、アラン王子は――つまり三村は――空軍と陸軍を合わせての軍団を指揮する権限を付与される。もっとも……実際の運営は、将軍たちに任されるのだが。

「どう思う？」

市川は山田と洋子、新庄たちと飛行船の空き部屋に集まり、切り出した。

洋子は頷き、口を開く。

「そうよね。あたしも妙だと思ってた。あれから三村君、名前を呼んでも反応しないのよ。アラン王子、って呼びかけた時だけ、返事するのよね」

新庄は忌々しげに腕を組んだ。三村は制作進行である。つまり、

新庄の直接の部下である。その部下が、自分より身分が高い王子様とは、癪に障るのだろう。

「あの野郎、元の世界へ戻ったら、螺子をぎゅうぎゅう締め付けてやる！　制作進行って立場を、完全に忘れてやがる！」

「そうかもな」

ポツリと、山田が同意する。三人は「えっ」と山田に顔を向けた。山田は、何事か一心に考え込んでいる表情であった。

山田は顔を上げた。

「完全に忘れているのかもしれない。もう、自分が制作進行の三村健介じゃなく、ドーデン帝国の第五王子、アランだと思っているのかも」

方法

市川は、かっかと、頭に血が昇るのを感じていた。
「何でそうなるんだ！　あの？声？が言ったろう？　五人が揃って、冒険を終わらせろって……。あいつが脱けたら、おれたち、元の世界へ帰れなくなるぞ！」

山田が首を振った。
「五人揃って、とは言ったが、三村君があの状態では駄目だ、とは言っていないぞ。それに、おれは、ある考えが浮かんでいる。なぜ、三村君が王子様のままでいるのか……」

市川は山田に身を乗り出して話しかける。
「本当かい？　本当に、訳が判ったのか？」
「推測だがね。今までの体験で、三村君はおれたち以外の、つまり『蒸汽帝国』のキャラクターが同席している場合、王子様となる。今は、エリカ姫が一緒だ」

全員「あっ」と小さく叫び声を上げた。

「そうだよ……。エリカ姫と、三村は、いつも一緒にいる……。すると、エリカ姫……つまり田中絵里香は『蒸汽帝国』のキャラクターって結論になる……」
市川は一気に捲し立てた。新庄は大きく頷いた。
「そうなんだ。おれ、絵里香と少し話したんだが、木戸さんの漫画は覚えているが、アニメについては完全に知らないらしい。つまり、最後に木戸さんが憶えている絵里香の状態なんだ。実際の田中絵里香ではない……」

洋子が首をちょっと傾げた。

「それじゃ、エリカ姫がいない時は、元の三村君に戻るのかしら?」

市川は勢いづいた。

「そうかもしれない！　試してみる価値はありそうだ！」

洋子は目を光らせた。

「でも、難しいかもよ。あの二人、いつもべったりくっついているんだもん！」

お姫様

飛行船の窓際に、三村と――アラン王子とエリカ姫が肩を寄せ合い、立っている。アラン王子の腕は、エリカ姫の腰に周り、エリカ姫は王子の肩口に頭を凭れかけている。

完全に恋人同士だ。

あれから三村は、終始アラン王子として振る舞い、エリカ姫に接していた。エリカ姫もまた、王女らしい態度で接し、いつしか二人は傍目にも判る恋心を顕わにしている。

憤懣やるかたなし、となっているのは騎馬隊長である。ドーデン帝国とバートル国が戦争状態にあるのだから、エリカ姫は敵国人というわけだ。

しかし三村は、たとえ敵国の姫君でも、婚約は続いているからと、穏やかに説得していた。

市川は部屋の入口から二人を眺め、小さく「けっ！」と舌打ちをした。癪だが、こうしていると、実にお似合いの二人である。

三村がエリカ姫と一緒にいると王子の役割にずっぽり嵌まっていると同じく、エリカ姫も、三村と一緒にいるときは田中絵里香ではなく、姫様として完璧に振舞っている。

市川は、近くに控えている洋子に合図する。

洋子は打ち合わせ通りに、そろりと室内に入り込むと、軽く「えへん」と咳払いをした。

二人は洋子に振り向いた。

洋子は、あらん限りの演技力を発揮して、にっこりとエリカ姫に話し掛けた。

「あのう……エリカ姫さま、今、お話してもよろしいでしょうか？」

声が上ずっている。しかしエリカ姫は、にこやかな笑みを浮かべ、応えた。

「ええ、よろしくてよ！」

エリカ姫の返答に、隠れている市川は「くわ――っ！」と、言葉もなく地団太を踏んでいた。まるでお姫様の言葉遣い！

あっ、エリカ姫はこの世界では本物のお姫様か？

しかし「よろしくてよ！」とは、尋常ではない。むず痒い思いに、市川は顔を掻き毟りたい気分であった。

三村の決意

恐らく洋子も吹き出したいのだろう。それでも神妙な態度で話しかけている。

「あのう……、お姫様、ここに来てからお召し物、替えていないと思うんですが。着替えがありますので、選んではどうですか？」

エリカ姫の顔がぱっと輝いた。

「まあ、嬉しい！　喜んで、お誘いに伺いましょう！」

洋子はエリカ姫を伴い、部屋から出て行く。

王族専用の飛行船には、エリカ姫に相応しい衣装も、たっぷりと用意されていた。それを確認して、今の芝居を思いついたのである。

三村一人になって、市川は廊下で誰も来ないか、見張っていた新庄と山田に合図する。

市川、新庄、山田の三人は、三村の前に姿を表した。

三人の気配に、三村は振り向く。

途端に、三村の態度に変化が表れた。

さっと顔が青ざめ、きょときょとと視線が落ち着きなく、室内を彷徨（さまよ）った。

「三村……王子様の役が似合っているなあ」

市川は皮肉な口調で話しかける。三村はおどおどと俯き、両手を意味なく捻（ひね）くった。

「そ、そんな……僕は、ただ……」

山田が穏やかな声を掛けた。

「三村君。責めているんじゃない。君の芝居で、おれたちはかなり

助かっている。しかし、そろそろ、おれたちの本来の目的を思い出す時分だと思うんだ。君も承知しているように、この『蒸汽帝国』の世界で、我々がエンディングに辿り着かない限り、おれたちは元の世界へ帰れない。判っているんだろうね」

三村は、消え入りたそうに、細長い身体を、精一杯ぎゅうっと縮めている。

「はい……。判っています……」

市川は苛々が募った。

「おい！　お前、元の世界へ帰りたくないのか？　お前はアニメの制作進行だぞ！　王子様なんて柄じゃない」

市川の言葉に、三村は窓の外を食い入るように見詰めている。唇が細かく震え、何度も唾を飲み込んでいる。

新庄が囁くように話し掛けた。

「何か言いたいのか？　言えよ！」

三村の頬がひくひくと痙攣する。息を大きく吸い込み、身内の決意を高めている。

やがて、ゆっくりと一同に顔を向けた。
市川は「はっ」となった。
三村の表情は、王子様の役割を演じていたときと、全く同じだ。

「僕……この世界が好きになってきたんです……！」

三村の言葉は、絞り出すようであった。それでも背後に「梃子（てこ）でも動かないぞ！」という決意が溢れていた。
三村の両手が、ふらふらと彷徨（さまよ）った。

「僕、以前の生活を思い出せなくなっているんです。三村健介という名前は覚えている。でも、どんな部屋に住んでいたか、どんな仕事をしていたか……全然、少しも思い出せない。それに……両親の顔すら思い出せないんです！　両親という言葉で思い浮かべるのは、ドーデン帝国の皇帝陛下と、皇后陛下の顔だけです。僕は、完全に、この『蒸汽帝国』で生きている！　僕の帰る場所は、ドーデン帝国の王宮なんだ！」

市川は、足下が崩れていく気分を味わっていた。三村の言葉は、完全に三人を打ちのめしていた。
山田が青ざめつつ、三村に訊ねた。
「それでは、おれたちの目的は……」

三村は、真っ直ぐに山田に顔を向けた。
「もちろん、あなたがたの目的には、全面的に協力しますとも！　あなたがたがいなければ、この戦争はドーデン帝国の勝利を確定できませんからね！」

市川は度を失っていた。
「せ、戦争っ？　三村っ、お前、何を……」
三村は、わざとらしく目を反らす。思い入れたっぷりに顔を戻すと、平然と言い放った。
「お忘れですか？　現在、ドーデン帝国と、バートル国は戦争状態にあるのです。飛行船は、味方の空軍と会合地点へ向かっています。しかし、まだドーデン王立空軍は存在していません。なぜなら、あなたがたが設定をしていないからです！」

王立空軍

市川は度を失っていた。

「せ、戦争っ？　三村っ、お前、何を……」

三村は、わざとらしく目を反らす。思い入れたっぷりに顔を戻すと、平然と言い放った。

「お忘れですか？　現在、ドーデン帝国と、バートル国は戦争状態にあるのです。飛行船は、味方の空軍と会合地点へ向かっています。しかし、まだドーデン王立空軍は存在していません。なぜなら、あなたがたが設定をしていないからです！」

市川は山田と顔を見合わせた。山田は呆然とした表情で呟いた。

「そうだ、うっかりしていた！　考えてみれば、ずっと飛行船は空中を旅しているのに、一向に味方の空軍と出会わないのが、妙だとは思っていたんだ……。おれたちが設定をしていないせいなんだ……」

三村は宣言した。

「さあ、お願いです。ドーデン王立空軍および陸軍の兵器、装備一式を設定してください！　そうすれば、この戦争は終結し、すべて目出度し、目出度しとなり、あなたがたが熱望する、エンディングとなる！」

言葉を切ると、三村はさらに市川たちに向け、止めの台詞を口にした。

「充分、強力な兵器を設定してくださいよ。万が一にも、わが国が負けるなどないよう、素晴らしい兵器をお願いします！」

戦争物

市川らは、王子随行員のため、用意された部屋に集まって、額を寄せ合った。

新庄が口火を切る。

「どうするんだ？　帝国軍の兵器を設定する羽目になったみたいだな」

山田が苦悩を顕わにして、眉を寄せた。

「戦争物か！　大抵、戦争物のアニメってやつは、シリーズが長くなるんだよなあ……。もし、本格的な戦争になったら、いつになったら帰れるか、判らんぞ！」

洋子は、あっけらかんと口を挟む。

「あら！　問題ないわよ！　三村君の言うとおり、帝国側に超強力な兵器を登場させれば良いじゃない？　バートル国は、どう見ても中世の装備しかないみたいだし、マシンガンとか、戦闘機相手に、勝てるわけないもの」

山田は首を振った。

「それでは、虐殺だ！　仮にも戦争だぞ！　おれたちは、そんな一方的な戦いに手を貸すなんて、絶対に御免被るからな！」

山田の反対意見に、洋子は一遍にぺしゃんこになった。

「御免、そこまで考えていなかった……」

市川は、ぽつりと呟くように口を開く。

「そうか……。戦争になっても、人が簡単に死なないような戦いだ

ったら……」

山田は、ぎょっとなって市川に顔を向ける。

「市川君！　君は何を言おうとしているんだ？」

山田の反応に、市川は「えっ」と我に返った。思わず、胸に浮かんだ考えを口に出していた自分に気付く。

「悪い、ちょっとボーっとなっていた……」

しかし、新庄は目を輝かせている。

「いや、今の市川の意見は、面白いぞ！」

アイディア

新庄の言葉に山田は「うん」と頷き、両目を煌(きらめ)かせて話し出す。
「いいかい。おれたちが設定すれば、その設定は『蒸汽帝国』の世界では、現実のものになる。もちろん、木戸さんのOKは要る。それでも、基本的におれたちの設定が必要という事実には、変わりはない」
山田の言葉に、他の三人は同時に頷く。山田は言葉を続けた。
「だから……破壊を目的とした兵器じゃなく、戦いを無効にするような働きをする兵器だったら、どうだ？　戦いが馬鹿らしくなるような……そうだな……例えば……」
後が続かなくなった山田は、困ったように頭を掻いた。

市川の頭上に、電球が灯った！
「ギャグにしちまえばいいんだ！」
市川は叫び、にったりと笑いを浮かべた。
「何も糞真面目に、戦車とか、戦闘機を出す必要はねえ！　例えば、バナナの皮を打ち出す大砲とかあれば、敵はバナナの皮を踏んで、滑って戦えなくなるとか……」

山田が市川の言葉に頷いた。
「バスター・キートンとか、ハロルド・ロイドのスラップ・スティック映画に出てくるような、馬鹿らしい兵器だな！　そうだ！　シリアスな戦争映画じゃなく、滑ったり転んだりの、ドタバタ喜劇で行けば……」

うずうずと、新庄の顔に喜色が浮かんだ。

「なるほど！　それなら、三村の願いも叶う。ようし、先が見えて

きたな！」

立ち上がり、全員に発破を懸けるように両手を振り回した。

「さあ！　仕事だ、仕事だ！　愚図愚図している暇はないぞ！」

市川は新庄の浮かれ調子に「やれやれ」と首を振った。

何だか【タップ】に戻った気分だ。

設定作業

部屋から外へ出て、市川は気分を変えるために飛行船の食堂を目指した。飛行船は空飛ぶホテルとして設計されていて、豪華な食堂も完備されている。

真っ赤なお仕着せを身につけた給仕に、市川は珈琲を頼んだ。珈琲、紅茶など、嗜好品は『蒸汽帝国』の世界では何でもある。現実の世界と、どう歴史が違うのか判らないが、嗜好品に関しては、同じ歴史を歩んでいるようだった。

珈琲が運ばれ、市川は腕を組んだ。頭の中には、これから設定しなければならない、ドーデン帝国の兵器、装備品のアイディアが渦巻いている。

まだ、頭の中で、はっきりと纏(まと)まっていない。とはいえ、こうしてぼんやりと窓の外を眺めながら、ひと時を過ごすのも、アイディアを練る方法だ。テレビのワイド・ショーなんかを頭を空っぽにして見るのが、一番アイディアが出るのだが。

しかし、『蒸汽帝国』の世界ではテレビは存在しない。我慢しなければならない……。

待てよ?

市川は首を捻った。

もし『蒸汽帝国』の世界に、テレビが存在するという設定にすれば、この瞬間からテレビが出現するのだろうか?

と、市川の鼻に、香水の甘い香りが漂ってきた。

気付くと、エリカ姫が側に立っている。

「お邪魔でしょうか？」

エリカ姫は真剣な眼差しで、じっと市川の顔を見詰めている。身につけているのは、洋子が見繕ったらしい、薄緑色のワンピースであった。

襟ぐりが深く、エリカの胸元からは、谷間がもろ見えになっている。洋子の趣味だろうが、ちょっと色っぽすぎる！

動揺

市川は、なぜかうろたえていた。視線が、エリカの胸元に行きそうになると、無理矢理やっとの思いで引き剥がす。

視線を引き剥がすとき「べりべりばりばり」と、音が響きそうだ！

「え、ええ……どうぞ！」

エリカ姫は、流れるような動作で、市川の真向かいの椅子に腰を降ろす。

市川は、この世界では、女性が座るとき、椅子を後ろから引くのが礼儀であるのを思い出していた。だが、すでにエリカ姫は座っているので、手遅れである。

エリカ姫は真っ直ぐ背を伸ばし、大きな瞳を、じっと市川の顔に向けている。市川は落ち着きをなくしていた。

「あのう……おれに、いや、僕に何か、用ですか？」

「あなたがた、ドーデン帝国の武器を設定するのでしょう？」

いきなり、ズバリと切り出され、市川は大いに動揺した。全身が化石となったかのように、指一本たりとも動けない。

「ど、ど、どうして……つまり、あんたは……？」

掠れ声で、やっと言葉を押し出す。

気がつくと、市川は両拳を、ぎゅっと握りしめていた。

エリカは頷いた。

「聞いたのです。あなたがたの相談を。あなたがたが、設定を描くと、それが現実になるのでしょう？　違いますか？」

市川は言葉もなく、エリカ姫の顔を見詰めているだけだった。浅黒い、といっていいエリカ姫の肌は滑らかで、大きな瞳と、きゅっと窄まった顎。どことなく、小栗鼠を思わせる、野性的な表情をしている。

エリカが艶やかな笑みを浮かべた。その場に、ぱああっ、と光が差したように、市川は感じていた。

「わたしは、田中絵里香としての記憶もあるんですよ！　それで、あなたがたの相談を盗み聞きして、すべて納得しました。あなたがた、アニメのスタッフなんですね！　平ちゃん……つまり、新庄さんに事情は聞きましたが、その時は判らなかったんです。でも、今は理解できます。あなたがたの設定で、この世界は変化します。となると、あなたがたは、神に等しい力を持つのではないでしょうか？」

吃驚仰天！　驚天動地！　奇怪痛快、奇天烈壮絶！　驚き桃の木、山椒の木だ！

エリカの指摘は、市川に新たな地平を啓いて見せてくれた！

「つ、つ、つまり、おれたちが……？」

エリカは静かに頷いた。

「そうです。あなたがたの設定次第で、ドーデン帝国も、バートル国も命運が決まります！　ですから、あなたに是非とも頼みたいお願いがあるのです！」

「お、おれに……？」

市川は、もう「僕に」なんてお行儀のいい返事をする気も喪失していた。

エリカは何を言い出すつもりだろう？

「バートル国の設定も、して欲しいのです！」
エリカは身体を傾かせ、顔を市川に向け、近々と寄せてきた。ほんのりと甘い、エリカの香水が市川の鼻をくすぐる。

誤解？

市川はエリカの香水に包まれ、ぼうっとなっていた。

「わたしは、バートル国の姫君として設定されました。当然、バートル国への愛着が生じます。わたしは、バートル国を救いたい！　ドーデン帝国との戦争で、一方的にバートル国が負けるような展開は望みません」

エリカは囁くように話しかけていた。市川の耳もとに口を近づけ、恋人が囁くかのような口調で話しかけてくる。

「前にもお話ししましたが、わたしは【導師】と呼ばれるバートル国を支配する者に、アラン王子を殺害するよう暗示を掛けられていました。バートル国は【導師】の精神的支配に、雁字搦めになっています！　ですから、【導師】の軛を、わたしは解き放ちたい！　それには、あなたがたの設定が必要なんです！」

市川の視界一杯を、エリカの瞳が占領していた。市川はエリカの瞳に麻痺されたかのようで、身動きもできなかった。

と、出し抜けにエリカが身を引いた。

金縛りに掛かっていた市川は、ぶるぶるっと頭を振って息を吸い込んだ。

「お願いします。どうか、わたしの願いを叶えて下さいませ」

一礼して、エリカは足音もなく、その場を立ち去っていく。見送った市川は、凍りついた。

食堂出口に、腕を組んで、市川を、じいっ、と睨んでいる洋子の視線があった。遠ざかるエリカの背中を、洋子は意味ありげに見送る。

「へえ！　そうなんだ！」

洋子は、嘲るような口調で言い放つ。

「な、何がだよ！」

市川は、なぜか度を失っていた。

「別に……」

プイ、と横を向いて、洋子は足音をわざと立て、足早に去っていく。

洋子を見送る市川は、なぜか猛烈に腹が立ってきた。

へっ！　なあんでえっ！

部屋

エリカ姫が、バートル国の設定もして欲しいと依頼してきた――との市川の報告に、山田は腕組みをして顎に手をやった。

山田の仕草を見て、市川は典型的なアニメの、「考え込む」動作だなと思った。

実写なら、表情の微妙な変化で登場人物の感情を表現できる。だが、アニメではこうして、いかにも考え込んでいるような仕草をさせないと、視聴者に伝わらない。知らず知らず、自分も、同じような仕草をしているのだろうか。

二人の相談している部屋は、アラン王子の隣部屋である。飛行船の隅から隅まで探し回って、ようやく見つけてきた机を二つ運び込み、即席の仕事部屋にしている。採光は大き目の船窓があるので問題ないが、夜まで作業する予定で、電灯も持ち込んでいる。

壁には、いかにも王族専用飛行船らしく、ドーデン帝国歴代の皇帝、皇后などの肖像画が麗々しく飾られていた。

もちろん、この部屋も、あらかじめ山田に設定させ、肖像画のキャラクター設定も市川が描いている。だから部屋が出現したのだ。

市川は、設定をすると現実のものになる現象に、すっかり慣れてきていた。

「どうする？　ドーデン帝国の武器、装備だけでも、相当な量を描かないとならないんだろ。市川君、一人でやれるかね？」

山田の問い掛けに、市川は頷いた。市川の顔を見て、山田は眉を上げた。

「なんだい？　何か、魂胆がありそうだな」

市川は山田に向け、素知らぬ顔を保ちつつ、返事をする。

「うん。ドーデン側のメカ設定、山田さんに頼みたいんだ」
山田の表情が、驚きに弾ける。
「おれに、か？　本気か、市川君」
「山田さん、メカも得意だろ？」
「ん、まあ……な！」
山田も市川の真似をして、強いて無表情を装っている。が、目は期待に輝いている。

OK

市川は知っていた。山田は美術監督には珍しく、メカ設定も得意なのを。

たいていの美術監督は、自然や普通の建物を描くのは得意とするが、メカを描くのは苦手な人が多い。それどころか、メカ音痴を公言する美術監督すらいる。

市川は、山田より上の世代の美術監督の逸話を聞いている。アニメ業界に入ると決めた当日、今まで描き貯めた油絵の作品を、庭先で総て燃やした美術監督がいるそうな。

昔の美術監督の多くは、美大卒である。今はアニメ専門学校出が大多数であるが、それまでは油彩や、水彩を学んだ人間がたまたまアニメ業界に入ってくる経緯が多かったらしい。

市川には、自分の作品を焼き捨てる気持ちが、よく分からない。背水の陣といった、何らかの覚悟の表明なのだろうが……。

市川が聞いた話によると、山田は、本当は、イラストレーター志望だったそうだ。それも、ＳＦ小説の挿絵を描くのが夢だったと語っていた。だから、メカニックを描くのも、設定するのも得意だし、好きでもあった。それを市川は知っていたのだ。

「山田さんには、ドーデン帝国側の設定を任して、おれはバートル国の設定をするつもりなんだ。それに【導師】とかいうキャラクターの設定もしなければならないし……。それで、一つアイディアがあるんだが、バートル国側は、竜のような想像上の生き物を使役して攻撃する――ってのは、どうだ？」

山田は「ははあ！」と点頭した。

「なるほど！　剣と弓だけの中世的な武装じゃ、どう考えてもドーデン側の武器と釣り合いが取れないものな！　うん、それなら、絵的にも面白くなる！　木戸さんもＯＫするかもしれないな」

市川は思わず、ぴしゃっ、と自分の額を叩いていた。

「そうか！　すっかり忘れていた！　木戸さん、怒るかな？　おれたちが設定するつもりの武器、装備は、完全にギャグものだからな。木戸さんがシリアス路線を頑固に守るつもりだったら、ヤバいかもな……」

理由

二人が考え込んでいると、ドアを開けて洋子と新庄が入室してきた。洋子の手には、何やら銀食器らしきものを盆に載せて持っている。

洋子は室内に入る瞬間、ちら、と市川の方を見た。が、すぐ視線がそれ、わざとらしく無視を決め込んでいる。

あれから洋子と市川の間には、微妙な緊張状態が続いている。考えてみれば、エリカと市川は近々と顔を寄せて話しこんでいて、あらぬ誤解をされる姿勢ではあった。しかし、こうまで意地になって無視されると、市川も反発を感じざるを得ない。

洋子は努めて明るい口調で、口を開いた。

「これ、サモワールっていうんだって！　徹夜するんだったら、眠気覚ましが必要でしょ。これで、紅茶が沸かせるらしいわよ！」

山田は吃驚した表情を浮かべた。

「そりゃ、元々ロシアの食器だぞ！　そんな設定、おれ、したかなあ……」

市川は新庄を見て、恨めしげな声になる。

「新庄さん。ここは【タップ】じゃないんだぜ。スケジュールは、どんなに延ばしても、誰も何も言わないんだ！　それなのに、徹夜の覚悟させるつもりなのか？」

新庄は首を振り、笑い掛ける。が、目には一欠片も笑いはなかった。

「スケジュールを立てないと、お前ら、頑張って仕事する気にはな

らないだろ！　いいか、明日までだ！　明日まで、何が何でも、設定を終わらせろ！　いいな？」

市川は悟っていた。今まで、何で新庄が、この冒険に加わっていたのだろうと疑問だったが、やっと氷解した。

尻叩きが、新庄の役目なのだ。

悔しい。だが、新庄の決めつけを否定する言葉が、市川には見つからなかった。

天啓

机の上に、設定が次々と現れ、木戸は一枚一枚、とっくりと眺め、怒りが込み上げてくるのを感じていた。

奴ら、いったい、何て馬鹿な設定を起こしやがったのか？　完全に『蒸汽帝国』をギャグにするつもりだ！

絵コンテは終盤に差し掛かり、クライマックスのドーデン帝国軍と、バートル国軍による決戦が近づいていた。

エリカ姫はアラン王子への愛情と、祖国への愛に引き裂かれ、やがて来る破局へ向け、ドラマは一気に盛り上がる……はずだったのだが、肝心の帝国軍の兵器、装備は、まるで見当外れの設定ばかりだ。

これでは、どう考えても、コメディにしかならない。戦闘は、ドタバタ・スラップ・スティックになって、緊張感なんか、一欠片も存在しない。

木戸は設定をむんずと掴み、びりびりと音を立て、引き裂こうと……した。

が、急に木戸の気が変わった。設定書を再度じっくり眺めた途端、新たな展開が頭の中に、まるで稲妻のように閃いたのである。

ふうむ……？

最後の一枚。それはバートル国を支配する謎の【導師】と呼ばれるキャラクターであった。

どうやら【導師】は魔法使いらしい。禍々しい衣装に身を包み、奇妙な台座を占拠している。

木戸の頭の中には、戦闘はバートル国側の敗北に終わり、帝国軍が侵攻する危機に、【導師】が正体を現し、最終決戦にもつれ込む……という展開を思い浮かべていたのだが……。

しかし、どうにも帝国軍の嵩に掛かった戦い方が気に食わず、どうしようかと迷っていた。これでは、ただの戦争賛美アニメになってしまう。

スローガン

しかし、どうにも帝国軍の嵩に掛かった戦い方が気に食わず、どうしようかと迷っていた。これでは、ただの戦争賛美アニメになってしまう。

いや、木戸は戦争を否定する気も、賛成する気もない。ところが、視聴者は上辺だけでも「戦争反対！」というスローガンがないと（表向き）顔を顰めるポーズを取りたがる。

一応は、戦争の虚しさ……厭な言葉だ！　これだけ戦争の虚しさをテーマにしたアニメが多いのは、いかに視聴者が戦争アニメが好きかという証拠だ！　……を、テーマにしないと、後が続かない。

ドタバタ戦争アニメか……。

悪くないかもしれない。それなら、視聴者に対しても「これは、戦争がいかに馬鹿らしいか、訴えるためのアニメです！」と、大威張りで主張できる。

しかも、原画マンは、意外とドタバタ場面が好きである。思い切りキャラクターを動かせるカットが回ってくると、たいてい原画マンは「こりゃ、大変なカットだなあ！」と不平をこぼすが、本当はわくわくしながら作業に入るのである。

絵コンテを描きながら、木戸は戦闘場面を、どの原画マンにやらせようか、考えていた。

こっちの帝国軍は、メカが得意なあいつにやらせよう……。バー

トル国側は、前にファンタジー物で、恐ろしく手の込んだカットを素晴らしい作画で処理してくれた、あいつなら任せられる……。

木戸は頭の中に、それら原画マンの顔を思い浮かべながら、絵コンテ作業を続けていた。

出現

船窓に見えてきた帝国空軍を目にし、市川は信じられない思いに、背筋に戦慄が走るのを感じていた。

本当に出現した！

徹夜で市川と山田はドーデン帝国と、バートル国の戦備・装備一式を設定していた。設定されたメカ設定に、洋子が色を指定して、三村が受け取り木戸のＯＫサインが記されて戻ってきて、ようやく一段落したと安堵した。その一方で、本当に存在するようになるのか、一抹の疑いは拭いきれていなかった。

空中に浮遊する帝国空軍で、一番よく目立つのは、空中空母である。現在、市川たちが乗り込んでいる飛行船を、十隻も格納できる巨大な円盤型の飛行船である。円盤型の船体下部に、放射状に飛行船が格納される仕組みだ。

空母の周りには、護衛のための飛行機が旋回している。空中空母の上部は飛行甲板になっていて、小型の飛行機を発着できるように、カタパルトが装備されている。

空母の背後には、陸軍を運ぶ輸送飛行船の群れが続いている。ずんぐりとした船体で、内部には戦車や、装甲車などを格納でき、もちろん兵士も満載できる。

市川たちの乗り込む飛行船が空母に接近し、格納場所に接舷すると、内部の通路が繋がって、空母に直で行き来できる状態になる。

三村――アラン王子を先頭に、飛行船側から空母内部へと進むと、

そこは艦橋（ブリッジ）だ。

艦橋には、無数の職員が忙しげに駆け回り、びっしりと並んだ無数の計器を真剣な表情で見入り、数値を手元のメモに素早く書きとめている。

向こうでは多分、航法部であろう、巨大な机に地図が広げられ、多数の航法士が定規と、コンパスを手に、航路を書き込んでいる。

艦橋には百人近くの人数が詰め込んでいるに関わらず、ほとんど雑音が聞こえない。みな、額を寄せ合い、囁くように各々の書きとめた数値を報告し合っている。

「アラン王子殿下、ご来臨――っ！」

三村が艦橋に足を踏み込むと同時に、入口近くに控えていた議杖兵が、手にした爵丈の先を、とん、と床に叩いて叫んだ。

途端に、さっと艦橋に緊張感が走り、全員が起立して三村を迎え入れる。

「ああ、そのまま任務を続けてください」

三村は鷹揚な仕草で頷くと、悠然と艦橋の真ん中に進み出た。三村の横には、相変わらずエリカ姫が従っている。

歩み寄った三村に、どっしりとした体躯の、真っ白な揉み上げを生やした、提督の階級章をつけた老人が近づいてきた。慇懃な仕草で一礼して、老人はさっと敬礼をする。

「帝国空軍、空中空母艦長、ボルタ准将であります！　アラン王子殿下の御来光を賜り、恐悦至極で御座います！」

「よろしく……」

短く答え、三村は答礼を返した。

ボルタと名乗った老人は、三村の顔を見てほくほく顔になった。嬉しげに肩を揺すり、歌うように話し掛けた。

「我がドーデン帝国の空軍、陸軍の精鋭が集結いたしましたぞ！　バートル国など、一捻りで負かしてしまいましょうぞ！」

提督の言葉に、三村は少し眉を顰めた。

「准将……。わたくしは、できるなら、バートル国とは友好を取り戻したく、思っているのです。それに、ここにおわすのは、バート

ル国のエリカ姫ですぞ！　お言葉に気をつけていただきたい！」

ボルタ将軍は、目に見えて狼狽した。顔色が真っ赤に染まり、ふつふつと顔に汗が吹き出して全身を硬直させる。

「そ、それは……まことに……失礼……」

しどろもどろになる。

エリカは端然と笑い掛けた。

「いいのですよ、提督閣下！　こうなったのも、わたくしの不徳……。悔やんでも、悔やみきれませぬ。今、願うのは、戦いが早く終わって、再び両国が友好を取り戻すその日が来るよう祈っています」

背後に控えていた市川と、山田は素早く視線を交わし合った。

「どう思う、山田さん？」

市川の問い掛けに、山田はジロリと横目で睨んできた。

「どう思うって、何がだよ？」

市川は顎で、将軍を指し示す。

「あの爺さん、完全に普通の戦いが待っていると考えているらしいな。おれたちの設定した兵器が本当に装備されているなら、あんな言葉は出ないはずだ」

山田は驚きに目を見開いた。

「それじゃ、おれたちの設定は無駄だったと言うのか？　あの兵器は、実際には使われないと、君は主張するのかい？」

市川は微かに首を振った。

「判らねえ……本当に、どうなるのか、おれには、さっぱり判らないんだ……」

とにかく戦いが始まるまでは、何が起きるか誰にも判らない……。

市川は密かに唇を噛みしめていた。

科学考証

会合地点から反転し、ドーデン軍は勇躍、バートル国との戦闘が予想される会戦地を目指して進軍を続けていた。

偵察機を先行させ、バートル国はドーデン帝国との国境付近に集結しつつあるのを確認する。おそらく国境地帯の山岳部を掩蔽（えんぺい）として布陣するのだろう。

偵察機は空中から、バートル国の進軍の様子を克明に撮影して、無線で送信してきた。

泥縄ではあるが、市川と山田は、ドーデン帝国の設定を、社会風俗は十九世紀末で、科学技術は二十世紀始めという設定から、もう少し進んだ、二十世紀中葉頃に設定し直していた。

いや、もしかしたら、もっと進んでいるかもしれない。

二人がいる空中空母の艦橋は、完全な閉鎖式で、外部の眺めは、空母に何箇所も設置されている、テレビ・カメラが撮影した映像を、巨大な平面スクリーンに投影する方式を採用している。

しかもカラーだ！　スクリーンのテクノロジーだけ見れば、明らかに二十世紀末の液晶モニター技術が不可欠である。科学考証に突っ込みを入れたがるマニアの「ほほお……平面スクリーンですか！」という嘲りの声が、市川には聞こえてくるが、目を瞑（つむ）る。

周りの計器は、わざと一九五〇年代のＳＦ映画から脱け出たような、丸い針式で、クラシックな趣きを演出している。しかし艦橋の大部分を占める巨大モニターには、無数の数値や、グラフが外部の景色に同時に表示されていて、そこだけはいかにも、今風のＳＦアニメである。

山田はあくまで十九世紀風の、帆船の内部のような艦橋にすべきだと主張したのだが、やはり、このほうが、実際にアニメになった場合、見栄えがいい。さらにぶっちゃけて内情を曝すと、このような巨大スクリーンを設定しておけば、レイアウトを兼用して、作画枚数を節約できる。

遭遇

「バートル軍、確認！　国境山岳地帯を、縦走しつつあり！　三方向から集結中！　国境警備軍と、遭遇の報告！」

画面が切り替わり、地上の眺望となった。

場面は、国境を守る警備隊の様子を映し出している。地面に長々と塹壕が掘られ、丘の頂上には、所々に監視台が設けられて、数人の兵士が手に双眼鏡を持って、不安そうな顔付きで遠くを眺めている。

空はどんよりと曇り、景色は寒々としていた。

スクリーンを眺めながら市川は、いつも思うのだが、「戦場をモニターする画面を撮影するのは、誰なのだろう？」と考える。送信してくるからには、誰かが危険を犯して、カメラを操作しなければならない。無人カメラであっても、こちらかの指示でパンしたり、ズームする要員が必要である。

空中からの映像では判然としなかった、バートル軍の詳細が映し出される。

ぴょんぴょんと地面を跳ねるように、骨と皮だらけの竜が接近してくる。足はなく、真っ直ぐな尻尾で地面を打って、跳ねている。

竜そっくりだったが、実は巨大なタツノオトシゴだった。タツノオトシゴの背中には鞍があり、手に槍を抱えた兵士が乗っている。

竜騎兵だ！　以前見た重装騎兵ほど分厚い装甲はなく、動きは軽快である。

ずしんずしんと地面が震動し、遠くから巨人が近づいてくる。手

にはごつごつと瘤のついた棍棒を握っている。身体は岩でできた、岩の巨人である。顔付きは魯鈍で、身動きも鈍重だが、無敵の力を誇るバートル国の攻撃の中核だ。

空の彼方からは、透明な四枚の羽根を持った、細長い生き物が接近してくる。巨大な複眼……。蜻蛉（ドラゴン・フライ）だ！　蜻蛉の背中にも、兵士が跨っている。蜻蛉は各々、脚の指に何か、石の固まりのような物を握っていた。

蜻蛉は握っていた石を、ぽとりと落とした。

石はひゅーっ、とまっしぐらに地面に落下した。落下したのは、警備隊の真ん中だった。

ぱかりと石は二つに割れ、中からわんわんと五月蠅く羽音を立て、何かが飛び出した。

わあーっ、と悲鳴を上げ、周りの兵士がばたばたと手足を打ち振り、踊るような足取りになって懸命に何かを払いのける。

石は蜂の巣だったのだ。飛び出したのは、熊蜂、雀蜂、足高蜂など、猛毒を持つ危険な種類の蜂ばかりである。

戦い

バートル軍の前衛が、ドーデン帝国の国境警備軍と衝突し、戦闘が始まる。丘陵の向こうからは、馬に乗った重装騎兵が、津波のように襲い掛かり、さらに後方には魔法使いたちが控えていた。

どかどかと地面を震わせ、岩の巨人が飛び込んできた。手にした棍棒を、唸りを上げて振り回す。棍棒の当たった先は、瞬時に粉々に砕け散る。

ドーデン軍は応戦を開始したが、帝国の誇る近代兵器は、バートル軍の奇妙な軍勢にはまったく効果がなかった。

銃弾を撃ち込んでも、岩の巨人の身体には、まったく効果はなく、跳ね返されるだけだ。

タツノオトシゴの竜騎兵は、ぴょんぴょんと地面を飛び跳ね、銃口の狙いがつけられない。数騎の竜騎兵が塹壕に飛び込み、タツノオトシゴに跨った兵士は、手にした湾曲した刀を滅茶苦茶に振り回す。たちまち、辺りに血飛沫が跳ね飛んだ！

絶叫が、画面の向こうから聞こえる。

ボルト提督は、画面を睨んで歯噛みした。

「糞！　生意気な……！」

提督の近くの司令長官席には、三村がゆったりと座っている。椅子の肘掛けに置いた三村の腕に、寄り添うエリカ姫がそっと手を重ねていた。ボルト提督は、二人の姿を眼にし、慌てて言い直す。

「いや！　敵とはいえ、中々に奮闘しておりますな！　感心、感心……！」

無理矢理どうにか、笑顔を作る。

ボルトは三村に向かい、訊ねかけた。

「アラン王子殿下……。司令長官として、総攻撃のご命令を賜りたく存じます」

三村はボルト提督に顔を向け、頷いた。

「よろしくお願いします。提督」

ボルトの顔が、興奮に赤らんだ。

さっと艦橋に向き直り、全身の力を振り絞って声を張り上げる。

「全軍、総攻撃を開始せよ！」

提督の号令により、艦橋全体にぴん、と緊張が張り詰めた。一斉に要員が手元の送話装置を取り上げ、あらかじめ打ち合わせしておいた命令を次々と部隊に伝達する。艦橋は一時に騒然となり、今までの静けさは、まるで、この時のために溜めていたかのようだ。

市川は艦橋の真ん中に立ち、息を呑んでいた。

いよいよだ……。

いよいよ、本格的な戦いが始まる。

ゼリー

陸軍部隊を運ぶ、輸送飛行船は降下を開始し、国境部隊の背後に着地した。着地と同時に、後甲板の扉が開き、搭載されていた地上兵器が続々と姿を表す。

地上部隊の姿を艦橋のスクリーンで確認して、市川は思わず「やった！」と小さく小躍りして、指を鳴らした。隣の山田も「よしっ」と両拳を握りしめている。

まさに市川と、山田が額を寄せ合い、知恵を出し合って設定した兵器であった！

ごろごろと軋る無限軌道（クローラー）に搭載された、巨大な砲車が最初の兵器だ。バートル側の兵士たちは、ずんぐりとした砲車のシルエットに、ぎくりと一瞬、攻撃の手を休め、まじまじと見上げている。

搭載されている大砲は、奇妙に太い。直径が二メートルは優にあり、砲身の底部は真ん丸く膨らんでいる。

重装騎兵の隊長らしき人物が、片手を挙げ、全体を停止させた。見慣れぬ兵器に、慎重を期したのだろう。

ううーん……、と微かな機械音を立て、大砲が砲台の上で狙いをつける。砲身は思い切り仰角で、ほぼ四十五度になっていた。

バートル国、ドーデン帝国、両方の兵士たちが息を飲み込んで見守っている。

ずばーんっ！

恐ろしい砲声が轟き、砲身から空中に向け、何かが飛び出していく。両方の兵士たちは、呆気に取られ、見とれていた。

狙いをつけられているバートル側の兵士たちも、逃げるという動きを忘れ果てているようだった。

何か、不定形の固まりが空中を飛んでいく。

どすん！　と、意外な大きな音を立て、固まりが地面に落下した。

どよん、どよんと不定形の固まりは、地面を跳ねるような、或いは踊るような動きで、バートル側へと転がっていく。

やっとバートル国の兵士たちは、逃走行動を開始した。何か判らないが、危険を感じたのだろう。

ずばん、ずばっ！　と、立て続けに砲身から、不定形の固まりが空中に発射された。不定形の固まりは、全体として、やわやわとゼリーのような質感を持っていた。地面をぶよん、ぶよんと何度も跳ねて、まっしぐらにバートル側へ転がった。

別人

すでにバートル国の兵士たちは、泡を食って退却を開始していた。しかし、転がっていく不定形の固まりは、意外な速さで接近していく。

固まりはねばねばとして、粘液のような性質を持っているらしく、転がっていく途中の小石や、砂利を吸いつけていく。

べちゃっ、と固まりが兵士たちの上に覆い被さった。

うわあーっ、とバートル国の兵士たちから悲鳴が上がっている。ぐちゃぐちゃ、ねちゃねちゃした不定形のゼリーに絡め取られ、兵士たちはもがいている。

だが、足がべっちょりとした粘液に取られ、身動きがほとんどできないでいる。

味方の窮地を見て、粘液の攻撃を免れた他の兵士たちが駆け寄り、助け出そうと悪戦苦闘する。

しかし、粘液の吸着力は恐ろしいほど強い。引っ張り出そうとするが、ゼリーはゴムのように伸張して、救出の努力を完全に邪魔している。バートル軍の主力である、岩の巨人も粘液に捕まり、無力にされてしまっている。

スクリーンに見入っていたボルト提督は、背を反らし、思い切り高笑いを続けていた。

「わっ、ははははっ！　見ろ、あの見っともない格好を！　いい気味だ！　あれでは、どうあっても、脱出はできまい！　ゆっくり料理できるわい……」

司令長官の椅子に座っている三村と、隣のエリカ姫は黙りこくり、ひっそりと見守っている。顔には一切、感情を表していない。

ボルト提督は、ちらっと二人を見て、慌てて目をスクリーンに戻した。

市川は、三村とエリカ姫の二人を見上げ、何か冷やりとした感覚に襲われた。

三村は、もう、完全に別人だ。かつての、オドオドとした、臆病そうな瞳は、今の三村の目には、欠片も浮かんではいない。

身も心もアラン王子になり切っているのだろうか？

すらりとした上背に、彫りの深い顔立ち。高い鼻と、ほっそりとした顎をした姿を見るたび、市川の心に「気をつけ！」と促す衝動が走る。思わず、背筋を正したくなる自分の気持ちを、市川は無理矢理どうにか押さえつけた。

あいつは、ただのアニメの制作進行じゃないか！　何の怯みがあるものか！

「おい！」と、隣で呆けたようにスクリーンを注目していた山田が声を掛けてきた。
「戦いが始まるぞ……」
市川は、慌ててスクリーンに視線を戻す。
バートル兵士の半分ほどが粘液に絡め取られのを見て、ドーデン帝国軍は勢いを取り戻した。輸送飛行船から飛び出した味方の兵士たちと合流して、反撃に転じる。
輸送飛行船から飛び出したのは、軽快そうな動きを見せる四輪車であった。四輪車の屋根には、機関砲そっくりの武器が搭載している。
四輪車の周りには、国境警備隊と、輸送飛行船に乗り組んでいた歩兵隊が付き従い、じりじりとバートル側に向けて進軍している。バートル側も、ドーデン帝国軍の動きに気付き、無事な部隊が隊形を整え、迎撃の構えを取った。
四輪車の屋根には、機関砲を操る兵士がいる。兵士はバートル側に向け、機関砲の筒先を向けた。
機関砲が火を噴いた。
ぽんっ！　ぽぽぽぽっ……ぽんっ！

いやに軽い音を立て、機関砲から真っ白な蒸汽が吹き出した。これは蒸汽の力で弾丸を発射する、蒸気機関砲なのだ。
機関砲の筒先からは、真っ白な弾丸が飛び出していく。真っ白な弾丸は、バートル軍に飛び込んでいった。

べちゃっ！　べちゃっ、と真っ白な弾丸が、バートル軍の兵士にぶち当たる。
兵士たちは帝国軍の攻撃に、ポカンとした顔を上げ、お互いの顔を見合っていた。表情には、大きく疑問符が浮かんでいた。

全然、応えない。

べちゃっ！　もう一度、白い固まりが兵士たちの顔を汚す。兵士はたらたらと顔に垂れて来た液体を手で拭い、べろりと舐めた。

「パイだ！　こりゃ、ただのパイ・クリームだぜ！」
一人の兵士が、大声を上げた。
べちゃっ、と大声を上げた兵士の顔に、もう一度べっちょり白いパイがへばり付いた。
たちまちバートル軍は、真っ白なパイ・クリームに包まれてしまった。

「糞ぉっ！　奴ら、ふざけているのかっ！」
クリーム攻撃に怒ったバートル軍は、接近してくるドーデン軍に向き直った。兵士たちは思い思いに手に剣を持ち立ち上がる。

つるり！

「うひゃっ！」
「あ、歩けないぞ！」

口々に言い合う。

もはや、地面が見えなくなるほど、一面の真っ白なクリームに埋もれている。クリームが滑り、バートル軍はまともに動けなくなってしまっている。

進もうとするが、足はべっとりと広がったクリームの上で、虚しく足掻くだけだ。

襲い掛かるドーデン軍は、歓声を上げていた。

バートル軍の兵士たちの顔に、恐怖が浮かんでいた。殺戮の予感！

しかし、身動きが不自由になるのは、ドーデン軍も同じだった。血に飢えた兵士たちは、真っ白なつるつる滑るクリームの上で、あっちにうろうろ、こっちですってん！　もはや、戦いではない！　戦いの帰趨を見て、苛立っているのは、ボルト提督も同じだった。ばんばんと音を立て、手近の机を何度も叩き地団駄を踏んでいた。

「何と言う阿呆らしい戦いだ！　これは、まともな戦いとは、言えん！　いったい、誰がこのような馬鹿らしい兵器を持ち込んで来たのだ？　処分してくれる！」

「わたしだ」

氷のような冷静な声が、茹蛸（ゆでだこ）のように真っ赤に上気した提督の顔を、一気に白くさせる。提督は驚きの表情を浮かべて、長官の椅子に腰掛けている三村――アラン王子を見上げた。

「王子殿下が持ち込んだと仰るのですかな？」

提督の呆れ声に、三村は静かに頷いた。

「そうです。わたしがあの新兵器を試すよう、手配したのです。この戦いは、なるべく犠牲者を出さぬよう、工夫したつもりです。何かご不満でも？」

提督は、たらたらと汗を額から噴き出させた。

「い、いや……王子殿下、おん自らのお考えとあれば、わたくしは何も……」

三村は顔を挙げ、スクリーンに向き直った。

「提督、よく御覧なさい。戦いの決着をつける、最終兵器が登場しますよ」

「最終兵器……」

三村の「最終兵器」という言葉に、提督は瞬時に気色を取り戻した。提督の頭の中には、敵を一挙に葬り去る、恐ろしげな武器の姿が浮かんでいるのだろう。

市川は密かに北叟笑(ほくそ)んだ。

お生憎様！　三村の言う「最終兵器」とは、とてもとても、そんな恐ろしげな兵器であるものか！

もっと馬鹿らしい、もっと途轍もなくとんでもない、市川と山田が頭を捻って設定した兵器なのだ。

楽しみだ……。

市川は一人、ニヤニヤ笑いが浮かぶのを抑えきれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3650v/

アニメのお仕事・改

2011年10月26日08時07分発行